

David Lloyd Roberts

デビッド・ロイド・ロバーツ

STAYING ALIVE

ステイイング アライブ

safety and security guidelines
for humanitarian volunteers
in conflict areas

紛争地域における人道援助機関の要員の
安全確保と危機管理ガイドライン



ICRC

デビッド・ロイド・ロバーツ

STAYING ALIVE

ステイイング アライヴ

紛争地域における人道援助機関の要員の 安全確保と危機管理ガイドライン



ICRC

赤十字国際委員会

International Committee of the Red Cross

19 Avenue de la Paix

1202 Geneva, Switzerland

T +41 22 734 6001 F +41 22 733 20 57

E-mail: icrc.gva@icrc.org

www.icrc.org

© ICRC, 1999

改定・最新版 2005

妻、シャーリーに捧げる。

警告：本書は紛争地域における要員の安全と危機管理のための数々の指針を記載している。しかしながらこれらの指針は全ての状況に合ったものではなく、一般的な助言として述べているに過ぎない。したがって、本書に述べられたことが最善の助言でなかった場合にも、赤十字国際委員会は一切その責任を負わないものとする。

目次

謝辞	11
著者について	13
前書き	14
序章	16
第1章： 要員個人の危機管理	19
適応	19
質問をしなさい	20
あなたの常識と判断を活用しなさい	20
自分の健康を守ろう	20
集団での安全確保と危機管理	21
目的	21
第2章： 現代の紛争とあなたが直面するだろう	
そのさまざまな状態	23
国際武力紛争	23
非国際武力紛争	24
国内騒乱・緊迫状態	25
現代の紛争のさらなる特徴	26
直接標的としての人道援助機関	28
人道援助機関と軍との役割分担の不明瞭化	29
「心」を得るとのこと	30
統合作戦	31
強盗と他の犯罪行為	32
こども兵	32
第3章： 国際人道法によって得られる保護	33
国際人道法を理解する	33
人道援助	34
地雷と爆発性戦争残存物	35
安全地帯	37

第 4 章： 要員の安全確保と危機管理に対する重大な脅威	39
地雷による脅威	39
対人地雷	39
対戦車地雷	42
地雷の脅威への対処方法	43
対人地雷への対処方法	43
対人地雷の危険性が最も高い場所	44
対戦車地雷への対処方法	47
大砲、ロケット砲、迫撃砲の脅威	49
大砲	49
迫撃砲	50
これらの砲の使われ方	50
大砲と迫撃砲の脅威への対処方法	52
狙撃兵とライフル銃の脅威	53
狙撃兵とは？	53
狙撃兵の目的とは？	54
狙撃兵の用いる装備は？	54
狙撃兵の脅威への対処方法	54
警告射撃	57
待ち伏せ攻撃の脅威	58
待ち伏せ攻撃への対処方法	58
待ち伏せ攻撃に遭遇したら	59
待ち伏せ攻撃直後の現場に遭遇したら	59
手製（簡易）爆発物の脅威	60
手製爆発物の脅威への対処方法	60
手製爆発物の危険を回避、軽減する方法	61
手榴弾の脅威	62
手榴弾の回避方法	63
擬装爆発物 (booby trap) の脅威	64
擬装爆発物を回避する方法	64
不発弾の脅威 (unexploded military ordnance: UXO)	64
不発のクラスター（集束）爆弾	65
不発弾を回避する方法	66

劣化ウラン弾の脅威	66
劣化ウラン弾を回避する方法	67
空からの脅威	67
空からの脅威への対処方法	68
第 5 章： 化学兵器、生物兵器、放射能、核兵器の脅威	71
大局的な視点	71
CBRN の脅威の種類	71
化学兵器戦に使われる物質	71
有毒性工業化学物質	72
生物兵器戦に使われる物質	72
放射性物質と核兵器にまつわる事件	72
CBRN の脅威からの防護	72
脅威の状況評価	73
探知	73
医学的対応策	74
即応訓練	75
住居の防護対策	75
個人用防護装備	76
汚染除去	77
第 6 章： あなたの安全を確保するその他の方法	79
我々は軍隊、治安部隊、現地の党派、そして現地住民から どのように見られているのだろうか？	
彼らは我々に対してどのようにふるまうのか？	79
軍人の視点	80
紛争地域の兵士が直面する複雑な状況	81
特筆すべき例外	83
民間警備会社	83
軍隊による護衛	84
組織の広報活動	85
武器と車両	85
警告か妨害か？	86
民間人への態度	87

チェックポイント / 道路封鎖	89
計画の立案、事前説明、任務報告	92
計画の立案	93
事前説明（ブリーフィング）	94
任務報告（ディブリーフィング）	95
保安に関わる事件の報告と統計	96
注意しなければならない問題	97
事件報告	98
（事件）直後の報告	98
続報（追加報告）	99
第7章：あなたの安全確保のための受動的防護策	101
あなたとあなたの建物を守るには	101
材料と工具	102
砂袋の積み上げ方の基本	104
防護壁、シェルター、その他の障壁物	106
防護壁	106
シェルター	107
その他の受動的防護策	110
建物の選定	112
個人用防護装備	114
防護ジャケット (flak jacket)	115
防弾ジャケット (ballistic jacket)	115
ヘルメット	116
装甲車両	117
車両を防護する他の方法	118
車両と運転技術	118
四輪駆動車	119
運転	121
個人用品	123
カメラについて	124

第8章：	安全確保と危機管理のための計画立案	127
	オフィスや代表部の代表としての役割	127
	基礎的な留意事項	127
	ストレスマネジメント	129
	不測事態対応計画と撤退計画	130
	長期残留計画	132
	撤退計画の立案	133
	部分撤退	134
	完全撤退	135
	火災予防	135
第9章：	特殊な状況	139
	孤立状態とは	139
	孤立状態を耐え抜くには	140
	人質として生き延びるためには	141
	拉致（誘拐）	142
	拉致された後	142
	健康管理	142
	拉致者との関係	143
	交渉	143
	解放	144
	人質として生き延びるためのチェックリスト	144
第10章：	応急処置（ファーストエイド）	147
	脅威の種類	147
	損傷パターン	148
	体系的な対応	148
	治療	149
	気道の確保、呼吸の確認、循環の確認 (airway,breathing and circulation)	149
	骨折と熱傷	150
	心肺蘇生法	150
	装備品	151

第11章： 派遣中の健康管理	153
予防接種	153
救急キット、備品、機器	154
感染症、寄生虫、咬傷の治療	155
マラリア	155
デング熱	156
ウイルス性出血熱	156
肺炎と呼吸器感染症	157
皮膚と創傷感染	157
犬や他の動物による咬傷	157
急性下痢症	158
熱病	158
極度の気候	159
高所	159
低温	159
高温	159
事故を回避する方法	159
交通事故	160
遊泳	160
宿舎とオフィス	161
参考になるウェブサイト	161
第12章： 通信	163
VHF 無線	164
VHF 無線活用のコツ	164
無線アンテナ	165
デッドスポット（受信困難地域）	166
HF 無線	168
衛星通信機器	169
携帯電話	170
インターネットとコンピューター	171
表音文字	172

謝辞

著者は本書を出版するに当たり、多大な援助と励ましを与えてくださった以下の方々に感謝の気持ちを表したい。

本書の出版の機会を与えてくれた赤十字国際委員会（ICRC）。

ICRC を退職したフィリップ・ディンド。彼の励ましにより初版発行に至った。そして現在の危機管理担当であり、第二版発行のアイデアを与えてくれたパトリック・ブルッガー。

編集と出版に協力してくれた ICRC 報道部の出版部長セリ・ハモンドとスタッフ。

ICRC インフォメーションシステム・オペレーションコーディネーターであり、通信についての章に貢献してくれたポール・ウエルリ。

ティモシー J. ホジェッツ大佐（QHP, OstJ, MBBS, MMed, FRCP, FRCSEd, FFAEM, FIMCRCSEd, FRGS, L/RAMC）英国陸軍軍医。
「第 10 章 応急処置」の著者。

テッド・ランケスター医師（MA, MB, B Chir, MRCP, Ct）インターヘルスの健康管理部長。「第 11 章 派遣中の健康管理」の著者。ランケスター医師は“The Traveller’s Good Health Guide”及び“Travel Health in Your Pocket”の著者でもある。同僚とともに彼は英国赤十字社及び国際的な NGO の健康管理アドバイザーを務めている。

ケン・ロバート少佐。CBRN 関連及び人道援助 / 災害救援の経験を生かし、英国陸軍に環境保健武官として勤務。そして、UK Health Protection Agency のヘルスエマージェンシー プランニング オフィサーであるアンシア・サニアシ女史¹。化学、生物、放射性物質、核兵器の脅威の章の執筆に協力してくれた。

エリック・ビュッシュ。初版の時と同様、彼のイラストとグラフィックに感謝。

1 Extreme emergencies: Humanitarian assistance to civilian populations following chemical, biological, nuclear and explosive incidents – A Sourcebook ITDG Publishing, 2004 の著者

著者について

デビッド・ロイド・ロバーツ氏 (MBE, LLM) はサンドハーストの王室陸軍士官学校卒業後、1966年に英国陸軍パラシュート連隊に配属された。陸軍での任務を通じ、様々な紛争地域、戦争の現場で活動する。その勇敢な功績により、1972年に女王陛下より叙勲を賜り、さらに1978年に英陸軍殊勲報告書に氏名が記載された。1977年にはオーストラリアのクイーンズクリフのアーミー・スタッフ・カレッジで学んだ。英国エセックス大学の国際人権法、法学修士の学位を取得しており、エセックス大学人権センターの評議員、ロンドンの名誉市民でもある。

1993年に陸軍を退役し、危機管理顧問としてICRCに加わり、2年後には軍隊を対象に国際人道法の普及活動をする部署に異動した。彼はアブハジア、アフガニスタン、アンゴラ、アルメニア、アゼルバイジャン、バングラデシュ、ブルンディ、カンボジア、中国、東チモール、エリトリア、エチオピア、旧ユーゴスラビア、フィジー、グルジア、インド、イスラエル及び占領自治区、モンゴル、ネパール、北朝鮮、パキスタン、パプア・ニュー・ギニア、フィリピン、ルワンダ、ソマリア、スリランカ、台湾、ザイールでのICRCミッションに従事した。

ロバーツ氏は軍人として、また、人道援助機関の一員として、武力紛争を目撃してきた。本書は彼の独自の経験を基にして、人道援助機関の要員に対し、彼らがより安全にかつ確実に重要な任務を遂行できるように指針を与えるものである。1999年に出版された初版の“Staying Alive”の成功に引き続き、この改定・最新版では、化学物質による危害、生物学的な危害、放射性物質や核兵器の危険性などの新たな展開を見せる脅威に対応すると共に、応急処置（ファーストエイド）、派遣中の健康管理、国際人道法によって得られる保護等の新しい章も含んでいる。

彼は本書の他にも、インド軍のための戦時国際法ハンドブック（1996）、戦時国際法の軍事訓練に関する論説（International Review of the Red Cross, No.319, July-August 1997）、2002年にICRCが刊行した全12章にわたる軍隊のための訓練マニュアルである“The Law of Armed Conflict”などを著している。

ロバーツ氏は2003年にICRCを退職し、現在は人道援助機関における国際人道法、人権法および危機管理のコンサルタント及び講演者として活躍している。

前書き

危機管理は人道援助活動に携わるものにとって重要な関心事である。赤十字国際委員会（ICRC）はその要員に対し、危機管理に関する全ての可能な訓練と指針を与えたく思っており、それがデビッド・ロイド・ロバーツによる本書の目的である。

ロバーツ氏は1993年、3ヶ月間の契約でICRCに加わったが、先日、常勤の職から退職した時には、3ヶ月のはずが11年間の長期に及んでいた。ロバーツ氏はICRCに対し、現代の紛争地域における実用的な危機管理と安全確保の方法を助言した。氏の軍人としての広範囲にわたる経験と人道援助機関における活動で得た知識は、年を追って、ICRCにこの分野における少なからぬ進歩を可能にした。さらに彼は武力紛争法の知識の普及を軍人を対象に行うと同時に、緊急時の危機管理ミッションにも関わった。

1999年、彼は提案を受け、とりわけ紛争地域で活動する人道援助機関の要員を対象に、危険について述べ、安全確保のための指針を与えた本書を執筆することになった。脅威に対する見極め、安全確保の概念、危機管理の概念など、より一般的な事柄は、すでに濃厚な内容の本書をさらに重たくしてしまうことになるため割愛した。さらに著者は本書の内容をICRCがその特異性により寄与することができる分野にとどめている。

完成した“Staying Alive”初版は大成功をおさめ、さらなる必要性からICRCはロバーツ氏に改定・最新版の執筆をお願いすることとなった。その結果が本書である。初版の成功をもたらした要素は全て残しており、特に、実用的なアドバイスをユーザーフレンドリーに提供する手法はそのままである。その豊富な情報はICRCの要員だけでなく、他の人道援助機関の要員にも役立つものである。危機管理に関する問題への大きな関心は、時には事件を回避する手助けになり、多くの場合は事件の悪影響を軽減することに役立つであろう。

この第二版では、絶えず変化している、人道援助機関が活動する紛争を取り巻く環境、例えば核、化学、生物兵器などの新しい脅威を反映させており、加えて、初版では言及できなかった、国際法による人道援助機関の要員に対する保護や、実用的な救命・応急処置など、幅広い分野に対応している。通信の章では、携帯電話などの近代的な機材の使用法についてのアドバイスも述べている。

本書の作成のために惜しみなく時間を費やしていただいたデビッド・ロイド・ロバーツと、その他の執筆者の方々に対し、私は感謝の意を表したい。本書が ICRC の要員及び他の人道援助機関のスタッフの安全の向上に重要な役割を果たすことを私は願ってやまない。

A handwritten signature in black ink, appearing to read 'Jakob Kuller', written in a cursive style.

ヤコブ・ケレンバーガー
ICRC 総裁

序章

最初に述べるべき大切なことは本書の題名と目的だろう。本書は特定のNGO（非政府組織）や人道援助機関のために書かれた物ではない。どの組織も固有の規則や規定を持っており、読者は確実にそれを実行することを求められている。本書の目的は、紛争地域で活動する我々に共通に当てはまる安全確保と危機管理の特徴について述べることである。本書は我々が直面するであろう危険や活動に対する脅威を素人にもわかりやすく説明することを目指している。

本書の説明を通して、紛争地域での人道援助活動にまつわる誤解や俗説をなくすることができるだろう。もちろん危険は常に存在するが、あなたが危険に対する基本的理解を持っているならば、それらの危険を回避することが可能になり、少なくとも危険度を大幅に減少させることが出来るようになる。昔から言われているように「知識は恐怖を一掃する」のだ。あなた自身があなたの安全確保の最終的な責任者であるのだから、これらの知識は、あなたとあなたの指示下にある人にとっての危険度の許容性を見極めるために役立つだろう。

人道援助機関の要員（とりわけ新人）は過剰とも言える助言、規則、規約、チェックリストなどを（紛争地域にたどり着く前から！）与えられる。私の意図はあなたにさらなる精神的重荷を与えることではもちろんない。逆に、そのような規則などの要点を、一冊の簡単で便利な本にまとめることである。

ここで本書のなかで使用されている用語について少し説明したい。

指針

指針は規則ではない。これは重要なことである。規則はあなたの所属する機関で交付・適応されるものだ。例えば「どこそこでは夜間の運転を禁止する」とか「外出禁止令下では何時から何時までは宿舎から出てはいけない」などで、これらは明確であり、従わなければならない。

一方、指針とはあくまでも指針であって、一般的な状況において与えることの出来る最良の助言でしかなく、全ての問題に対する決定的な答えとはなり得ない。例えば、至近距離の砲撃に遭遇した場合、最善の指針は車両から降りて身を庇うことだが、もし前方20mに山をくり貫いたトンネルを発見したならば、躊躇することなくアクセルを踏み込んでそこに避難すべきだ。したがって本書に書かれた内容にあなた自身の分別と判断を加えて行動していただきたい。

本書で述べられた指針が、例えば「地雷には触れるな」のように明らかにルールが変わるときがある。そのような場合は「してはならない」という表現で明確に示そう。

あなたは志願した

あなたはあくまで自分の意思で、この仕事に志願したことを忘れてはならない。紛争地域には必ず危険が存在する。あなたは自分自身のためにその危険を理解し最小限にとどめなければならない。

紛争地域

本書の内容は紛争地域のみ限定している。取り上げた内容はかなり限定されており、他の広義での人道援助活動、例えば災害救援なども網羅するものではない。とは言うものの現代社会では比較的静かで穏やかな場面が一瞬にして暴力的な状況に変貌してしまうことがあることを忘れてはならない。また犯罪に対する基本的な安全対策、無線交信の利用方法、防火対策などは、紛争地域に限らず、あなたがどこにしようとも必要な課題である。

本書が紛争地域での救援活動で活躍するあなたにとって少しでも役立つことを願ってやまない。

現地採用スタッフ

本書は人道援助機関の派遣要員のためばかりでなく、現地採用スタッフのためのものでもある。

要員とその機関の安全性は以下に述べる相互に関係する要素如何によるものが今では一般的に認められている。

- どのように我々が受け取られているか、そして現地の住民に受け入れられているかどうか
- 個人としての我々の態度やふるまい
- 説教をする代わりに意見を聞く能力、我々の考えを伝える能力、専門家にふさわしい行動をする能力

第1章

要員個人の危機管理

すでに述べたように、あなたは自分自身の意思によって自発的に紛争地域で活動することにした。慎重なあなたはじっくりと考えた。決して安易に考えてはいないはずだ。紛争には危険が伴い、紛争はゲームではないのだから。全ての人道援助機関は要員の雇用契約に何らかの形で、「要員はその任務に伴う危険を受け入れること」という項目を掲げている。多くの組織は要員に初歩的な訓練や事前説明を与え、派遣先での手続きを通して、あなたが十分に準備が出来、現地でも保護をしてもらえるように最善の努力をしている。

適切な訓練と支援を得たあなただが、では自分自身では何をしたらよいのだろうか。

適応

あなたは普段の生活と行動を、派遣先での新しい状況に合わせて変えなければならない。言葉で言うのは簡単だが、一体どのようなことなのだろうか。

まずあなたが置かれた状況を正確に理解し、それから必要な適応をしよう。例えば、天気の良い土曜日の朝、故郷の町のメインストリートを歩いている自分を想像してみなさい。週末に思いを馳せ、当然のことながら、何も考えずにリラックスしている。あるいは職場から家への帰り道、車を運転している。ラジオから聞こえてくる心地よい音楽を聴きながら、忙しかった今日一日を思い出している。こんな日常の出来事のなかであなたは今、正確にどこを走っているのだろうかなんて考えもせず、ただいつものように無意識に車を走らせている。

ところがあなたが経験する新しい状況下では、自由に週末を過ごせることが稀であるだけでなく、故郷と同じように行動することは到底出来ない。

派遣先ではあなたの周辺で何が起きているのかを常に正確に意識化しなければならない。警戒しなければならない。常に先のことを考え、問題や起こりうる危険を回避しなければならない。今自分がどこにいてどこに向かっているかを確認しなさい。迷ってしまうのは危険だ。移動中常に周囲の状況に注意を払い、事が起こった場合どこに身を隠すことができるか、避難できる場所があるか否かを考えておく。これらの事柄はこれまでのあなたの日常生活や行動では決して考えられなかった大きな相違点だ。もしあなたがこのような環境に対し、意識的に適応しようと努力すれば、驚くほど早く適応することが出来、その結果新しい派遣先でより安全に過ごすことが可能となる。

質問をしなさい

新しい環境についての知識を求め、あなたの安全を脅かすものについて人々に尋ねなさい。

救援活動中の混乱の中では、新たに着任した要員には時として十分な状況説明が与えられないことがある。そのような場合でも質問することをためらったり、遠慮したりしてはいけない。上司、同僚、現地職員、現地の人々あるいは軍関係者にさえも積極的に質問しなさい。少しでも多くの情報を得ることが、あなたが現場で身の安全を確保するための最良の方法なのである。

あなたの常識と判断を活用しなさい

安全の確保に疑問を感じたときは、決してそのまま行動を続けて、運を天に任すようなことをしてはいけない。あなたも他の人と同様に、「直感」、あるいは「ガッツ・フィーリング」と呼ばれる重要な能力を持っている。それを使いなさい。何かがおかしいと感じるのは、一種の警報である。もし、ある任務、あるフィールドトリップの危険が大きすぎると感じたら、上司や現地職員と相談しなさい。場合によっては任務やフィールドトリップを延期する勇気を示すことは、あなた自身と現地職員、ドライバーを生命の危険に晒すことよりも、よほど賢明な行為である。

明日は明日の風が吹く。再度安全を確認し容認できる危険度になったら改めて任務を再開しなさい。英雄気取りは映画の中だけで十分だ。英雄になろうとしたがためにあなた個人の不幸な結果を招いたり、救援活動そのものが存続できなくなったりすることすら起こりうる。紛争の犠牲者を後日助けるためには、まずあなた自身の保護、安全確保を最優先することが必要となるときがある。

自分の健康を守ろう

いつかの時点で、必ずあなたは厳しい状況下での労働と生活にストレスを感じることになる。これは極めて自然なことで、例えば規則正しい食事、十分な睡眠、適度な休暇を過ごすことなどによりかなり緩和することが出来る。

しかし実際の現場ではこの極めて単純な助言がしばしば無視される。「私にはそんな助言は必要ない。何をすべきか、自分のことは自分が一番よく知っている」・・・でも死ぬほどタバコを吸ってしまう、食欲が無い、いらいらする・・・それでもあなたは大丈夫と言い切れるのだろうか？ 注意しなさい。そんなあなたが一番危ない。

仕事の質は急速に低下していくだろう。同僚にとってあなたは重荷になり、救援するために来た人々を助けることができなくなるだろう。

集団での安全確保と危機管理

本著は個人の危機管理を目的にしているため、集団での安全確保について長々と述べることは避けたい。

しかしながら、集団そのものが安全確保と危機管理について意識していなければ、その中の個人は危機に晒されることになる。集団の構成員は安全対策を、使命を達成するために役立つ仕事道具のひとつと理解しなければならない。リーダーは自ら模範となって安全対策を行い、要員全員の危機管理と安全確保に多大な関心があることを示す必要がある。

活動地域に存在するであろう脅威を特定し、いかにしてその脅威に対処するか、その脅威を最小限に抑えるかなどをグループ内で協議することが重要である。

グループ内で安全に関する重大な情報を共有するシステムを作らなければならない。例えば、事あるごとに状況報告し、協議をし、事件報告をすることである。

危機管理は全員にとっての重大事である。そのために必要なものは、普段の姿勢であり、安全性についての分別である。

目的

最初に活動目的を明確にし、次にその達成を左右するかもしれない安全上の問題について考えなさい。

例えば、「誰を助けたいのか、どちら側の紛争当事者と関係を結ぶことが不可欠か」など自問自答しなさい。それらの答えからあなたの目標達成にいたるまでの考えられる危険性、脅威を認識することができ、より危険度の少ない、安全な活動計画を策定することが可能となる。

第2章

現代の紛争とあなたが直面するだろうその さまざまな状態

あなたが活動することになる紛争地域の状態は非常に幅広く、複雑で混乱した側面を持っており、人道援助機関の要員のみならず時には交戦の当事者が戦いの目的を見失ってしまうことすらある。自由や自治などのための闘争という高貴な目的が、金銭欲、野望、権力欲、麻薬取引、単なる犯罪行為、強盗、過激主義などに置き換えられてしまったこともある。

我々自身のために状況を簡略化してみよう。国際法の解釈では、あなたが直面するかもしれない紛争には3つの広義のカテゴリーがある。これら3つのカテゴリーのどれにおいても、テロ行為、過激思想、暴動などのさらなる暴力行為の脅威に晒されることがある。

国際武力紛争

国際武力紛争はある国家が他の国家に対し武力を行使したときに発生する。この用語は全面的あるいは部分的占領行為のすべてに適用される。国際武力紛争は敵対行為あるいは領土の占領行為が終了したことをもって終結したと見なされる。紛争の規模は大きいのが、人道援助機関にとっては比較的対応し易い状況と言える。紛争当事者は双方共に容易に識別でき、軍服も異なる。戦闘の前線ははっきりしており、軍隊は明確な指示命令系統を持っている。救援物資の安全な輸送のためなどに、あなたの現在位置や移動方向を全ての紛争当事者に通達する連絡手段を確保することはさほど困難ではない。人道援助機関は通常はその存在を広く知らしめることができ、組織の標章を用いることにより我々は怪しまれることなく、はっきりと認識されることができると。

一般的に交戦国双方共に国際人道法の遵守義務を認識し、それを尊重しようと努力はするが、常に例外は存在する。国際武力紛争にはジュネーブ諸条約及び追加議定書のすべてが適用される。したがって人道援助機関にとっての国際紛争の特徴とは

- ・ 標準的な人道援助活動が可能
- ・ 危険度は比較的低い
- ・ 低いレベルの紛争に比べて活動への障害は少ない
- ・ 安全は主に、信頼できる情報、組織の高い認知度と容認度に基づき、

それらを強化することで確保される

非国際武力紛争

非国際武力紛争（国内武力紛争とも呼ばれる）は、一国内の領土で行われ、他国の武力介入を伴わない。政府軍が反体制組織、対抗勢力、造反勢力などに対し武力を行使するケースもあるが、必ずしも政府軍の関与のないままに2つ以上の武装勢力が領土内で戦闘している場合もある。国内対抗勢力が指揮系統、領土の支配の面でよりよく組織化されているため、継続的かつ組織的な軍事活動を行うことができ、法を執行できる状況では、適用される国際法の条項が少々異なる。ただし、それは政府軍がその紛争に介入している場合に限られる。非国際武力紛争においては、紛争当事者はジュネーブ諸条約共通第3条に含まれている基本的人道の規定に関する国際法を適用しなければならない最低限の責務を負う。これらの規定は1977年のジュネーブ条約第二追加議定書によって発展、追加されている。共通第3条及び第二追加議定書は政府と対抗勢力を問わず、武力紛争の当事者すべてに対し平等に適用される。

この状況は人道援助機関の要員にとってより複雑である。対抗している勢力を容易に識別することは困難で、しかも戦闘員全てが軍服を着用しているとは限らない。相手組織との接点となる人も、政府側であれば申し分ないが、対抗勢力の場合には、多分彼ら自身の安全確保のために、簡単には会えないことが多い。例えば救援物資の輸送を行う場合、対抗勢力の合意と許可を得る必要があるが、責任者と接触するまでに時間がかかってしまうこともある。

一般的に戦闘員は人道援助機関の要員に対してある程度の敬意を持っているが、今日の世界では状況はより不明瞭になってきている。はっきりした前線さえ存在しなかったり、急激に変化したりする。当然こんな状況は我々にとって危険極まりない。大規模な戦闘も行われるが、むしろこの種の紛争におけるもっと一般的な特徴は、我々が知らず知らずのうちに銃撃戦の真っ只中に立ち往生してしまうような、ヒット・アンド・ラン形式の小規模戦闘である。使用される兵器も航空機から地雷まで、多種多様だ。

我々にとってこれらの状況下では

- ・標準的な人道援助活動の可能性も残っている。
- ・危険度は増大する。
- ・何が起こるかの予測は難しい。
- ・相手組織との接触はさらに難しい。
- ・我々の活動への障害多し。より多くの制約、複雑で時間のかかる交渉、さらなる規制、遅延が強いられる。

- ・信頼できる情報の入手、認知度、容認度の向上が依然として重要であるが、さらに困難になる。

国内騒乱・緊迫状態²

法律用語では、低いレベルでの国内暴動は「国内騒乱及び緊迫状態」と呼ばれる。軍隊はこれを「国内治安維持活動」と呼ぶ傾向にある。この状況下では国際人道法は適用されないが、国際人権法と規範、さらに当事国の国内法が適用される。

これらの状況の典型的特長は以下の通りである

- ・暴力的なデモンストレーションや暴動
- ・大量の逮捕者
- ・治安維持の理由による多人数の拘留
- ・長期にわたる行政上の抑留
- ・抑留者に対する虐待や拷問、長期間に及ぶ隔離
- ・自由を拘束された人々の親族に対する抑圧的な措置
- ・（緊急事態宣言による）基本的な司法の保護の事実上又は法律上の停止
- ・追放する、指定した住居に居住させる、移住させるなどの、個人の自由に対する大幅な制限
- ・強制失踪の可能性
- ・無力な人々を危険に陥れるような暴力行為（財産没収や人質事件）の増加、あるいは民間人の間でのテロ行為の拡大
- ・抑留者及び被疑者を代弁する報道関係者や弁護士、あるいは抑圧の事実に対する注意を喚起する他の者に対する嫌がらせ
- ・非合法の殺人の可能性

暴力行為は、武装したギャング団から、強盗集団、過激派、政府軍に対抗する市民の暴力的な一派まで、様々な集団によって行われる。暴力行為の性質を予測することは困難だ。民兵も、ギャングも、個人ですらも、「自由契約（フリーランス）」であるかのように行動し、協力関係を常に変動させている。そこには明確な指揮命令系統などはないかも知れず、自分の安全確保について交渉することは困難であり、また、そこで安全の保証が得られたとしてもそれに頼ることはできない。人道援助機関の要員に対する敬意の念はほとんどなく、我々が何をしようとしているかについての理解もないかも知れない。さらに、我々が誰を代表しているかについて彼らが誤解をしている

2 一般的に受け入れられているこれらの用語の定義は1971年、第一回政府専門家会議においてICRCにより提唱された。ICRCにより提出された文書、「政府専門家会議」参照のこと。

表題：Title V. Protection of Victims of Non-international Armed Conflicts, 1971, p.79.

のなら、当然のごとく我々も標的になってしまう。そんな誤解をしているグループは我々の車両、機材、物資を盗もうとすることもあるだろう。そのような脅威に立ち向かうために、人道援助機関はこういった状況下では目立たないように心がけ、慎重に行動する方がよい。注目度を軽減し（例えば標章の使用を控える、ロゴマークのない車両を使用するなど）移動経路や移動時刻を変えるなどしてみよう。



法と秩序が完全に崩壊したこのような無政府状態では、我々の安全確保と危機管理が最重要課題となる。このような状況下では、安全性を保つために費やされる時間や努力と、我々に達成できる事柄との間に、バランスが必要になる。現地オフィスの代表など、権限を持つ者は常にこのバランスを念頭に置いておく必要がある。

このような環境下における人道援助機関の状況は以下のように特徴付けられる。

- ・人道援助活動は間違いなく必要とされているが、必要を満たすことは極めて困難
- ・ほとんど許容できないほど非常に高いレベルの危険度
- ・活動に対する厳しい制限
- ・安全の確保は、紛争当事者すべてによる人道援助機関の容認よりも、人道援助機関の要員自身の積極的また受動的防衛などの具体策に依存する

現代の紛争のさらなる特徴

人道援助機関がその中で活動しなければならない紛争環境は近年相当に変化してきており、現在も絶えず変わり続けているようだ。先に述べた3つ

の古典的な紛争の分類形態はまだ妥当であるとはいえ、その他の要素も作用し始め、そういった全ての事柄が我々の安全に大きく影響している。大まかにいえば、(なぜなら本書の目的は学術的あるいは政治的な内容について論争するものではなく、むしろ個人の危機管理に焦点を合わせているので) 現代の紛争においては、我々は以下に述べる新しい特徴に直面している。

過激派の非政府グループによる、計画されたテロ行為に対抗するため、西側諸国はほぼ地球規模の対決を行っている。この対決の実態は「非対称な(つり合いの取れていない)」ものであり、はっきりとした前線もなく、様々な当事者が関わり、その影響はひとつの地理的範囲を超えている。

「あなたは我々の味方か敵かのどちらかだ」などという宣言により、敵味方の立場を鮮明にしなければならない圧力は増加している。9・11 事件以降の世界では人道主義は「政治的に利用されている」とも言われている。つまり、ある当事者の政治的な意図のための煙幕として使われていたりすると。同時に、特定の状況下において、ある当事者が人道援助活動そのものを即座に拒絶したこともある。人道援助活動を政治的に利用するという間違った行為は危険なものである。人道援助活動の根幹となる中立、独立、公平の原則と、軍事的あるいは対外政策との境界をあいまいにしてしまうからだ。その結果、人道援助機関の要員は時として、戦闘勢力や政府の政治的目的に共感する人々から当然の標的と見なされることになる。

人道援助活動は国際法(国際人道法、人権法)の適用に大きく依存している。近年ではこれらの法律はあまりにも頻繁に破られ、効果的な人道援助活動を行うことがさらに困難となってきている。さらに悪いことに、これらの状況が人道主義者の働く環境をさらに危険なものにしている。

戦闘地域での安全確保についての状況も近年変化しており、我々が注意しなければならない新しく重要な特徴が現れてきている。この特徴は既に述べたようなバイオレンスのあらゆるレベルに存在する。昔から言われる「不適切な場所に不適切な時間に居合わせる」ことが、殆どの国において最もあり得る危険要素であったが、今日我々は新たな問題に直面している。特に、地球上の特定の地理的舞台に限定されることのない行動範囲を有する実体により標的にされる危険があることだ。

ということは、人道援助機関は地球上のどこででも脅威に晒されているといえよう。近年における大きな課題のひとつは、この地球的規模の現実を組み込んだ上で、安全確保のための手段としての地域的状況分析を行うことである。多くの機関は問題の政治的解決を図ると共に、予防策を講じている(使用施設などの物理的変更や、入場許可、機密文書、無線交信、不審な手紙や

小包、警戒態勢手段などについての制限や変更)。現在直面している脅威には、車に仕掛けられた爆弾、手製の爆発物、小包や手紙に仕掛けられた擬装爆弾(ブービートラップ)、自爆テロ犯などがある。この章の目的は、複雑で緊迫した政治的問題に対する回答を示すことではなく、むしろ、あなたの関心を喚起することにより、これらの変化があなた自身の安全の確保にどのような影響を与え得るかをより正確に見られるようにすることである。

直接標的としての人道援助機関

我々は安全の確保がますます困難な環境で活動しているのだろうか？

人道援助活動はより危険になってきていると多くの人が指摘している。人道援助活動に従事する者は「狙われやすい標的」とすら言われている。実際には、統計が示すように、人道援助活動をしている要員の安全を脅かすような事件の総数は減ってきている。しかしながら、同じデータから、事件の性質についての、新たな、非常に憂慮すべき傾向が見て取れる。直接の標的となっている深刻な事件の割合が増加しているのだ。つまり、事件の件数は減少しているかもしれないが、事件の深刻さは増大しているのである。この傾向は全く新しいものではないが、発生比率、計画性、致死率は近年飛躍的に増加している。

なぜそのようなことが起こっているのか？そこにはいくつかの理由がある。認識の変化から起きている問題についてはすでに言及したが、その他の原因も挙げられる。そのひとつは、10年前と比較して、はるかに多くのNGOが活動していることだ。その結果さらに多くの人々が危険に晒され、事件も増加している。もうひとつの理由は「テロに対する世界規模の戦争」である。昔は口頭による合意で人道援助活動が可能だったが、新たな状況においてはそれが通用しない地域も世界にある。最近のあるレポートによれば「過去において、武装集団は、人道援助機関の存在を彼らにとって有益なものとして見ていたかも知れない。それは、彼らが制圧している地域の非戦闘員の保護や援助に意義があったからである。一方、機動的で秘密行動をする過激派が、いかなる領域も統制せず、あるいは統制する意欲もない戦闘の現場においては、人道援助機関の存在は価値のあることよりも、むしろ邪魔なものであると認識されるだろう」³と述べられている。

3 人道援助活動の未来：イラクその他の近年における危機が示すもの
International Mapping Exercise, Feinstein International Famine Centre, Tufts University, January 2004, P5からの報告

安全の確保についての状況は本当にそんな悲惨な事態になっているのだろうか、それとも我々人道援助機関が大きさに対応しているだけなのだろうか？ アフガニスタンやイラクなどの国では状況は悪いが、他の国では要員の安全を脅かすものは以前と変わらず、犯罪、交通事故、銃撃戦への巻き添えや地雷の爆発などである。上に言及した、直接の標的になることは非常に気がかりなことではあるが、決して新しい事柄ではない。人道援助機関は以前も標的になっていたのだ。何が新しいかといえば、ある特定の国々においてそのような事件が増えていることである。

過剰に反応してはいけない。我々は直面する脅威や、なぜそれがそもそも存在しているのかということについて熟知する必要があるから、ある国での安全環境がなぜ劣悪になったのかという理由にももちろん焦点を合わせるべきである。人道援助機関を標的にする可能性のある集団をよりよく理解する必要がある。そのためには、彼らが我々をどのように認識し、どんな動機を持っているかを理解し、さらに彼らが関わっているコミュニティについてよく知るべきだ。我々が活動を継続し、さらに受け入れてもらうためには、紛争に影響を与えることのできる全ての人々との間にネットワークを作るための新しい方法を開発する必要がある。

人道援助機関と軍との役割分担の不明瞭化

紛争の状況下で、軍隊と非軍事組織の活動の領域は長いあいだ慣習的にすみわけがされていた。しかしながら、近年においては軍隊が地域住民に対する援助などの、在来型の人道援助活動に関ることが増加してきている。例えば、アフガニスタンやイラクでの紛争では、軍隊がある種の救援活動の任務を担っていた。おそらく人道的な目的で行われたと見られるそういった軍事活動は、根本的に区別されるべき人道援助活動⁴と軍事活動⁵（または人道主義的「空間」と軍事的「空間」）の境界線を侵食する結果となった。

人道援助機関はこの不明瞭化が彼らの安全確保に悪い影響を与えたと考えている。さらに、紛争の犠牲者に対し、独立、中立、公平の立場で援助活動

4 ECHOの最新の研究では、人道援助活動の領域（またはECHOが言うところの「人道主義的空間」）を以下のように定義している：「人道的ニーズに対応するための人道援助機関のアクセス（立ち入る権利）と自由裁量」

Echo Security Review 2004, p.71, http://europa.eu.int/comm/echo/index_en.htm. 参照

The Inter-Agency Standing Committee Working Group (IASC-WG) は上記の定義に対し重要な追加所見を次のように述べている：「援助を必要としているすべての人々に対する人道援助は中立で公平でなければならない。さらに、援助は政治的、あるいは軍事的条件なしに実施されなければならない、人道援助機関の要員は、論争あるいは政治的立場においてどちらの側にも加担してはならない」

IASC Reference Paper, *Civil-military relations in complex emergencies*, 28 June 2004, p.8. 参照

5 いくつかの組織は、人道援助活動の種類と範囲をより正確に表すことが出来るとして、「人道援助活動」(humanitarian action) という言い方を好んで使う

を行う能力に混乱を生じさせたと。本来軍隊は政治的な使命に従属する組織であり、中立の立場にはなりえない。しかしながら、もし人道援助機関が中立の立場として受け入れられないならば、その公平さ、信頼性は明らかに疑わしいものとなってしまいます。援助を必要としている人々に近づくことが難しくなり、要員も危険に晒されてしまうことになるだろう。紛争地域で軍隊と共同で活動するとき、たとえ間接的にかつ避けられない事態だとしても、その組織は特定のグループの側につき、対抗するグループに逆らって活動をしていると解釈されることになる。そして軍隊と過度に密接な関係になったと見なされると、その地域の人々から敵対視されることになる。その例が、1990年代の旧ユーゴスラビア、1993年のソマリア、そして最近ではアフガニスタンとイラクであろう。

「心」を得るということ

地域住民の「心（理解や信頼）」を得ることは軍隊にとって非常に重要なことだが、これが不明瞭さの問題と密接に関係している。軍隊は地域住民を味方につける必要がある。「心」獲得作戦は住民を味方につけ、情報を収集する為の、戦時における古典的なツールである。人道援助機関も地域住民を必要としているが、その理由は全く違っている。彼らにとって地域住民は人道援助機関の存在理由そのものであるからだ。紛争状態では住民は犠牲者であり、人道援助機関の任務はそんな住民を可能な限り援助し保護することにある。人道援助機関は公平かつ独立して活動すべきであり、さもなければ自らの基本原則を破ることになってしまう。

安全を最大限に確保しようとする軍隊の「心」獲得作戦は人道援助活動との境界をあいまいにしてしまう。人道援助機関の目的は公正な原則のもとに生命を救い、守り、苦痛を阻止することだ。だが、軍隊の目的はある特定の地域にいる、友好的なあるいは友好的になり得る特定の集団の支持を確保することにある。したがって、軍事作戦上あまり意味のない人々は、たとえ最も援助を必要としていたとしても、無視されることになりかねない。さらに、部族や党派等の間のねたみや憤りの原因となり、その地域で活動しているNGOの活動に直接に跳ね返って来るかも知れない。

軍事力を人道援助活動のために広範囲に投入することは、対抗する組織や地域住民にとって、その組織が独立した人道援助機関なのか敵対している勢力なのか見分けをつかなくしてしまう。こういった現象は、人道援助に携わる要員が中立であるという認識を壊し、交戦中の勢力の標的としてしまうことになる。軍人が民間人と同じ服装をし、白い色の四輪駆動車を駆って、武器を携帯するとき、深刻な問題が発生する。人道援助機関の要員は武器こそ携帯していないが似た姿なので、地域住民が混同してしまっても無理からぬことである。さらに、軍隊が「ひも付き」の援助（例えばその見返りに諜報

を要求するなど）を持ちかけたりしたときには、さらなる問題が起きる。

軍隊が人道援助活動をすること自体が問題なのではない。軍隊の「心」獲得作戦はこれからも存続するだろう。問題は、軍隊が自らの「人道的作戦」を、地域住民に誤解を与える形で、政治的・軍事的目的に結びつけたときであり、その誤解とは、軍隊が人道主義者の役割を担っているという印象である。

もし軍隊が援助活動を実施することができる唯一の組織であり、まさに人命救助を目的とするのであれば、そんな軍隊の行動の必要性をほとんどの人道援助機関は理解する。例えば軍隊が紛争の現場や自然災害の被災地に真っ先に到達できるといった場合である。近年における、軍隊の直接関与の事例としては、1991年4月のイラク北部、1999年4月のコソボ、2004年12月のアジアにおける津波救援などがある。また軍隊は重要でときには不可欠な（人道援助機関にとっては実施困難な）役割を担うことがある。それは補給ルートの設置や確保、橋の建設と人道援助目的の輸送の保護、紛争当事者の軍事行動の停止、港湾や空港などの入国地点の安全確保、被災者に近づくことを容易にする為の地雷除去、不発弾の除去、そして（軍の航空機や船舶による）救援物資の輸送などである。

このように、役割分担の不明瞭化は多くの側面を持っており、我々の安全確保に関わってくる重要な問題である。

統合作戦

役割分担の不明瞭化と密接なつながりがあり、白熱した議論が交わされているのは、「統合作戦」という比較的新しい概念である。この議論の中では「整合性」の必要がしばしば語られる。統合作戦のアイディアとは、軍事的、政治的、そして人道援助活動の合理化により、国連の活動における効率やスケールメリットを向上させることである。

大まかに言えば、軍隊と国連はこの「統合作戦」を、政治的、軍事的、人道的観点から見て、最も有利になるように人道援助活動を利用するための方法として捉えている。この考えを支持する人々は、こういった作戦が人道援助機関に対し、活動の制限を強要する必要はないと考えている。つまり、統合作戦の大きな枠組みの中で、軍事的、政治的、人道的構成要素を分けることは十分に可能だと。

一方、人道援助機関はこの問題に対し少々異なった考え方をしている。彼らは以前、その中で活動できる自分自身の「領域」を持っていたが、それが侵食されつつあると。その結果、独立、中立、公平の立場で受益者の利益の

ために行う援助活動があいまいになり混乱を招くことになった。これは彼らの安全を脅かしている。人道援助機関にとって「統合」の概念は、人道的目標と政治的目標の区別がつかなくなるという憂慮すべきものである。それは、人道援助活動を紛争管理のための「道具のひとつ」として使用する「指揮統制」体系が必要であることを「統合」の概念が示唆しているからだ。⁶

統合任務の構想は人道的領域に侵入し、その中核をなす公平、中立、独立の基本原則を危うくしている。例えば、多くの人道援助機関が掲げている中立の概念に統合作戦を合致させることは困難である。人道援助機関は複雑な作戦の中で他者と調整しながら活動することに異議を唱えることはほとんどしないが、外部からの指揮と統率を受け入れるかどうかは別の問題である。このようにして議論は続いていく！

強盗と他の犯罪行為

強盗や他の犯罪行為は、紛争のどのレベルでも、またすでに述べた武力紛争のどの状況でも起こりうる。紛争の周辺にいて、その状況を悪用しようとする人々はどこにでもいる。彼らの常に増大している脅威は本物であり、危険だ。強盗行為や他の犯罪行為が何らかの形で統率されていることはほとんどないだろう。彼らはおそらくただ単に己の利益のために行っているに過ぎない。このような場合、派遣要員のおかれている状況は、その国に滞在している外国人となんら変わることはない。あなたの所属する組織の標章はもはやあなたを守ってはくれない。我々の脆弱性はよく知られていて、それはさらに危険度を深める。人道援助機関は、障壁や警報機、護衛などの通常の防衛手段をできるかぎり使って、簡単に強盗できる対象ではないと言う印象を与えるしかない。強盗や他の犯罪行為に対しては最大の注意を払いなさい。もしそんな行為に遭遇したときには、決して抵抗してはいけない。

こども兵

現代の紛争の不幸な特徴として、数多くのこども兵が戦闘に利用されることが挙げられる。国際人道法では、15歳以下の児童を軍に入隊させることを禁じている。しかしながら法はしばしば破られている。こども兵は人道援助機関の要員にとって大きな脅威である。彼らが、上官にいいところを見せつけようとするときには特に危険であり、彼らが日常的に酒や薬物を与えられている場合にはさらに気をつけなければいけない。このようなこども兵に対しては最大の注意を払い、もし可能であれば近づかないことが大切である。

6 HPN Network Paper の「遠すぎた橋」(A bridge too far) : Aid agencies and the military in humanitarian response, J. Barry with A. Jefferys, ODI 2002, 8 ページ参照 及び VENRO Position Paper の *Armed forces as humanitarian aid workers*, May 2003, 7 ページ参照

第3章

国際人道法によって得られる保護

危険な環境で活動する人道援助機関は国際人道法の保護のもとに行動している。この章の狙いは、人道援助機関で活動する全ての要員を弁護士に変えてしまうことではない。国際人道法のなかの、とりわけ、あなたと紛争の犠牲者を保護するために考えられたいくつかの重要な項目について知ってもらうことである。そして、必要になったときに備えて、それらの情報の入手方法を示すことである。

国際人道法を理解する

これらの法律を理解することはあなたにとっていくつかの意味で役に立つ。まず、国際人道法の適用について軍人やその他の武装集団に対してあなたが述べる事も、法律を正しく理解していれば、より説得力のあるものになる。あなたが彼らに何かを主張するときにそれは役に立ち、任務遂行のために必要な許可を彼らから得るための手助けともなる。人道援助機関の要員は、いかにして国際人道法が我々と武力紛争の犠牲者を保護するのか、あるいは国際人道法が破られているのかどうかを、知っておく必要がある。また、戦闘員に対し、これらの法律が具体的にどのように適用されるのかということも、あなたが説明しなければならぬ時が来るかもしれない。それは、あなたやあなたが援助しようとしている人々を助けることになるだろう。

国際人道法は以下の目的で発展してきたということを知っておこう。

- ・紛争時において、戦闘行為に参加していない以下の人々の保護：
 - 一 文民（民間人）、医療及び宗教関係者
 - 一 負傷、拘束あるいは降伏などにより戦闘行為を停止した戦闘員
- ・軍事目的達成に必要とされている暴力行為の制限

国際人道法は1949年のジュネーブ諸条約、1977年のジュネーブ諸条約追加議定書、及び多くの関連した協定や条約から成り立っている。しかしながら問題なのは、世界の多くの国家が条約の一部或いは全てを批准しているにも関わらず、条約の違反行為があまりに多いことである。これらの違反行為は現場で活動する人道援助機関の要員の安全に直接に影響を及ぼす。関連した法律の全ての側面を詳細に解説する余地は本書にはない。しかしながら以下の事柄について少し知っておくことはあなたの安全確保に役立つであろう。

国家は、その統治下にある文民の安全と尊厳の確保だけでなく、人道援助機関の要員の安全確保についても、第一義的責任を負うものである。

ジュネーブ諸条約と追加議定書⁷では、文民は危害を受けることから保護される。例えば、第一追加議定書⁸は、文民及びその資産を尊重、保護するために、紛争当事者は常に文民と戦闘員を区別し、文民の資産と軍事目標を識別しなければならないと述べている。あなたは明らかに文民であるから、あなたも保護されるのだ。

国際刑事裁判所法⁹においては、直接の戦闘行為に加担していない文民集団や文民個人に対する意図的な攻撃は戦争犯罪とされている。この法律はさらに、人道援助活動に関わる要員、機材、基幹施設等、さらに国連憲章で許可された平和維持活動に対する意図的な直接攻撃についても戦争犯罪であるとしている。

1999年には、「国際連合要員及び関連要員の安全に関する条例」が施行された。¹⁰

しかしながら、この条約は、国連及び国連の専門機関等と事業実施合意あるいは協力合意のない非政府組織の人道援助機関には適応されない。

国連バグダッド事務所の爆撃の後、2003年に採択された、国際連合安全保障理事会決議1502、¹¹によって、人道援助機関の要員を殺害することは戦争犯罪であることが再確認された。全ての国連加盟国はこのような行為に対する刑事免責を排除し、犯罪を行った人々を法に照らして裁く責任を負っている。

人道援助

人道援助機関の要員は、活動に関係する規則、とりわけ救援活動中の人道援助機関に対して軍隊がかかることのできる制限や、彼らを保護することを軍隊に義務付ける安全確保条項について知っておく必要がある。また、紛争当事者が、民間人の生存に欠くことのできないすべての救援物資の自由な通行を、たとえその物資が「敵方」の民間人に渡されるものであっても、許可しなくてはならないということを、あなたも理解しておくべきだ。それらの救援物資とは、例えば、医薬品、病院への供給品、主要食料品、衣料品、寝

7 www.icrc.org で閲覧可能。1949年のジュネーブ四条約は武力紛争の犠牲者の保護を目的とする。ジュネーブ第一条約は陸戦の傷病兵の保護、第二条約は海戦の傷病兵や難船者の保護、第三条約は戦争捕虜の待遇、第四条約は戦時下における文民の保護を規定している。1977年の第一追加議定書は国際武力紛争について、第二追加議定書は非国際武力紛争について、それぞれ、四条約を補う規定を定めている。

8 第一追加議定書、第48条、17条、51条も参照のこと

9 戦争犯罪法8条、2(b)(i)及び(iii)全文は <http://www.un.org/law/icc/statute/romefra.htm>。参照

10 <http://www.un.org/law/cod/safety.htm>。参照

11 全文参照 http://www.un.org/Docs/sc/unscc_resolutions03.html。

具、シェルターの材料、幼児及び妊産婦のための特別な食料や医薬品などである。紛争当事者の軍隊は、占領地域内を通る輸送車両（コンボイ）の経路やスケジュールなど、物資の輸送についての技術的な調整を行う。輸送される物資が確かに人道的な目的のものだけであり、かつ不公平なものではないこと（例えば、敵対行為に使用されたり、対抗勢力が軍事的に有利な立場に立てるように利用されたりするような物資ではないこと）、予定された目的地が変更されないことなどを、紛争当事者の軍隊は納得するまで確認することができる。このような人道援助活動に携わる要員は、その地域を統括する紛争当事者から活動実施の承認を得なければならない。コンボイは搜索されることがある。救援活動を行う間、人道援助機関は、その地域に展開する軍隊の保安要件を考慮に入れておく必要がある。もしそうしなければ、救援活動は停止させられることになるかも知れない。武力紛争の当事者たちは、支配地域における人道援助機関の救援コンボイの安全を保障し、早急な物資の配布を手助けしなければならない。¹²

国際人道法における、占領勢力の義務と責任を知ることは大切なことである。占領勢力はその地域における管理上の空白を埋めなければならない、地域統治し、人道的な観点から文民のニーズに応じるための、特別な責任を負うことになる。ジュネーブ第四条約では占領勢力の義務として、食料と医薬品の適切な供給、¹³ 及び支配地域における公衆衛生の維持が明記されている。すべての紛争当事者は、ICRC または公平な活動を行うその他の人道援助機関の活動を許可しなければならない義務を持つ。（ジュネーブ第四条約、第59条）

地雷と爆発性戦争残存物

地雷の脅威に対する法的保護については、オタワ条約（すなわち1997年の「対人地雷の使用、貯蔵、生産及び移譲の禁止並びに廃棄に関する条約」¹⁴）の主な条項を知ることが有意義である。この条約は、数多くの人々によって、対人地雷の被害を根絶するための画期的な条約であると考えられている。この条約の加盟国は、いかなる状況においても以下のことを行ってはならない義務を負う。

- ・対人地雷の使用
- ・直接、間接を問わず、対人地雷の開発、生産、入手、貯蔵、保有または移譲
- ・条約で禁止されているすべての行為について、それを行ういかなる人々に対しても、どのような方法であろうとも、その行為を援助、奨

12 ジュネーブ第四条約第23条；第一追加議定書第69—71条；第二追加議定書第18条

13 ジュネーブ第四条約第55条

14 全文はICRCの国際人道法ウェブサイト <http://www.icrc.org/ihl> で閲覧可能

励或いは誘引すること

国家はまた、(条約に明記された特定の期間内に)以下のことを行わなければならない。

- ・貯蔵されているすべての対人地雷を破棄すること、またはその破棄を保証すること
- ・国家の管轄区域や統治下にある地雷原を一掃すること
- ・もし、国家がそうする立場にあるのなら、地雷の犠牲者に対し、介護及びリハビリテーションや社会的・経済的復帰のための援助を行い、地雷回避教育を実施すること
- ・もし、国家がそうする立場にあるのなら、地雷除去とそれに付随する活動に対して援助を行うこと

すべての国家がオタワ条約をすでに批准しているわけではない。¹⁵したがって、紛争当事者の地雷に関する責任についての以前の条約、すなわち1980年の特定通常兵器使用禁止制限条約の第二条約(改定版)について知っておくことは役に立つ。なぜ役に立つかと言えば、オタワ条約が対人地雷に対する取り決めであるのに対し、この条約は今も引き続き問題になっている、対戦車地雷(対車両地雷)、擬装爆発物(ブービートラップ)その他の爆発物等についての規制であるからである。特にこの条約は、紛争当事者に対し、以下の人々とその活動を地雷、擬装爆発物その他の爆発物から保護することを義務付けている。

- ・国連平和維持軍または監視団、および国連人道援助機関または調査団
- ・赤十字国際委員会、各国赤十字・赤新月社、国際赤十字・赤新月社連盟および同様の人道援助機関による活動
- ・公平を原則とする他の人道援助機関による活動

保護の度合いは周囲の状況と戦況によって左右される。とはいえ、軍隊はその支配地域において可能な限り、国連軍あるいは人道援助機関を地雷、擬装爆発物、その他の爆発物の影響から保護することを義務付けられている。援助のために彼らの支配地域に入ること、あるいはその支配地域を通過することが必要とされるとき、進行中の戦闘行為がそれを不可能としない限り、軍隊は安全な通行を提供しなければならない。このような場合、もし安全なルートに関する情報が得られるならば、軍隊は国連の派遣団代表や人道援助機関にその情報を伝えなければならない。もし、安全なルートについての情報が確保できない場合、必要に応じて可能な限り、軍隊は地雷敷設区域を通り抜ける通路を確保しなければならない。

¹⁵ ICRC ウェブサイト上の” States party to the various treaties” のリンクから、どの国家がどの条約に批准しているかを調べることが出来る

派遣団あるいは国連軍に提供されたいかなる情報も、受け取った側は極秘扱いとし、情報提供者の明確な承認なしに外部に公表してはならない。¹⁶

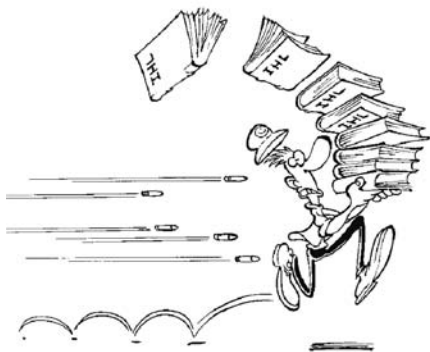
不発弾や放棄された爆発物に関する、特定通常兵器使用禁止制限条約の最新の条文を知ることも有益だ。爆発性戦争残存物に関する条約¹⁷として知られるこの協定は、関係する国家に対し（他のことに加えて）以下の実施を義務付けている。

- ・ 支配地域に存在する爆発性戦争残存物を特定し、除去あるいは破壊すること
- ・ 支配地域で活動している人道援助機関の要員を含む文民を、爆発性戦争残存物の危険性から保護するために、実行可能なすべての予防措置を講じること
- ・ 人道援助機関等から要請があった場合、爆発性戦争残存物の存在する位置に関する情報を可能な限り提供すること

安全地帯

人道援助機関、さらに軍隊も、「安全地帯」あるいは「保護地域」の確立に関する法律について知っておくべきだ。これらの地帯は、紛争の犠牲者である文民あるいは軍人を、戦闘行為から保護する為のものである。選択肢には、病院・安全地帯¹⁸、中立地帯¹⁹、無防備地区²⁰、そして、よく知られている非武装地帯の確立²¹が含まれる。

この法律は、武力紛争の犠牲者だけでなく、人道援助機関の要員をも保護するためである。この法律の、あなたに關係する部分についての知識は、あなたの安全の確保にとって重要であることを、決して忘れてはいけない。



16 1980年の特定通常兵器使用禁止制限条約の第二条約（改定版）の第12条全文はICRCの国際人道法ウェブサイトで見覧可能

17 2003年11月28日の爆発性戦争残存物に関する議定書（1980年の条約の第五議定書）。全文はICRCウェブサイトで見覧可

18 ジュネーブ第一条約第23条

19 ジュネーブ第二条約第15条

20 第一追加議定書第59条

21 第一追加議定書第60条

第4章

要員の安全確保と危機管理に対する 重大な脅威

この章では要員の安全に対する重大な脅威を取り上げる。これらの脅威は前述したあらゆるレベルでの紛争に存在する。戦争とは呼べない程度の紛争では空からの攻撃は稀であると一般的に言われているが、例えばソマリアでは攻撃用ヘリコプターが使用されていたことを思い出す必要がある。もちろんこれらのヘリコプターは人道援助機関の要員を攻撃したわけでは無いが、不測の事態あるいは不幸な偶然により危険に晒されることもありうる。したがって以下に述べるすべての脅威を真剣に受け止める必要がある

以下のものについて考えよう

- ・対人地雷、対戦車地雷
- ・大砲、迫撃砲、ロケット砲
- ・狙撃、銃撃
- ・待ち伏せ攻撃
- ・手製爆発物
- ・手榴弾
- ・擬装爆弾
- ・不発弾
- ・劣化ウラン弾
- ・空からの攻撃

地雷による脅威

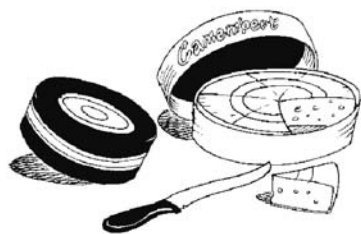
地雷には対人地雷、対戦車地雷の2種類がある

対人地雷

対人地雷は装備を破壊するのではなく、人を負傷させる目的で作られた地雷で、敵対勢力に心理的被害を与える。対人地雷は敵対勢力の動きを鈍らせ、その位置確認と除去には長い時間がかかる。対人地雷は対戦車地雷と組み合わせて埋設されたり、それだけで使われたりする。その破壊力を強めるため、地雷は単独で埋設されることは少なく、通常は複数で埋

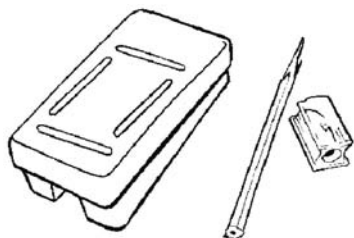


設される。(イラストにある身近な物は単に大きさを比較する目的で描いている)



プラスチック製で非常に探知しにくい。周囲の風景に溶け込むように、緑、茶、灰色などの色をしている。

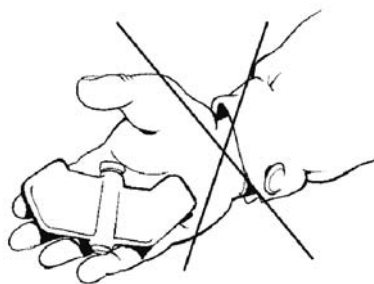
圧力式地雷 人が踏んだり、車両がその上を通過したりすると、その圧力を感知し爆発する。一般的に円筒形で、60mmから100mmの直径（ドーナツあるいはカマンベールチーズ大）であり、高さは約40mmから60mmのものが多い。旧式の圧力式地雷は金属製であったが、現在の物は



典型的な圧力式地雷とは異なったものには以下がある。

木製あるいはプラスチック製の対人地雷 長方形の筆箱状で、140mmほどの長さ、30mmほどの高さがある。

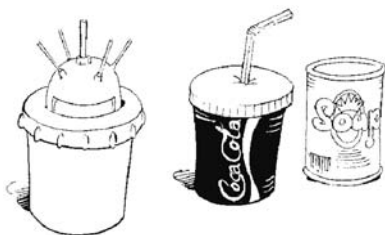
空中投下対人地雷または「バタフライ（蝶々型）地雷」 この地雷は羽根のついたトネリコの木の種子に似ている。秋になると種子が木から回転しながら落下し、風を受けて広範囲に散って行く光景をあなたは見たことがあるかも知れない。その種子にバタフライ地雷は形も似ているし、同じ効果も狙っている。空中から投下され、



ゆっくりとらせん状に舞い落ちてくる。一度に数千個がばら撒かれ広範囲に落下する。通常、青または緑色をしているが時には迷彩色の物もあり、現在でもアフガニスタンなどに

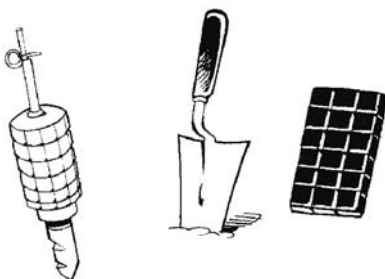
数多く残されている。この地雷は珍しい形をしており、特に子供たちの興味をかき立てる。これらの地雷には近づかず、絶対に触ったり、握ったり、拾い上げたりしてはならない。もし触ったら爆発する。

跳羅式地雷 この種の地雷は、極細の金属製あるいはナイロン製のトリップワイヤーと連動していることがあり、歩行中にワイヤーを引っ掛けると起爆装置が作動して爆発する。あるいは圧力式地雷と同様に、直接に接触しても爆発する。一旦起爆装置が作動すると、



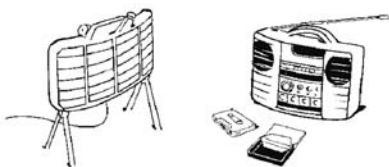
跳羅式地雷は人間の腰の高さほどまで跳ね上がり、爆発によって金属片を全方向に撒き散らす。他の対人地雷同様に暗い色をしたものが多く、スープの缶詰のような形状をしている。触れると起爆するスパイクの突き出た頭部を地表に露出させているが、地雷の残りは地中に埋まっているのが普通である。

破片式地雷 通常はトリップワイヤーとつながっており、木製、あるいは金属製の差込み棒の上に乗せられ、地表から約20cm上に固定されている。なぜ破片式と呼ばれるのか？地雷の金属性の覆いには直角に交わる溝が掘られており、四角形がたくさん作られている。ちょうど板チョコのような形に見える。爆発すると、覆いは溝になっている薄い部分から破壊され、カミソリの刃のように



鋭い四角形の金属破片を四方八方に飛散させるからである。

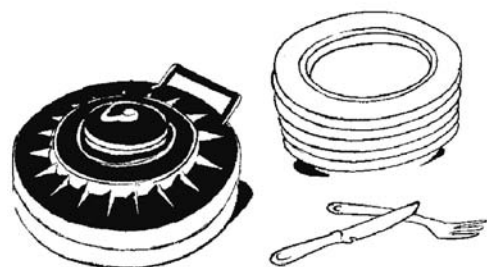
指向性破片地雷（クレイモア地雷） この地雷は破片式地雷であるが、少々異なった形をしている。60度くらいの限られた方向（円弧）に破片を飛ばすために凸形になっているのだ。板チョコ状の四角形の溝を掘り込んだ金属の覆いの代わりに、金属製の球が爆発物に埋め込まれ、それをプラスチックが覆っている。他の地雷と同じような色をしており、地表に固定用の脚でセットされ、トリップワイヤーまたは電気式の起爆装置で爆発する。ワイヤーは相当長い距離に張り巡らせることができる。地雷を設置した兵士は安全圏内において目標が現れるのを待ち、地雷に近づいた瞬



間にワイヤーを引くか起爆装置のスイッチを押し、高速の金属球を目標に浴びせることができる。

対戦車地雷

対戦車地雷は、戦車のような重車両を破壊する目的で開発された。対戦車地雷はその目的達成のため、かなりの数が埋設されるのが普通である。しばしば道路を横切るように最大6個が埋設してあったり、必要に応じて道路上に敷設するために道路封鎖地点の端にまとめて置かれていたりする。活発な戦闘地域ではこのような地雷は通常、埋設した側の監視下に置かれているか、または軍隊用語でいうところの「射撃によって守られている」状態にある。対戦車地雷は重要な武器であり、軍事上重要な幹線や目標を守る役割を果たしているからだ。



対戦車地雷を埋設した兵士は常に地雷が確認できる位置に潜んでおり、地雷を除去しようとする者を監視している。つまり交戦区域ではあなたは常に監視されていることを忘れてはならない、ということだ。たとえあなた

から相手が確認できなくとも。

対戦車地雷には決して近づいてはいけない。そして言うまでもないが、どのような状況でも、決して触れてはいけない。あなたは即座にありがたくない仕打ちを受けることになる。戦闘が終結した地域では、地雷を監視していた兵士はとっくに消え去っていても、地雷がそのまま取り残されていることがある。だからといって決して、地雷に関わったり触れたりするという誘惑に負けてはいけない。

対戦車地雷のいくつかの重要な特徴：

- ・対人地雷より大きく、最大300mm程度の直径（ディナー用の皿のサイズ）、110mm位の厚さ
- ・正方形あるいは円形
- ・プラスチックまたは金属製
- ・色は対人地雷とほぼ同じで暗色や迷彩色
- ・上を通過する重たい車両を感知して爆発（あなたの車両も十分重いことを忘れずに！）
- ・時には地雷の上部から突き出した棒やトリップワイヤーと連動して起

爆させることもある

対戦車地雷は通常監視下にあるが、同じ理由で（除去されにくくするために）周囲に対人地雷を設置することによって、さらに保護されていることもある。だからなおさら近づいてはいけない。また地雷に対妨害装置が施されている可能性もある。触れるだけで爆発する！

地雷の脅威への対処方法

地雷が何であり、どのような形をしているのかはわかった。では、どのように対処すればよいのだろうか。

- ・触れてはいけない。決して近づいてはいけない。
- ・地雷の至近距離（100m以内）で無線機、携帯電話、衛星通信を使用してはいけない。

あなたが使っている無線機の周波数が地雷を起爆させてしまう可能性がある。これは擬装爆発物、手製爆発物、不発弾等にも当てはまる。

- ・もし地雷を発見したなら、他の人のためにも何らかの表示を残しておく。この表示は地雷原から離れた安全なところに設置すること。他の機関や現地の住民にも地雷の位置を知らせなさい。

地雷と人道援助機関の要員は決して触れ合ってはいけない、というのが大原則だ。だから方法はただひとつ。避けることだ。でもどのように？

対人地雷への対処方法

新しい場所に移動したときや最近戦闘行為が行われた場所に入ったときには、常に現地の機関、住民などから助言を得なさい。

助言はあちこちで得られる

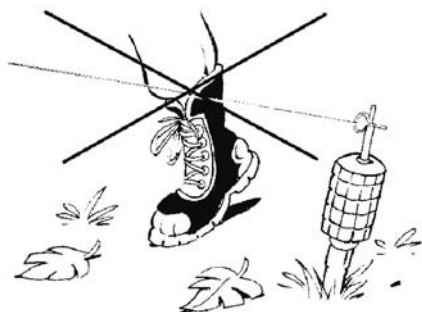
- ・あなたの同僚、現地職員（特にドライバー）
- ・警察、軍隊を含む政府・現地機関
- ・公共輸送機関
- ・NGOや国連関係者
- ・チェックポイント
- ・病院
- ・そして特に現地の住民

現地行政官などに現地の案内役として同行してもらおう。最も良いのは、案内役が自分の所有する車両をあなたの前に走らせることだ。そうすると案内役はあなたの安全に責任を持つことになる。もし案内役が行くことを拒んだならば、あなた自身も行くべきでない。

他の車両が最近そこを通過したことを確認できない限り、あなたにとって初めての道を走行するべきではない。朝一番目に走行する車両にならないように努力しよう。現地の住民の車両が通過するのを待って確認してから出発しよう。シートベルトは常に着用し、夜間の走行は避けよう。

決して地雷を除去したり触れたりしようとしてはならない。

すべてに述べたように、地雷はワイヤーと連動している場合がある。決して近づいて見てみようなどと思っはいけない。



もしあなたが先頭の車両に乗っていて走行中に地雷を発見したときは即座に停車し、後続の車両に知らせなさい。

もし速やかに停車できずに対人地雷原に車両を乗り入れてしまった場合の最善の対応策は、ゆっくりと後退して脱出することである。可能であれば自分の作った

轍にそって後退して行こう。あなたの乗っている車両そのものがある程度あなたを守ってくれる。誰か一人がリアウインドウから轍を確認しつつドライバーを誘導し、ゆっくり、慎重に後退しなさい。

地雷原では車両を方向転換させてはいけない。車両から出てはいけない。

もし地雷のある可能性が高い道路が樹木や車両などで封鎖されていた場合、道路の端や路肩を走行してはならない。そこには地雷が埋設されている可能性がある。引き返しなさい。

対人地雷の危険性が最も高い場所

戦闘の最前線だった地域やバリケードの周辺、防戦陣地などは明らかに危険とわかる場所だ。これらの場所の特定は比較的容易だ。例えば、以前軍隊が使用していてその後放棄された場所は、空の弾薬箱、瓦礫、近くにある崩れた建物など、戦闘の名残で確認することが出来る。鉄条網や掩蔽壕（トレンチ）、土塁などの存在も判断材料となる。そこにはおびただしい量の地雷が埋設されている可能性があり、認識が容易であるから常に回避しよう。決して車両を乗り入れたり、立ち入ったりしてはならない。引き返し、他のルートを見つけなさい。（もしその場所を通っている道路が封鎖されていず、頻繁に利用されているならばもちろん問題はないが）

戦闘地域の無人家屋 中を調べて見ようなどと思っはいけない。生理的
要求を満たすために屋内に入ること避けよう。このような家屋は戦闘中に町
や村の防衛線として使用されたかも知れないので、対人地雷で囲まれている
可能性がある。

無人の村や町の中の興味を引く場所 地雷除去のために進駐してくる軍隊の
興味を引くような場所に地雷が残されていることがある。例えば被害の少な
い家屋などである。この場合地雷は、玄関前のようなわかりやすい場所では
なく、側窓の横や井戸の傍、あるいは庭の木陰などに設置されている可能
性がある。またこれらの対人地雷はトリップワイヤーで何か興味を引く小物と
接続されているかもしれない。
なぜこんなものがここに残っているのだろうかと自分に問いかけてみよう。
賢明な者はそのままそこにはっておくだろう。

対人地雷の危険性が最も高い場所



戦闘地域の無人家屋



無人の村や町の中の興味を引く場所



田舎道



庭や農作地

田舎道 田舎道は非常に危険である。過去に地雷が埋設された可能性が高く、さらに発見しづらいからである。幹線道路あるいは舗装された二次的幹線道路のみを通行しよう。

庭や農作地 居住者や防衛戦闘員の安全確保や早期警報のために地雷が埋設されることがある。魅力的な果樹園、ブドウ畑、野菜畑も同様である。

「地雷除去済地域」についても用心しなさい。軍隊によって地雷除去完了宣言がなされた場合でも、100%除去されているとは限らない。幹線道路、町の広場など主要な場所は除去されているかもしれない。しかし、たとえ小さな村でも、地雷を完全に除去するためには、膨大な数の人員が必要となる。私が訪れたある国では、ある NGO の宿舎の庭から（私の出発までに）3個の対人地雷が発見された。地雷除去完了が宣言された後のことである。

もし地雷埋設地域に気づいたとき、あるいはその種の情報を得たときには、同地域にいる他の人道援助機関を含めたすべての関係者にそれを伝えなさい。同時に、あなたの地図に記入しなさい。



対戦車地雷への対処方法

残念ながら、対戦車地雷が対人地雷に比べ大型だからといって、発見しやすく回避が容易だとは言えない。対戦車地雷は地表のすぐ下に埋設されることが多い。場合によっては時間の経過と共に地表が植物によって覆われてしまい、発見がより困難になってしまう。

対処方法としては、移動前に道路状況を地元の情報を元に確認しなさい。

不思議に思うかもしれないが、対戦車地雷原に明確な印がされている地域も（残念ながらごくわずかではあるが）ある。それは軍が自らの安全確保のためにするのである。そんなことをすれば、敵対勢力に対する効果がなくなるのではないかと実はそうでもない。いずれにせよ地雷はそこに埋まっており、危険は変わらず、やはり対応策が必要になるからである。このように、埋設場所を秘密にすることは、必ずしも重要ではないのだ。また、時には地雷が埋設されていないにもかかわらず地雷原の標識があり、地雷があるかのように見えることもある。いわゆる「ニセ」地雷原や「ダミー」地雷原と呼ばれる物であり、紛争においてはごく当たり前の策略である。したがって、地雷原の標識をしっかりと覚えて、その場所には近づかないことである。

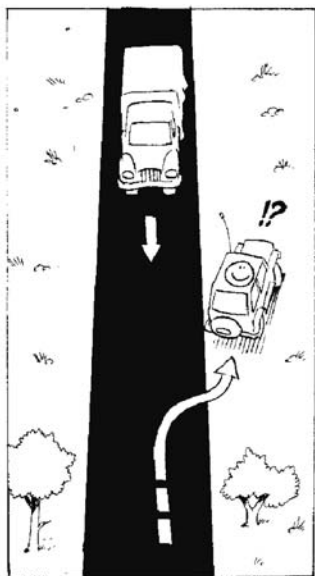
新たに占領された地域では（占領）軍によって新しい標識が立てられることがある。例えばスリランカの場合がそうだ。また、現地で考案された標識もよくある。地元住民によって立てられたこれらの標識も他の人々に危険を知らせる。アルメニアでは（地雷原を示す）赤い旗が道路の脇に石で固定されている。

もう一度言うが地元の知識は重要である。

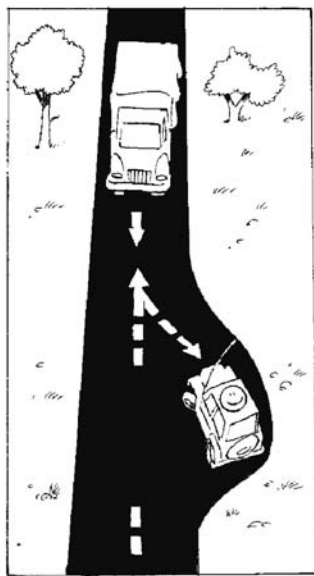
無人と思われるチェックポイントで対戦車地雷を発見した場合、決して自分で取り除こうとしてはいけない。というのは、あなたは確実にどこから監視されているからである。もし監視者があなたを通過させたい場合は、あなたの前に姿を現すだろう。もししばらく待っていても誰も現れないときには、あなたは監視者にとって「歓迎されない客」なのだとして理解し、直ちに引き返すべきだ。

対戦車地雷の周囲は対人地雷で取り囲まれていることも常に念頭に入れておこう。また、地雷には（触れたり動かしたりすると起爆する）対妨害装置が組み込まれているかもしれないことも。

極めて重要なのは、地雷を回避するため、障害物を避けるため、あるいは他の車両を通過させるために、道路の縁を走行しようとしてはならないことである。



NO



YES

前にも述べたように、あなたの通常の行動のままではだめで、修正が必要なのだ。あなたの故郷では、走行が難しい道路や狭い道では、対向車をすれ違わせるために自分の車を路肩に寄せることはごく自然に行っていることかも知れない。だが、そんなことは地雷原では忘れなさい！ 礼儀正しく路肩に移動してはいけない。路肩には地雷が埋まっているかもしれないからだ。もし必要であれば道路が広くなるまで後退し、対向車を通過させよう。アブハジアのスフミ（首都）の地雷原地域で、私はある要員にユニークな礼儀作法を披露した。そこには明らかに地雷が埋まっていた。大型車が前方から近づいてきた。我々は路肩ぎりぎりに車両を停止させ、対向車の大型車に横を通り抜けるように手で合図を送った。だが、彼は路肩をすり抜けることを完全に拒否した。彼は満面の笑顔で、我々に道が広くなるまで後退するように頼み、そして通過していった。彼は自分の地域に存在する危険をよく知っていたのだ。これは重要な指針であり、地雷原では鉄則である。

過去に最前線だったところや塹壕などは特に危険である。戦闘の残骸の中に地雷が隠れている可能性が高い。もちろんこのような場所は徹底的に避けなさい。

大砲、ロケット砲、迫撃砲の脅威

次に大砲、迫撃砲、ロケット砲が使用されるかも知れない地域でのあなたへの脅威を考えてみよう。簡単にこれらの兵器について説明する。あなたにとってより重要なことは、これらの兵器がどのように使用されるかを知ることだ。そうすることによって危険度を最小にする方法が見えてくるだろう。

大砲

大砲という用語は広範囲の武器を含むが、我々は以下に述べる大砲の種類を知れば十分である。



榴弾砲 軽量、移動可能な大砲で、口径は76mmから105mm、最大射程距離は13kmである。

重砲 この比較的大きな大砲は通常トラックなどで牽引されるが、自走式の重砲も中にはあり、それはほとんど戦車のように見える。口径は120mmから155mm、射程距離は24kmにも達する。



ロケット砲 (ロケットランチャー) 射程距離8kmほどの携帯用の小型のものから、50kmを越える自走式のものまで、様々な種類がある。複式ロケットランチャーは何列もある発射筒から発射される弾頭により、集中砲火を可能にする。これは「グラッド」と呼ばれ、目標地域を集中砲撃する。砲撃は通常1回に留まることが多い。着弾は正確とは言えず、ロケット砲の着弾地点を予測することは極めて困難である。



対空砲 航空機を撃ち落とすために使用される大砲であるが、地上の標的を攻撃することもあるので、ここで言及する。対空砲の高性能な照準と砲撃の精度の高さゆえ、危険度の高い脅威となる。

対空砲は一般的に軽量、運搬可能で、複数の砲身を備えたものもある。射程距離は小型のもので約2km、牽引型の大型のものは約8.5kmになる。使われる弾丸の口径は20mmから40mmである。



迫撃砲

迫撃砲はすでに述べた種類の大砲よりさらに軽量で、運搬が容易だ。最も一般的な迫撃砲は、80mm砲と120mm砲で、両者とも射程距離は約6kmである。120mm砲にはより大型で威力のある砲弾が使用される。

これらの砲の使い方

対空砲は例外であるが、その他の大砲、迫撃砲は「間接照準」火器と呼ばれている。標的から遠く離れて発砲できることが、これらの兵器の効力であり、また、操作する兵士の安全を守ることになる。標的はしばしば堅固に防衛されていたり、塹壕の中であったりするが、砲弾は丘を越え、かなりの距離にまで到達する。



大砲や迫撃砲の「間接的」な特質はあなたにとって非常に大切なポイントである。これらの兵器がどのように使用されるかを理解することで、あなたはその脅威をよりよく理解し対応できるようになる。簡単に言うと、大砲と迫撃砲には2通りの使い方がある。

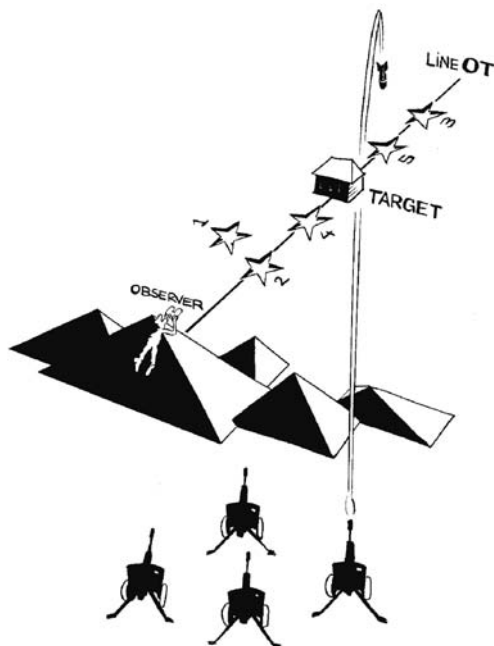
その1つは「観測」砲撃というもので、長距離攻撃の場合に、観測者を大砲の前方に配備し、標的地域での目の役割をさせる。観測者は無線によって砲撃手と交信し標的に誘導する。

どのように？ あなたや私が友人の運転する車を駐車スペースに誘導するのは全く同様に行うのだ。「もう少し左、少し右、オーケー、もっと後ろだ。

おっと、後退しすぎた。少しだけ前に」というように。

砲撃観測者はまず、最初の砲撃ラウンドの着弾地点を正しい線上に、つまり観測者がその位置から目標を目視した線上に誘導する。線上に着弾させるために、第2、第3ラウンドを発射して、右、左に微調整してゆくこともある。

目標とする線上（方角）に着弾させることに成功したら、砲撃手は確実に標的をたたくために、その線にそって目標までの距離を修正してゆく。砲弾が標的からどれくらい後方にあるいは前方に落ちたかを正確に割り出すことは不可能であるため、ここで「夾差砲撃法」という手法が登場する。これは単純にまず 400m から 800m くらい離して2発の砲弾を目標の前後に着弾させることから始める。そして徐々にその間隔を縮めてゆき、100m くらいの間隔になるか、あるいは標的に着弾するまで続ける。このようにして砲撃手は数発の砲弾を使って着弾距離を修正し、それから複数の砲弾を標的に撃ち込むのである。



このように、標的に当たる前に複数の砲弾が周囲に着弾することを覚えておく必要がある。

もうひとつの方法は「予測」砲撃と言われるものだが、着弾精度は前者より劣る。標的の位置は地図から検出し、可能な限り正確なグリッド（地図の上に記された、記号・番号の入った碁盤目）情報を砲撃手に伝える。風向、気圧等の要素を変数値としてコンピューターで算出し、微調整を行ったうえで砲撃する。砲撃の正確度は劣るが、町や村を攻撃するには効果的である。町を中心に着弾するように計算して発射すれば、砲弾はたぶんその近くに着弾し、破壊と恐怖をもたらすことになる。

大砲と迫撃砲の脅威への対処方法

大砲や迫撃砲などがどのように使用されるかを理解した今、どのようにして危険を軽減することができるかあなたは理解できたはずだ。まだ納得がいかない？ では簡単にまとめてみよう。

あなたが耳にしたり目撃したりする砲撃は、着弾地点を観測するために行われる数回の砲撃の最初のラウンドかもしれないのだ。あるいは、不正確な「予測砲撃」かも知れない。いづれにせよ、次の着弾を待たずに、すばやく物陰に隠れるか避難しなさい。

もちろんあなた自身が標的になる可能性は非常に低いだが、着弾調整の過程で偶然に砲弾があなたの車両や、宿舎、オフィスを直撃しないとは言い切れない。

もしあなたが、広い田野を運転しているなら、避難場所を探しなさい。水路や排水溝などは避難場所に適している。前線地帯を移動中は、常に先のことを考えることを怠らないことだ。「今砲撃が始まったらどこに避難しよう？」と。戸惑っている暇はない。何をすべきか決断し、直ちに行動しなさい。

もしあなたが車両の中にいるなら、選択肢は2つある。

近く（50 - 100 m）に着弾した場合、最善の策は車から降り、道路から離れて隠れることだ。溝の中に低く横たわったり、できるだけ頑丈な物の陰に隠れたりしなさい。絶対に車両の下にもぐり込んではいけない。車は大した防御物にはならないうえに、車両そのものが標的になっている可能性もあるからだ。

砲撃がそれほど近くなく、あなたの進行方向でない場合、つまり進行方向

の左あるいは右側に着弾している場合、最善の行動はすばやく走りぬけ、その地域から脱出することだ。もし次のラウンドの砲弾がより近くに着弾したら、前述のように、車両から出て頑丈な物の陰に隠れなさい。

もしあなたが代表部（オフィス）または宿舎にいる場合、砲撃がその町や村に着弾し始めたら、すぐさま安全な場所や避難場所に隠れることを薦める。なぜなら、第二弾がどこに着弾するか判断できないからだ。その建物が最終標的ではないとしても、前述した着弾地点の修正過程に含まれるかもしれない。このような状況で仕事を継続することは勇敢な行為ではなく、むしろ極めて無謀である。直ちに避難シェルターに移動し、一緒に来るように全員に声をかけよう。5分から10分後には安全か否か、仕事に戻れるか否かを確認することができる。また、現地住民がどのような行動をしているかにも注意しよう。もし彼らがシェルターに向かって走っていきなら、あなたも同様に走りなさい。

狙撃兵とライフル銃の脅威

さて今度は狙撃兵とライフル銃の脅威について考えてみよう。私はこの2つの脅威を一緒に考えてみたい。なぜなら脅威に対する対処方法はほぼ同じだからである。また、もうひとつの理由は、狙撃兵による銃撃と一般兵士による銃撃を混同する傾向があるためだ。ここでも、その脅威を理解することにより、よくある誤解や混乱を避け、脅威により良く対応できるようになるであろう。

これから狙撃兵という用語と彼らの戦略を説明し、あなたの安全に対するこの深刻な脅威への対応の仕方について助言しよう。

狙撃兵とは？

軍事用語で狙撃兵とは高度な技術を持ち、高度な訓練を受けたライフル銃兵を示す。彼らはその銃撃の技術のみで選ばれたのではなく、その任務を遂行するための特別な気質を兼ね備えている。

原則的に彼らは非常に危険な地域で単独行動する。非常に冷静で自分に確信を持っており、野戦技術、偽装術、潜伏術に長けている。彼らの任務は人知れずに最前線へ、あるいは標的へ接近し、潜伏しながら標的が接近するのを待つことだ。時には何日も同じ場所に待機することもある。通常彼らは3ヶ月の訓練を受けるが、その後も継続して自己訓練する。軍事的には彼らはその道の専門家であり、狙撃任務だけに用いられる傾向にある。

狙撃兵の目的とは？

単独あるいは小規模の狙撃兵グループが、現代戦において大きな成果を上げることはないという意見もあるが、狙撃には2つの大きな目的がある。

第一の目的は、ある特定されたルートを頻繁に移動する敵方の司令官等の重要人物やミサイルランチャー等の高価な兵器などの重要目標を攻撃することである（後者の場合は兵器を損傷するか、ドライバーを殺害することが目的となる）。

第二の目的は、敵方に心理的あるいは物理的に破壊的な影響を与えることである。狙撃兵は可能な限り長期に渡り潜伏する。どこからくともわからない銃撃による大怪我や死は、敵方を極度に浮き足立たせることになる。

通常状況では、狙撃兵のように高度な訓練を受けた射撃のプロが、人道援助機関の要員を直接攻撃することは無いと言えるだろう。

狙撃兵の用いる装備は？

狙撃用のライフルは、我々がチェックポイントなどで見かける、自動、半自動機関銃とは異なる。例えば、AK-47より銃身の長い、むしろ猟銃に似たもので、通常、望遠照準器を備えている。最新式の狙撃銃は長い銃身を持ち、重い。銃身を固定するための前部の2脚の足と、夜間用の暗視照準器を備えていることもある。有効射程距離は1000mに達するが、より希少で特殊な種類の射程距離は1400mに及ぶ。

弾薬も特殊な長距離タイプで、徹甲性（装甲を打ち抜く性能をもつ）や爆発性のももある。

狙撃兵の脅威への対処方法

標準的な狙撃兵の実態を理解したところで、我々の活動に影響を及ぼすその脅威に、いかに対処するかを考えてみよう。まず最も重要な点は、彼らの全てが高度な技術を持った射撃のプロではないということだ。我々は、様々なライフル射撃を一般化して捉えがちである。狙撃兵の銃撃だと言ってしまうのは簡単だが、多くの場合はあまり訓練されていない民兵の銃撃であることが多い。プロである狙撃兵の脅威は比較にならないほど高い。我々に実際に被害を与える能力は、狙撃兵と一般の兵士では大きく違うことを覚えておこう。我々の対応の仕方も自ずから異なってくるべきである。

上のように述べたからと言って、危険ではないと錯覚することがあってはならない。そこには訓練を積んだ狙撃兵が潜んでいるかもしれない。また、もともとハンターであった兵士は、彼らの持つ武器と照準器をどのように扱

うかを熟知している。

第一に大切なことは狙撃兵の出没する地域には近づかないことである。

しかしながら我々は、いくら事前の情報が正確で、計画が適切なものであったとしても、狙撃兵の脅威に晒されることになるかも知れないことを覚悟しておかなければならない。狙撃への一連の対応方法をリストアップして、それで安心できればいいのだが、事はそんな簡単に済むものではない。毎回、状況は異なるからだ。柔軟性を欠く原則はかえって害になることもある。

したがって、以下にいくつかの一般的な指針を述べる。

まず活動地域の地形をよく知ること。これは狙撃兵、ライフル銃、砲撃や迫撃砲などへの対処方法に共通する。つまり、危険度の高い地域ではその周辺の状況に敏感であることが大切だ。銃撃されたらどこに身を隠すか、どこに避難するかについて、常に先回りして考えるように自分を訓練しておきなさい。訓練すれば身につくスキルである。だから、次のフィールドトリップで実践してみなさい。

むやみに怯えることなく、冷静に自問自答してみると良い。「今狙撃されたらどうする？ 即座にどのように行動すべきだろう？」と。そして周囲を見回し「避難するにはあそこが一番だな。よし、あそこへ移動しよう」と自分に答える。これが自然にできるようになるまで、外出する毎に数回繰り返しなさい。

もしあなたが車両で移動中だったり、車両から降りている時に銃撃に遭遇してしまったら（あなた自身もしくはドライバーが車両を運転できる状態なら）、可能な限り、最大の速度で移動し続けなさい。静止した目標を銃撃することでさえ難しいのだから、速度が速ければ早いほど標的になりにくくなる。

銃撃が前方から来たなら、言うまでもなく、左右のわき道に逃げ込みなさい（街中であれば）。郊外ならば左右に逃げ、車外に出て車両をあなたと銃撃の方向との間に置きなさい。そうすると車両が、あなたが隠れて身を守るための防衛物になる。

車両を後退させたり方向転換したりすることが最善の策となることは滅多にない。あなたの動きが減速され、格好の標的となってしまうからだ。できかぎりこのような行動は避けなさい。

ドライバーが撃たれて、車両も動かず、あなたが狙撃されていることが明らかかな時には、道路から外れた物陰に飛び込むくらいしか選択肢はない。狙撃手とあなたの間に車両が来るように移動し、そこで最初に利用できる防衛物の陰に身を潜めなさい。迷っている時間はない。溝、岩、建物などの、狙撃と視界からあなたを守る堅固な遮蔽物はもちろん最も望ましい。次善の策は、ただ狙撃者から見えないように身を伏せることだ。何もしないよりはましである。



ソフトカバー（堅固でない遮蔽物）



ハードカバー（堅固な遮蔽物）

遮蔽物の後ろに隠れても、決して身を乗り出して何が起きているかを見ようとしてはいけない。少なくとも最初の段階では。狙撃者はあなたがどこ



に隠れたかを見ていて、あなたが頭をもたげるのをじっと待っているのかも知れない。それよりも、身を隠したまま、数メートル這って移動しなさい。するとあなたの位置が相手にわからなくなる。

危険な地域ではカセットテープやウォークマンを楽しもうと思っはいけない。発砲音を聞き損なってしまうからだ。たとえ冬であろうと車の窓は少し開けておきなさい。外部の音が聞き取りやすくなり、危険に対する早期警戒が可能になる。



建物の中にいるのであれば決してそこから動かないこと。好奇心にかられて窓から外を見ようなどと決して思ってはいけない。床に伏せるか、理想を言えば、あなたと銃撃音の方向の間に少なくとも二つの壁があるような場所まで這って移動しなさい。

もし避難シェルターまで安全に移動できるなら移動し、銃撃が収まるまでそこで待ちなさい。もしシェルターまで安全に移動できないならば、階段の下や、建物の中心部など、最も安全と思われる場所に隠れなさい。

警告射撃

あなたのすぐ近くに着弾する銃撃は警告射撃である可能性がある。全ての筋書きを予想することは不可能だが、以下に述べることは実際に私が体験したことだ。ある小さな村の住民のニーズ調査に行ったとき、村外れの道路際に地雷を発見した。我々はその手前で停車した。その直後、我々の頭上で銃撃音が聞こえたため、急いで車両から離れ、近くの家の中に身を隠した。銃撃は至近距離ではあったが我々を狙ったものではなかった。なぜそれが判ったのかって？ それは、我々にも車両にも被害が無かったことに加えて、弾丸が頭上を通過するときの独特の鋭い音が聞こえたからだ。（この、鞭が鳴るのに似た鋭い音は、弾丸が紛れも無く至近距離を通過した証拠である。シューやヒューという音も通過する弾丸の音だが、その場合距離は離れている）無人の地雷と警告射撃の組み合わせは我々を歓迎していないという明確なメッセージであった。続く銃撃はなく、我々は15分様子を見た後、車両に戻り、後退して地雷から遠ざかり、基地に戻った。至近距離への射撃によって警告が発せられたわけである。もちろんいつも同じものではないが、このようなサイン（合図、兆候）の組み合わせを見逃して前進し続けてはならない。



要約すると

- ・狙撃兵のいると見られる地域を避ける
- ・どこに隠れるべきかを常に考え、必要になれば実行する
- ・常に先のことを考える
- ・攻撃された場合、可能であれば車を走らせ、逃げ切る

- ・決断をためらわない
- ・好奇心を持たない
- ・警告射撃の識別の仕方を学び、無視して前進しない

待ち伏せ攻撃の脅威

待ち伏せ攻撃とは、物陰に隠れ、横たわって待ち伏せている者からの攻撃を言う。極めて危険で生命を脅かす状況である。以下に示す指針は最後の手段として理解されるべきだろう。待ち伏せ攻撃を避けるために、おそらくまず考慮すべきことは、もし待ち伏せ攻撃の標的になる可能性がある場合、そもそも移動するべきなのか？ という基本的な問いかけだ。もし危険度のアセスメントがこの種の攻撃を示唆しているならば、それを無視して移動するのは無謀である。殆どの場合、待ち伏せ攻撃は意図的な作戦であり、慎重に計画され組織されたものである。

待ち伏せ攻撃への対処方法

我々が行う危険度のアセスメントは、我々が望んでいるような完璧なものではないこともある。待ち伏せ攻撃の危険度を軽減するためには他にどのような予防策が考えられるだろうか？

- ・軍隊や治安部隊の車両に接近して移動しない。彼らは標的になっている可能性が高く、あなたが接近しすぎていると、銃撃戦が起きたときに巻き込まれてしまう。
- ・夜間に移動することを避ける。
- ・もし移動することが絶対に必要であるならば、少なくとも2台、あるいはコンボイで移動するように努めよう。いささか無情に聞こえるかもしれないが、生きるか死ぬかの状況で移動することが避けられない場合（例えば、疾病・受傷等に伴う要員の輸送—Medical Evacuation）、一台の車両が待ち伏せ攻撃されても、他の車両には切り抜ける可能性が残されるからだ。
- ・あなたの所属機関が防護ジャケットやヘルメットを支給しているのなら、移動時には常に着用することが賢明だ。
- ・あなたが、意図的に置かれた障害物や、急ごしらえの道路封鎖に遭遇した場合、もし事前に停車する余裕があるなら停車し、状況を判断しなさい。疑わしき場合は引き返すことだ。しかしながら、プロの手による待ち伏せ攻撃は急角度にまがった道路や丘の向こう側など、予期できない場所が選ばれるので、事前に停止して判断するという選択肢はないだろう。
- ・待ち伏せ攻撃が起こりそうな地域では「地形」をよく知っておこう。車両又は徒歩での脱出経路となり得る場所を常に頭に入れておくよう努力しなさい。待ち伏せ攻撃が起こりそうな地形とはどんなものなの

だろうと自分自身に問いかけよう。いくつかの例を挙げてみよう（待ち伏せ攻撃を仕掛ける者は不意をつくことを狙うが、同時に、事がうまくはこばなかった場合の彼ら自身の逃亡経路の確保も考えていることを覚えて置こう）。

—急な坂の頂上の、道路が急角度に曲がったところ

—車両の速度を落とさざるを得ないでこぼこ道

—逃走の際に隠れやすい雑木林

待ち伏せ攻撃に遭遇したら

もしあなたが意図的に仕組まれた待ち伏せ攻撃に合ってしまったら、言うまでもなくあなたは非常に危険な状況に陥ったことになる。あなたの取るべき行動は次のように限られてくる。

- ・もしもあなたの車が先頭車両（攻撃の直接の標的）であるなら、唯一の選択肢は、ドライバー以外は床に平らに伏せながら、可能な限り高速で走り抜けることだ。道路の右や左方向に逃げることも可能かもしれないが、もし待ち伏せ攻撃が巧みに仕組まれていたならば、それが成功する見込みは少ない。
- ・もし、ドライバーが撃たれたり、車が動かなくなったりしたら、同乗者は「爆弾が破裂する」ように（四散して）車から飛び出して、可能な限りバラバラな方向に走り、危険地域を脱出するまで逃げ続けるべきだ。
- ・もしもあなたの車両が2台目である（すなわち、攻撃の直接の標的にまだなっていない）場合は、直ちに危険地域（「キリング・ゾーン」、殺戮地域）から脱出するべきだ。そのためには車を後退させたり、左または右方向に旋回したり、または停車して同乗者を四散させたりしなさい。

待ち伏せ攻撃直後の現場に遭遇したら

治安部隊を攻撃するために仕組まれた攻撃や、治安部隊が対抗勢力に対して仕掛けた攻撃など、最近起こったとみられる待ち伏せ攻撃の現場に遭遇する可能性もある。言うまでもないが、あなたはこの現場ではあまり歓迎されているとは言いがたい。これもまた、非常に危険な状況といえよう。自明のことだが、進行中の銃撃戦に巻き込まれる危険もある。

勧告としては

- ・もし可能であれば、現場に近づく前に停車する
- ・向きを変え現場から後退する
- ・上記の行動を取るには遅すぎた場合、唯一の選択肢は車から降り、物陰に隠れる
- ・状況が沈静化したならば、両手を挙げて服従する意思を明らかに示し、

あなたの組織のロゴや旗を見せて、あなたが中立であることを懸命に訴える

- ・もし状況がさほど危険でない場合、つまり、待ち伏せ攻撃や同類の事件がすでに終了した後あなたはその現場に着いた場合には、停車して、その場を管理している人々の指示に従う

手製（簡易）爆発物の脅威

手製爆発物は基本的に「自家製」である。小さな手榴弾のような物から、対人地雷や、金属片と爆薬で作られたクレイモア型の大型地雷（指向性破片地雷）に似た物まで、多様な種類がある。ただ単に既製品を調達する資金がないために手製爆発物を用いるグループもあれば、武器を輸入することが困難なために自分たちで作ってしまうグループもある。最も簡単な構造のものは、まるで花火のようなもので、ダイナマイトの周囲に釘をテープで貼り付けて殺傷力を高めている。ただ導火線に着火して、敵対者やその車両、家屋めがけて投げつけるだけである。

より大きなものには、地雷に似ている装置があるが、形は地雷とは明確に異なり、大きさも必ずしも同じではない。例えば、木製のケースの中に数オンスの爆発物を仕掛けた対人地雷がある。これは感圧式で、あなたが木箱の蓋を踏むと箱が閉まり、電気回路がつながる。すると内蔵された電池から電気が流れ、起爆装置が作動して、本体の火薬が爆発する。世界の多くの地域で大型手製爆弾が確認されているが、時には数百キロの爆発物を内蔵したものも存在する。使われる爆発物は袋入りの肥料のようなありふれた物であることもある。起爆すると猛烈な爆発を引き起こす肥料もあるのだ。これらの大型手製爆弾は、道路際に置かれたり、道路下の排水溝に隠されたり、駐車中の車両や自爆テロに使用される車両に仕掛けられたりする。時には道路の上に張り出している木の枝にぶら下げられていることすらある。

手製爆発物の脅威への対処方法

ではこれらの危険な装置の脅威を整理しよう。小型の（手製）対人地雷への対処法は前に述べた対処方法と全く同じである。したがってここではその他の装置について、それらがなぜ、どのように使用されているのかを考えてみよう。

まず、なぜ使用されるのだろうか。紛争当事者の立場で考えてみると次のような疑問が生じる。人道援助機関の要員を直接の標的にするために、貴重な人手や、乏しい資機材を無駄にするだろうか？ いや、そんなことをする必要はない。もし彼らに何か言いたいことがあるなら、単にあなたの車を止めたり宿舎に入っていったりすれば事足りるのだから。つまり、あなたが前

述べたような大型爆弾の直接の標的になることはまずない。大型爆弾は、敵の脆弱な所や孤立した地点を直接の標的として、時には数週間にわたる行動パターンの偵察の後に、注意深く設置される。例えば敵のコンボイが頻繁に通過する道路下の排水溝や、街中の軍事施設や警察署の向かい側に駐車している車両の中などである。

次に、どのような仕掛けだろうか？ 大型爆弾の標的になるものについてはすでに説明したが、ではどのようにして起爆させるのか？ 方法はたくさんある。まずは時限装置だ。設定した時間に起爆させたり、特定のイベントの行われる時刻に合わせたり、あるいは単に爆弾設置者が安全圏に離脱するまでの時間を確保したりすることができる。次に、道路や小道を横切るトリップワイヤーと接続することができる。さらに、数百メートルも離れたある種の「制御装置」に電線で繋ぐことも多い。起爆装置を作動させる者は遠くにいて、身を隠しているが、爆弾設置地点をはっきり視認できるところにいる。標的がその地点に接近するのを待ち、電池から電流をワイヤーに流して、爆発させるのだ。また別の起爆方法は電子信号によるもので（より精巧な装置ではあるが私の経験からすればかなり使われている）、起爆する者は小型の送信機を持ち、爆発装置には受信機が設置されている。ラジコンの模型飛行機や車に非常に似た装置で、玩具店や模型店で入手できる。爆弾を仕掛けた者は隠蔽された場所で標的を待ち受け、送信機から起爆装置を作動させる無線信号を送り、爆弾を破裂させるのだ。

もうひとつ、よく記憶にとどめておいて欲しい手法がある。それは、このような爆弾はしばしば2個一組に設置されることだ。一発目を爆発させ、二発目の起爆をしばらく待つ。なぜ？ 人々は、特に敵の人員は、一発目の爆破現場に集まるからだ。車両や兵士が事件に対処しようと現場に集まってくる。十分に人が集まってきたら（そして彼らが十分な警戒を怠ったならば）、彼らは格好の標的となる。そこで二発目を爆発させるのだ。

手製爆発物の危険を回避、軽減する方法

以前に他の兵器についてしたのと同様に、どのように脅威を軽減できるかを考えてみよう。

まず考えなければならないことは、これらの爆発物による被害の重大な副作用だ。実は犠牲者の数は、軍隊や警備隊の間だけでなく、民間人の間でも大きいのだ。その理由は2つある。爆発物が仕掛けられた場所に民間人がいることが多いが、もっと不幸な理由は、爆破後に周辺に展開している警備隊が「容疑者」と見られる者に向かって発砲することが多々あり、民間人が銃撃戦に巻き込まれてしまうからなのだ。

繰り返すが、あなたがこのような爆発物、特に大型の物の直接的な標的になる理由はない。したがって問題はその爆発の現場に居合わせることであり、この不運要素を軽減するには次に述べる対策を講じる必要がある。

警備隊の車両とは、それがコンボイでも、たとえ一台でも十分に距離を開いて運転するようにしなさい。速度を落とし、彼らの車両をはるか前方に行かせなさい。もしあなたの車両が標的の車両の間に入ってしまったら、標的のすぐ背後を走行したりすると、爆弾を仕掛けている人物があなたに特に気を使うことは残念ながらいだらう。彼には彼の任務があり、それを達成しようとするからだ。

もし爆発現場に遭遇したら、少なくともはじめのあいだは、現場に近寄って調べたい、あるいは救助の手伝いをしたいという、あなたのごく自然な衝動を抑えなければならない。

最善の行動は、車両を停止させ、車外に出て地面や道路際に身を伏せることだ。なぜかって？ 答えはわかっているはずだ。上に述べた銃撃戦に巻き込まれるのを避けるためである。

そのまま事態が沈静化するまで身を伏せていなさい。被害者を救助するためにあなたにできることをするのは、その後のことだ。衝動にかられ、被害者をすぐに救助しようとする、銃撃戦に巻き込まれて、不必要な危険に身を晒すことになるかも知れない。車両を横道に乗り入れたり、後退したりすることも可能だが、時間がかかるので止めたほうがよい。四駆の車両の中にいるあなたは危険に晒されていることを忘れないで欲しい。さらにこのような状況下で注意しなければならないのは第二の爆発の危険性である。最初の爆発現場に行くことは第二の爆発の危険に晒されることになる。最初に述べたようにこれらは単なる指針であって、私はあなたに犠牲者を救助するなども、関与するとも言えない。あなたはこれらの危険についてよりよく認識していると思う。ひとつひとつの事件にはそれぞれ独特の状況がある。あなた自身が判断しなければならない。

手榴弾の脅威

手榴弾についてはよく知られているので長い説明は避けよう。本質的に手榴弾とは手によって、あるいは「ロケット推進式手榴弾」(rocket-propelled grenade: RPG) と呼ばれる小型の携帯用発射機によって発射される小型爆弾のことである。手投げ式のものには内蔵式の導火遅延装置を有し、投げる者の安全をある程度確保するために爆発を遅らせる。それにより投擲者は爆発する前に身を隠して守ることができる。ロケット推進式手榴弾は着弾の衝撃で爆発するものが多い。我々がこれらの兵器の直接の標的になる可能性も手

製爆発物の場合と同じように少ない。運悪く「不適切な場所に不適切な時間に居合わせる」ことさえなければ、ということだが。

手榴弾の回避方法

手榴弾爆発の現場近くにいた場合には、前述の回避行動を取ること。車両から降り、身を隠し、無差別銃撃から身を守りなさい。

もし手榴弾があなたに向かって投げられ、それが飛んで来るところや地面を転がるところを幸運にも見ることができたならば、それが爆発するまでにはほんの少しの時間しかないことを思い出さなさい。手榴弾の爆風は上方かつ外側へ伝わる傾向があり、逆円錐形のような形に広がる。それゆえ、僅かの間にあなたが取るべき最善の行動は、即座に地面に平らに伏せるか、溝、あるいは物陰に飛び込んで身を隠すことである。身を隠すために走ってはいけない。即座に地面に伏せなさい。あなたの同僚に危険を知らせるため「手榴弾だ！」と叫ぼう。また、あなたの耳を手で保護することも有益だ！爆発後は、手榴弾が他にも投げられていないことが確実になるまで、1分ほど待つのが賢明である。もし手榴弾が不発だったとしても、決して近づいてはいけない。

窓の格子や金網のフェンスなどは手榴弾攻撃の防護には有効であり、手榴弾は跳ね返ったり、安全な距離で爆発したりすることになる。



擬装爆発物 (booby trap) の脅威

擬装爆発物とは、無害な見かけの物に仕掛けられた爆弾であり、人を殺害したり負傷させたりするように工夫されている。人がそれを動かしたり、近づいたり、あるいは本来危険でない行為(例えば、手紙を開封する、ドアを開ける、地面に転がっている魅力的な物体を拾う、など)をすることによって爆発する。無害な物体の内部に注意深く隠されていたり、あるいは無害な物に見せかけて作られていたりする。

撤退して行く部隊は、敵を陥れ、混乱させる目的で、様々な所に擬装爆発物を仕掛けることがある。それらは道や井戸、家屋の中にあったり、あるいは発見した兵士が触らないではいられないような魅力的なものに組み込まれていたりする。私がアルメニアにいたとき、つい最近無人となってしまった町の路上に素晴らしいトロンボーンが落ちていたことを思い出す。何人もの人々が通り過ぎたが、それを演奏しようとする者は一人もいなかった！

擬装爆発物を回避する方法

無人となった家、町や村を探索しない。残念なことに現在ゴーストタウンとなってしまった町が世界中に多く見られる。そのようなところをうろついたり、家屋に入って「生理的要求」を満たしたりしてはならない。

何気なく地面に置かれている興味を惹かれる物に触らない。そのままにしておきなさい。

不発弾の脅威 (unexploded military ordnance: UXO)

紛争地域で活動していると実に様々な兵器(弾薬)を見かける。使われたが作動しなかったもの、撤退のときに捨てられたもの、あるいは単に兵士が落としたりしたものなどが残されているのだ。そういった物は航空機用の爆弾、大砲の砲弾、手榴弾から小さいものは自動小銃の弾丸までに及ぶ。昨今ではこのような「UXO」は「紛争の爆発性残留物」とも呼ばれている。全て取り扱いには細心の注意を要する。一度発射された弾薬は非常に不安定なことがあり、例えば砲弾や爆弾の信管はちょっと突っただけでその使命を全うするかも知れない！地面に転がっている手榴弾は、拾った瞬間に安全ピンが抜け落ちてしまえば・・・バン！

あるとき、比較的安全な地域のオフィスにいたとき、X氏が戸棚の中にしまっている弾薬は本当に安全なのか確認してほしいと同僚たちから頼まれたことがある。私は、誰からそう頼まれたかを開示したくなかったし、また彼を最初から疑っているような印象を与えたくなかったので、寛いだかんじでX氏に近寄った。私は柔らかく、かつ率直に聞いてみた。

「戸棚の中に何か興味深いものをお持ちだそうですね？」

「ああ、例のうまいチョコレートのことかね？」

「いや、そうじゃなくって・・・」

私はこの有益な別情報はとりあえず記憶しておくことにとどめ、話を続けた。

「私はあなたが保管している弾薬の方に興味があるんですよ」

「ああ、あれのこと。ほら、これだよ。でも何か問題でも？」

問題があるかだって！ それは雷管がついていて今すぐにでも使うことができる手榴弾だった。しかも、使用するまでは簡単には引き抜けないように先が広がっているはずの安全ピンが、完全につぶれていたのだ。

「なかなか興味深い」と私は冷静を装って答えたが、本当は今すぐにでも走って逃げ出したい気分だった。「どこで手に入れたんです？」

「3ヶ月前にね、ドライバーが持ってきたんだよ。それでどうしたものか判らなかったんでそのまま戸棚にしまっておいたんだ」

つまりこの死に至る手榴弾は、ドライバーの鞆の中に入れられ、300kmも旅したあげく戸棚に放置され、何人もの人が手にとって眺めていたわけだ。もしちょっとした衝撃で安全ピンが緩んだら、人の多いオフィスのだ真ん中で爆発していたに違いない。私はとんでもないことをする人たちが存在することを、この話であなたに伝えたい。そしてお願いしたい。決してこんな馬鹿なことをするな、と。

この実話は、あなたの任務に直接関係のない事柄や物体に必要以上に興味を示すことがいかに危険であるかを物語っている。

不発のクラスター（集束）爆弾

とりわけ危険な UXO（不発弾）は不発のクラスター爆弾であろう。クラスター爆弾（cluster bomb units : CBU）とは大きな弾筒に小さな子弹を詰めこみ、空中で弾筒を開いて広範囲に子弹を撒き散らすものである。この爆弾は航空機、ミサイル、大砲などによって投下あるいは発射される。現在使用されている代表的な航空機搭載型クラスター爆弾である CBU-87 は、202発の子弹を内蔵している。それらは黄色の円筒でソーダの缶ほどの大きさ（長さ 20cm、直径 6cm ほど）である。CBU は戦車、その他の車両、歩兵の集団に対して使用される。

子弹の攻撃目標範囲は、弾筒の回転速度と開放高度（子弹を飛散させる高さ）によって決まる。1 個の爆弾が 100mX50m の範囲を子弹でカバーできる。クラスター爆弾は広範囲に散布され、しかも正確に目標を狙うことが困難なため、一般市民の地域の近くで使用されると際立って危険である。それに加え、もし弾筒が間違った高度で開いたり、子弹の信管が正常に作動しなかつ

たり、樹木が降下の妨げになったり、あるいは柔らかい地表や砂漠に落ちたりすると、着地時に爆発しないことがある。この「失敗」率の高さは（推定7%から10%）結果として子弾を、ほんの少し触っただけでも爆発する事実上の対人地雷となってしまう。これらの子弾は不安定で爆薬の威力も強いため、他の多くの不発弾に比べても危険度は非常に高い。

さらなる問題点は、子弾の鮮明な色と面白い形に子供たちが興味を持ってしまうことだ。多くは黄色に塗られており、それは例えばアフガン戦争のとき投下された食料援助パッケージと全く同じ色である。

クラスター爆弾はベトナム、ラオスでの戦いで使われ、最近では1991年の湾岸戦争、2003年のイラク紛争、1999年のコソボ紛争で使用されている。危険地域は広範囲にわたるが、よく知られていることが多い。危険地帯を特定できる現地の人々の知識は計り知れないほど貴重である。繰り返すが、全ての不発弾と同様に、クラスター爆弾に対して決して好奇心を持ってはいけない。触れてはならない。しかし、クラスター爆弾を発見したときには、当然のことながら報告をすると共に、他の人々に警告をせよ。

不発弾を回避する方法

これらの物体を認識するのは極めて容易である。決して干渉したり触れたりしてはならない。

見つけたら速やかにその場から立ち去り、同僚や他の関係各機関に報告しなさい。

劣化ウラン弾の脅威

近年のイラクやコソボなどにおける紛争では劣化ウラン（depleted uranium：DU）弾が使用された。²² 劣化ウラン弾とは装甲を貫通する爆弾で、通常は、戦車、航空機、ヘリコプターから発射される。最も一般的に使用されるDU弾は「貫通弾」と呼ばれ、大型の葉巻ほどの大きさと形状をしている。衝撃では爆発せず、かわりに発火、燃焼して装甲を貫通する。その過程で細かい酸化ウラン微粒子が撒き散らされる。殆どの微粒子が着弾点から50m以内に定着するので、装甲車両やその他の標的周辺は高濃度の酸化ウラン微粒子に覆われる。が、その微粒子が風によってさらに遠くまで運ばれることもある。

22 いくつかのウェブサイトが、DU弾がどこで戦闘に使用されたかの詳細を提供している。

役に立つ情報を含んでいるウェブサイトは
<http://www.unep.ch/balkans/> (UNEP) <http://www.nato.int/du/> (NATO)
及び、米国国防総省の湾岸戦争及びイラク紛争に関するウェブサイトである。

劣化ウラン弾を回避する方法

いまなお、DU 微粒子の吸入、摂取や被曝による影響についてはほとんど解明されていない。ある種の癌や健康障害がかなり増加するという主張はあるが、専門家による決定的な確証はまだ得られていない。²³ したがって、最良の助言は、DU 弾で攻撃された可能性のある軍事目標には近づかないことだ。その周辺は、高濃度の酸化ウランに覆われているかも知れないことを忘れてはならない。燃え尽きた戦車や車両を調べようとしてはいけない。使用された榴散弾の破片や（軍の装備品などのような）残骸を拾い上げてはいけない。もしあなたがそのような場所で微粒子に汚染されたかも知れないと思ったならば、皮膚と着衣を洗うことをお勧めする。

空からの脅威

上空からの攻撃はおそらく最も恐ろしく、最も対応が困難な危険である。攻撃は固定翼機によるものとヘリコプターによるものの2種がある。深刻な問題は攻撃の速さにあり、予告無く始まることだ。高速のジェット機による攻撃の最初の兆候は、すでにあなたの頭上を飛んでいる機体の耳を劈くような轟音であるかも知れない。速度の遅いヘリコプターでも、地形に合わせて低空飛行で進入してきた場合、音がかき消されてしまい、気がついたときには避難のための時間がわずかしかないこともある。

再度言うが、人道援助機関が直接の標的になることは極めて稀である。パイロットを訓練するには莫大な費用がかかるだけでなく、彼らの操縦する軍用機は非常に高価なものである。したがって、軍用機は優先順位の高い軍事目標の攻撃に使用され、無駄には使われない。だからなにか問題があるかって？ 残念ながら答えはイエスである。

最新鋭の軍用機や兵器を保有し、それらを正確に操る訓練をしている空軍ならば精密爆撃・攻撃が可能である。そのような空軍は必要な兵器を所有し、同様に重要なことだが、その兵器を使用するための訓練も行っている。レーザー誘導爆撃などは最近よく耳にする。しかしながら、湾岸戦争でわかったように、このような最新鋭の精密兵器でも絶対確実ではない。ミスは起き、残念ながら民間人が殺害されている。紛争の低次元レベルでは当然そのような高度な武器もなく、それらを使う訓練もされていない。

爆撃機はミサイルによる迎撃を避けるために高空から市街に爆弾を投下することもある。地上に起こるのは無差別な被害である。使用される爆弾も、軍事目標を正確に破壊することよりも、地上の人々に恐怖とパニックを与えるために作られたものであることがよくある。その例として、焼夷弾や、1つの弾筒から数百の子弾がばら撒かれ、広範囲に被害を及ぼすクラスター爆

23 DU 被曝によって起こされる健康障害の可能性については、WHO が資料を収集しており、以下のウェブサイトで見ることができる。

http://www.who.int/ionizing_radiation/env/du/en.

弾が挙げられる。

空からの脅威への対処方法

航空機やヘリコプターが使用されている地域での最も効果的な防衛施設は、空からの攻撃に対処する目的で作られた頑丈なコンクリート製のシェルターか（シェルターの項目参照）、建物の地下室である。湾岸戦争で実証された様に、最も強固なコンクリート製の掩蔽壕でさえ直撃弾からあなたを守ることはできないが、「至近弾」や爆風から身を守るには効果的である。

すでに述べたように、この種の脅威から逃げるために使える時間は非常に短いが、私の経験で役に立った、いくつかの兆候を紹介しよう。



すでに攻撃された地域の住民は空からの脅威を痛切に感じている。危険に関して非常に鋭い「第6感」を持つようになり、特に子供たちにその傾向が強い。子供たちは我々が気づくよりも早く爆音を聞きつけ、シェルターに向かって走る。あなたにもこの兆候は見えるはずだ。質問なんかしている暇はないし、誰も答えてくれないだろう。彼らにくっついて最も近くの堅固なシェルターに避難しなさい。

軍あるいは文官当局から空襲警報のサイレンなどにより警報が発せられる場合もある。もしあなたが、その土地に来て間もなければ、それらの機関からの警報を警報であると認識できないかもしれない。だから新しい土地に着いたら直ちに、空襲の脅威とどのような警報があるのかを現地の人に尋ねなさい。その他の空襲の兆候は、例えば対空砲やミサイルが発射されることである。多分あなたには彼らが何を狙って発射しているかわからないだろうが、

彼らには判っている。空を見上げたり標的を確認しようとしたりして無駄な時間を費やさず、直ちに避難しなさい。

私の経験では、低次元レベルの戦いが行われている地域での空襲の場合、その数分前に小型の飛行機（偵察機）が飛来する。この偵察機は戦闘機を標的に誘導するもので、現地の住民はその飛来が何を意味するかを正確に理解し、自分たちが何をすべきかをわかっている。あなたも彼らと同じ行動を取りなさい。

さらに、私の経験でいうと、軍用機が高性能でなく、訓練レベルも高度ではない低次元レベルの戦闘では、操縦士は空爆を行う前に一度町や目標物の上空を通過し、標的を確認することがよくある。二度目の飛来を待つてはいけない。直ちに避難しなさい。

あなたのオフィスの位置や、宿舎、倉庫の場所を、紛争当事者に前もって知らせておくことは、このような状況下での安全確保に役立つ。それらの位置は紛争当事者の作戦地図上に明記されているべきだ。これは明らかにあなたに有益なことである。操縦士は任務を遂行するために詳細な指示を与えられる。彼らの作戦地図にもあなたの位置が記入され、その位置を避けた攻撃計画を作ることが可能になる。もし彼らがあなたの位置を知らなければ、彼らの目標から外してもらうことはもちろん期待できない。



建物にあなたの機関のロゴマークを表示することもまた重要なことであるが、それは追加的な対策でしかない。紛争当事者に対する、詳細な事前通達が最も重要である。

操縦士は戦闘任務についているとき、ミサイル攻撃や弾丸を回避することだけでなく、様々なことに注意を払わなければならない。したがって細部にわたってすべてのものを認識することは不可能に近い。しかしながら、大きく、はっきりとした標章を屋根の上に描いたり、標章で屋根を覆ったりすることは、確かに役に立つだろう。操縦士はそれによって、出撃前に伝えられたあなたの位置を確認し、その位置に配慮した飛行計画を遂行できるだろう。

あなた自身がいかにして避難するかについてこれまで述べてきたが、同僚のことも忘れてはならない。彼らにも危険を知らせなさい。全員に危険を知らせる事ができる簡単な表現を決めておこう。無線交信で詳細に説明している暇はない。「空襲だ！避難しろ！」という意味だと誰もが認識できる単語を選び、その単語をシェルターまで逃げるあいだ、3～4回叫びなさい（例：「ホーク（鷹）！ホーク！ホーク！」）。基地の無線交信担当者は、他のNGOに同じ情報を流すように最善を尽すべきである。これらの警報を共有するために、NGO間で共通の緊急用無線周波数を設定するのは良いことだ。現地に駐在する国連軍との間での緊急無線周波数の共有はよく行われている。

我々の任務に影響を及ぼす脅威について、ある程度の細部にわたって説明してきた。しかしながら、私はこれらの脅威に対応する一般的な指針を示しただけであることに注意してほしい。どの状況にもそれぞれ独自の特徴がある。様々な脅威のそんな詳細を知ることによって、危険の兆候をよりよく認識し、それゆえに直面する危険を最小限に抑えることが可能になる。また、これらの知識が、未知のものへの恐怖を多少とも払拭する助けになったことを私は願っている。

第5章

化学兵器、生物兵器、 放射能、核兵器の脅威

これらの問題は、人道援助機関の要員の安全に関わる事柄のなかでも急激に変化しつつあるものであることをはじめに強調しておきたい。各機関はこれらの脅威に対応するための、独自の詳細な対応手順を持っているかも知れない。以下に述べることは、それぞれの分野の専門家による（この本の出版時の）最善の指針（規則ではない）である。

大局的な視点

化学兵器、生物兵器、放射能、核兵器（*CBRN:Chemical,Biological,Radiological and Nuclear weapon*）の脅威は、実際の状況の中で理解することが重要である。紛争状況下での様々な「通常兵器」による危険をあなたは既にこの本によって理解していると思う。しかし、CBRN兵器を取り巻いている謎めいた雰囲気と、その使用が引き起こす被害の恐ろしさが、あなたにとっての実際的なリスクについての理解をゆがめてしまうかもしれない。交通事故や個人の安全確保・危機管理に対する脅威こそがよくあるものであり、ほとんどすべての紛争地域での任務において焦点となるべきである。歴史的にはCBRN兵器の使用は「起きる確率の低い出来事」であるとはいえ、実際に使用されたときにはもちろん巨大な影響を及ぼすことになる。したがって準備を怠らないほうが良い！CBRN兵器の脅威のほかに、産業災害に起因する類似の脅威に対しても注意が必要だ。

CBRNの脅威の種類

CBRNの脅威の種類は実に多様である。

化学兵器戦に使われる物質

化学兵器戦に使用される物質は様々で、ミサイル、砲弾、迫撃弾、あるいは航空機によって投下され、その後、煙霧、蒸気またはガスとなって拡散することが多い。これらの物資は吸入、経口摂取、さらには皮膚からの吸収により人の体内に侵入する。ある種の物質（例えば神経ガス）は急速に死に至らせるように作られているが、人を無力化するものや、単に炎症を与えるためのもの（例えば暴動鎮圧剤）もある。いくつかの物質は自然環境に残存し、（皮膚を含む）表面に固着し、ガスを空气中に放出し続け、長期的にわたる危険をもたらす。即座に死に至らしめるものは急速に拡散する。多くの物質が空気と同等か或いはそれ以上の密度を有しているため、地下室や低

いところに蓄積する傾向がある。いくつかの物質は臭いで検知可能とされているが、この方法は確実とはいえないので当然のことながら決して推奨できない。

有毒性工業化学物質

化学兵器戦に必要な物質を製造し効果的に使用するには比較的高価で高度な技術が必要である。したがって現実的に使用できるのは比較的少数のユーザーに限られる。しかしながら塩素やホスゲン（2つとも第一次世界大戦では効果的な兵器であった）などのたやすく手に入る工業化学物質を使用することは容易である。このように間違った使い方をされる可能性を持つ化学物質は実に多様なので、個別の探知方法や防護策を用意することは困難である。

生物兵器戦に使われる物質

紛争地域で活動していると、そこに自然発生する様々な病気の危険に晒されることになる。しかしながら生物兵器が使用される可能性も否定できない。重ねて言うが、兵器としての力を持つ生物兵器を製造、使用することは小説などで語られているほど容易ではない！とは言うものの、非国家組織でさえやりかねない炭疽菌孢子使用の可能性も真剣に考えねばならない。生物戦で使用される物質には伝染性のもの（人と人との接触で広がる疾患）と非伝染性のものがある。前者の例としては天然痘があり、後者には炭疽菌がある。犠牲者が物質の初期感染者だけに留まらない前者は明らかに大きな懸念である。化学兵器の場合と同様に、これらの物質は様々な方法により撒き散らされる。通常は吸入することにより体内に入り込むが、食料や水源を汚染する方法をとるものもある。感染した蚊などの昆虫によって伝染されるものさえある。

放射性物質と核兵器にまつわる事件

兵器を製造している国家以外の組織が核爆弾を所持する可能性はあまりないが、スーツケースサイズの原子力装置や放射能装置が軍事保管施設から消えてしまうことは時折ある。原子力発電所や放射性廃棄物貯蔵所または処理場等への攻撃に通常兵器が使用される可能性もある。さらに、放射能を撒き散らす「汚い爆弾（dirty bomb）」が使われる危険性もある。核を利用した装置は、当然のことながら、致命的、非常に致命的であるが、放射性物質の影響は必ずしも致命的ではなく、使用される物質の種類、量、あなたとの距離によって違ってくる。

CBRNの脅威からの防護

CBRNの脅威を軽減することはとても複雑な課題であり、いくつかの対策はあるが、その殆どが軍隊あるいは文民保護組織によってしか行うことが

出来ず、人道援助機関は実施出来ない。脅威の実態を考えると、殆どの人道援助機関の持つ手段や裁量の域をはるかに超えているだろう。熟練した専門家の助言による必要な訓練を実施するべきである。そういった訓練や助言を得られないのであれば、その機関は CBRN の脅威が存在する地域では活動しないことを勧める。とは言うものの、CBRN 兵器が使用される可能性のある地域の周辺で活動する要員の場合には特に、その個々人のリスクを軽減する手立てはある。この章の残りの部分ではそれらの手段について述べよう。(本書全般についていえることだが) あなたの所属する機関の方針と手順をしっかりと念頭に入れつつ読んで欲しい。

脅威の状況評価

CBRN 兵器の使用の可能性とその種類についての正しい判断は、どの地域についても、事業開始前のリスク評価の一環であるべきだ。それができれば、リスクの軽減を図るためのステップを考えることができる。しかしながら、この脅威についての国際的・国内的な機密主義のため、上述のような評価を行うことは困難であろう。さらに、不意打ち攻撃の可能性は常に存在する。このような現実があることを、不測の事態への対応計画に組み込んでおくべきである。

探知

CBRN 物質を知覚だけで探知することは本質的に不可能だ(核爆弾の明らかな閃光や爆風はもちろん例外だが)。したがって CBRN に関係した事件は、有毒物質や他の危険物質についての警報や緊急探知なしに発生する可能性がある。特殊な探知器や計測機器は存在するが、それらは軍隊や、文民保護組織だけが保有していることが多く、高価かつ複雑であり、さらに、これらの機器を使用し結果を解析するには教育と訓練が必要である。

殆どの化学戦物質は本質的に無臭であり、明白な症状を直ちに起こさないこともある。生物兵器に使われる物質の場合、初期症状は一般的に見られるようなものである(例えば発熱や一般的な疾患で、自然界に存在する様々な病気と区別がつかない)。このような場合、疾病の発生を確認し、その種類を見極めるまでに、数日から数週間要することもある。通常見慣れない疾病の突発的な流行は生物兵器の使用を疑う必要があるが、それを判断することは非常に専門的な仕事の領域となる。

放射性物質は目に見えず、色もなく味もない。症状の発生までにある程度時間がかかるため、被曝したことが直にはわからないこともある。

CBRN 事件が起きたことをうかがわせる現象には、以下が含まれる

- ・多数の犠牲者

- ・犠牲者が、吐き気、呼吸困難、痙攣、精神錯乱等の症状に見舞われている
- ・鳥や昆虫が空中から落下する
- ・普段は見かけない動物や昆虫が死んだり死にかけたりしている
- ・不審な液体、飛沫、粉末、気化物質
- ・表面に見られる水滴や油膜
- ・不可解な臭気（苦扁桃bitter almondの臭い、桃仁peach kernelの臭い、刈り取られたばかりの干草や青草の臭い）
- ・普段と違う、或いは無許可の噴霧
- ・爆発物の臭いや兆候、あるいは煙
- ・不審な手紙や、臭気を発していたり、白い粉末が入っていたりする小包の受領

上記の現象の数が多ければ多いほど CBRN に関係した事件が起きたという可能性が高くなる。警報サイレンや叫び声による警告を聞くこともあるかもしれない。殆どの軍隊では、金属類を叩きながら、同時に「ガス！ガス！ガス！」と叫ぶことは、CBRN 事件の標準的な警告である。さらにもっと大きな手掛かりは、あなたの近くにいる兵士が防護用の装備を身につけたときだ。

医学的対応策

CBRN の影響を軽減するために、数多くの医薬物質を使用することができる（とは言うものの、それらの物質の多くは軍事関係者のみに入手可能だ）。もしあなたがこれらの対応物質を支給されたならば、あなたの所属機関が指示したやり方によってのみ使用しなさい。

ある種の生物兵器物質に対しては、数種の予防接種が可能である。これらの予防接種を有効にするためには、十分事前に接種しておくことが必要だ（当然のことながら、自然界に存在する疾病に対する予防接種も同様に接種しておくべきだ）。また、生物戦が起こると予想されたり、起こってしまった場合には、抗生物質が支給されることもある。

ある種の放射性物質の被曝後にヨードカリウム錠を与えられることもあるが、それとて全ての放射線被曝に対して有効であるわけではない。

化学戦については、予防薬や自己注射器などが神経ガスの作用を中和するために有効だが、安全かつ効果的に使用するためには、細心の指示と訓練が要求される。

即応訓練

化学戦や有毒性工業化学物質の被害が起きた状況では、あなた自身が犠牲者になってしまうことを防ぐために、即座に対応することが必須である。そうすることによってこそ、他の人々を援助することも可能になる。

あなたがしなければならないことは

- ・もし防護機材等を携帯していたなら着用する。携帯していないときは即座に、汚染されていない水に浸した清潔な布で鼻と口を覆う。
- ・人と接触することを避ける。
- ・明らかに汚染されていると思われる衣服を脱ぎ、廃棄する。
- ・危険らしきもの、とりわけ炎、煙、蒸気などに近づかない。
- ・危険になり得るとされるものの近くにいる時間を最小限にする。
- ・危険になり得るとされるものからの距離を最大限に取る。
- ・避難経路の風向きを考慮する。速やかに危険物の風上に移動する。あるいは、柱状に噴出しているガスや煙から遠ざかる方向に速やかに移動する。風の向きや速さの変化により、危険地域も移動することを十分に警戒する。
- ・車両の中にいる時は風上に5マイル（8km）ほど移動し、状況を再度判断する。
- ・CBRNに対して「防御された部屋」の中にいて、その防御性に問題がない場合は、少なくとも目の脅威が過ぎ去ったと思われるまでそこに留まる。留まらないのであれば、上に述べた方法で速やかに避難する。

核による被害に遭遇した際は即座に身を伏せなさい。爆発の閃光を見てはならず、衝撃波が遠ざかるまでは立ち上がってもいけない（閃光と衝撃波の間には時間的なギャップがある）。

放射能が発生している状況では、いかなる場合でも（当然のことながら核爆発後の状況も含めて）以下の原則に従い自分自身を保護しなさい

- ・時間経過一放射能の発生源付近にいる時間を最小限にとどめる
- ・距離一発生源とあなたとの距離を広げる
- ・遮蔽一発生源とあなたとの間に重量のある物体を置く

住居の防護対策

第7章及び第8章では、いくつかの脅威に対して安全な住居の見つけ方、

補強の仕方、そして備蓄の仕方などを紹介する。CBRNの明らかな脅威や可能性については事前に調査することが大切であるとすでに述べた。それと矛盾するように見えるかも知れないが、もしCBRNが使われる可能性があるならば、以下のような条件についても考慮する必要がある。

安全な部屋を確保するためにしなくてはならないことは

- ・予想される脅威が主に化学物質である場合には、地表より高い場所を選ぶ（実際に高ければ高いほど良い）。脅威が主に放射能や、通常兵器である状況下では、地表より低い場所を選ぶ（厚い壁で囲まれているならなお好ましい）。ガラス、コンクリート、金属その他の高密度な素材は、あなたを放射能から保護してくれる。
- ・窓とドアの数が最も少なく、理想を言えばバスルームに隣接した、建物の内側にある部屋を選ぶ（建物の中心に近ければ近いほど良い）。
- ・全ての窓と外部に通じるドアを閉め、ダクトテープやプラスチックシートなどで目張りする。脱脂綿や湿った布切れとテープで全ての鍵穴と割れ目を埋め、水を含んだ布でドアの下の部分の隙間をふさぐ。
- ・エアコンの通風孔や流出孔を閉め、扇風機とセントラルヒーティングを停止する。

第7章及び第8章で論じる装備や手順に加え、以下のことをしなければならぬ。

- ・防水加工を施してある衣服、長袖シャツ、長ズボン、レインコート、ゴム長靴、ブチルゴム製の手袋を常備する
- ・数週間分の飲料水と密封容器に入れた保存食を常備する
- ・貴重品を密封できるプラスチックの袋に入れておく

個人用防護装備

軍人と文民保護組織の要員は特別な個人用防護装備を支給され、その使用法の訓練も受けている。それらの装備には、活性炭と微粒子フィルターを使った特殊な濾過装置付きの防毒マスク、ブチルゴム製の手袋、オーバーブーツ、特製の上着などが最小限含まれる。が、人道援助機関の要員がこのような装備を入手することはできないかも知れない。

少なくとも、必需品を入れた「脱出用リュックサック」を用意し、特に高度の警戒態勢の間は常に携行するか、もしくはすぐ手に取ることの出来る場所に保管しておくべきである。以下の物を入れておかなければならない。

- ・防水加工を施したポンチョ（あるいはプラスチック製のゴミ袋を代用）
- ・ガスマスク

- ・ブチルゴム製手袋
- ・化学反応検知紙（入手可能であれば）。ある種の化学兵器に使用される物質が存在するところでは色が変わる紙

どのような個人用防護装備の入手が可能であったとしても、実際に事件に遭遇して必要になったときになって、初めて身につけるといような事態は避けたい。装備を効果的に、かつ自信を持って使用するために、あなたがしなければならないことは

- ・個人用防護装備の着脱の練習を（時間と競争しながら）行う。防毒マスクが役に立つためには、警報を受けてから9秒以内に装着しなければならない。装着したら「ガス！ガス！ガス！」と叫びなさい。この行為はあなたの同僚に対し事件の注意を喚起するばかりでなく、同時にあなたの防毒マスク内部のガスを外に押し出す効果がある。また別の留意点は、もしあなたがヒゲをたくわえていると（あるいは2～3日ヒゲを剃っていなかったりすると）防毒マスクの隙間から毒物が入り込んでしまうということだ。
- ・もし可能であれば、あなたの個人防護装備の着脱を同僚と一緒にやってみなさい。そうすることによりお互いに装備が完全にフィットしているかを確認することが出来るし、お互いの汚染を除去することも可能になる。

汚染除去

化学兵器或いは放射性物資による汚染が確認されるか、あるいはその疑いがある場合、あなたは安全な部屋に入る前に汚染を除去しなければならない。除去を効果的に行うためには（適切な機材や化学薬品が所定の位置にあるように）事前準備をし、その使い方を練習しておく必要がある。

汚染除去のためには以下のものを用意しておかなければならない。

- ・シャワー設備（シャワーバッグでも可）、洗剤（液体洗剤が望ましい）、スポンジまたは柔らかいブラシ、そして漂白剤
- ・全員分の（ビニール袋に保管された）清潔な衣類一式
- ・汚染された衣類を入れるためのビニール製ゴミ袋と記入用の札（付箋）



あなた自身や同僚の汚染除去をするためには

- ・即座に顔を拭き、大量のきれいな水で目のあたりを繰り返し洗い流しなさい。
- ・衣服に付いている微粒子があなたの顔や皮膚に広がらないように注意しながら、すべての汚染された衣服を脱ぎなさい。脱いだ衣類はビニール袋に入れて封をきなさい。
- ・「洗い流し・ぬぐい・また洗い流す」洗浄法 (the rinse-wipe-rinse method) を使いなさい。髪も含めた頭からつま先までの全身を、刺激性の少ない洗剤と安全な水で洗いなさい。汚染物質の蒸発分散を最小限にするために、できれば冷たい水を使いなさい。
- ・もし水が十分でない場合には、タルカムパウダーや小麦粉を皮膚に振りかけ、30秒待ち、布切れやガーゼのパッドで払い落としなさい。できればブチルゴム製の手袋をはめながら。
- ・何も使えないような窮境にあるならば、汚染物質を吸収するために乾いた土をこすりつけるか、あるいは服を脱いで転がって土まみれになりなさい。それから可能であれば身体を洗い、着替えなさい。
- ・きれいな服を着なさい。
- ・ひどく汚染された衣服は焼却処分しなさい。汚れが軽いものは熱い湯で洗うことができる。

第6章

あなたの安全を確保するその他の方法

この章では、特定の兵器についての解説から離れ、あなたの安全に影響を与えるより幅広い事柄について述べてみたい。

我々は現地の党派や軍隊、また、一緒に仕事をしていく人々とのように接してゆけばよいのだろうか？ 彼らは我々を一体どのように見ているのだろうか？ この章ではそんな問いかけに加えて、現場で必ず遭遇することになるチェックポイントや道路封鎖への対応の仕方についての指針も示そう。現場での活動計画を策定することはあなたの安全確保の観点からも重要なことであるので、この章ではその策定方法について助言をし、さらに、事件に対する最良の対処の仕方と、正確な報告の仕方についての私の考えを最後に示したい。

**我々は軍隊、治安部隊、現地の党派、そして現地住民からどのように見られているのだろうか？
彼らは我々に対してどのようにふるまうのか？**

*他人が我々を見るように、我々自身を見る能力を
何かの力が与えてくれたなら！*

ロバート・バーンス

我々がどのように見られているのかということは、数行で述べるには大きすぎる課題である。さらにどの国も固有の特性を備えている。我々にできることは、経験と詳細な観察をもとに、我々自身の行動や、それに対する現地の人々の反応に見られる、共通のテーマや態度を抽出してみることである。

紛争が現在起きている地域のほとんどで活動した私の率直な意見は、人道援助機関の仕事に対する大きな敬意は存在する、ということだ。皮肉っぽい言い方だと感じる人もいるかも知れないが、はっきり言えば、(我々が負っているリスクと、行く場所を考えれば) もしそのような尊敬の念が無かったならば、我々や同じような他の機関も、より大きな損失を体験してきたに違いない。

確かに近年悲劇的な事件が起こっている。危機管理体制の脆弱さがその原因であった場合もあり、直接の標的にされた結果であることが明白であった場合もある。しかし大切なことはこれらの事件を冷静に受け止めることだ。

我々が暮している大都会では発砲事件や暴力行為は日常茶飯事ではないか。それに比較すれば、幸いなことに人道援助機関の要員が事件に巻き込まれることはまれである。

通常、人々は彼らを援助しようとしている人には敬意を表す。

しかし、理解しなければならない重要なことは、世界の一部の地域では以下に述べるような行動が全く見られないことだ。あなたを派遣する機関はそれらの地域と、考えられるリスクをあなたに説明してくれるはずだ。

一般市民は、あなたの行う援助活動の多くが、彼らが生き延びるためには不可欠であることを理解している。彼らは援助を必要とし、援助を行うあなたに敬意を持っている。この敬意は軍隊や武装勢力にいたってはさらに深くなる。なぜならあなたが直面する危険を誰よりも一番よく知っているからだ。彼らがそんな気持ちを率直に表すことはまれではあるが、民衆を助けようとするあなたの勇気に対して、賞賛に近いぐらいの特別な敬意を（信じられない！という驚きさえ）持っていることがよくある。

我々の活動に対する軍隊と民間人の見方をもう少し考察してみよう。

軍人の視点

組織化・統率された軍隊の戦闘員（職業軍人）のほとんどは、武器を持たない者や脅威とならない者を攻撃することを抑制しようとする自尊心を持っている。武器を持たない民間人が攻撃された無数の例があるではないか、という議論が当然出てくるだろう。その通りである。しかし、それらの被害者は、その兵士にとっては明確な敵だったのだ。「彼らは我々の人民を攻撃した、だから彼らの人民を攻撃するのだ」

戦争で荒廃してしまった国々の多くでは、兵士は、死の危険に立ち向かって生きてゆく勇敢さが日常の世界、という環境で育ってきた。だからその勇気を持つ者には、それが味方であろうと敵であろうと、あるいは人道援助機関の要員であろうと、尊敬の念を持つ。

だからあなたは友人として迎えられることはあっても、敵とは見なされないのである。彼らの戦闘地域にたった一台で入って行く人道援助機関の車両を見る兵士は、それを非常に勇敢な行為であると思い、その乗員を尊敬するのだ。そんな人々を傷つけたり殺したりすることは不適切な行為であるとは彼らは考える。そんなことをする兵士が戦友や上官から立派だと思われることはまずなく、逆に不面目でみっともない行為であると見られるだろう。

兵士には、正しいことと間違っていること、名誉と不名誉を判断する基本

的な能力がある。おそらく彼らの心の中では、戦いに崇高さがあり、彼らの祖国や特定の大義のために死ぬことにも誉れがあるのだ。敗れた敵方や犠牲者を積極的に援助している者に対して思いやりを示すことにも、同様の誉れと崇高さがあると彼らは感じる。世界の多くの地域で、宗教が兵士たちのこのような気持ちをさらに強めている。

他方では、兵士にとって、通りかかった車両の目の前や歩行者の近くに銃を発射することは愉快的気晴らしであり、夜のキャンプファイアの周りで面白おかしく語るものであるのかもしれない。我々が様々な紛争地域で経験した「危機一髪」体験の多くは、おそらくそんな戯れの結果であったのだろう。



要員が幸せなとき



兵士が幸せなとき

紛争地域の兵士が直面する複雑な状況

前に説明した戦争とまでは呼べない紛争では、軍隊や他の武装勢力は効果的な戦いをするための装備を持たず、訓練も受けていないため、驚くほど組織化されていないことが多い。

多くの国で起こっている紛争が、比較的新しく組織された軍隊や武装勢力によるものであることは覚えておく価値がある。彼らは効果的な外見（軍服や最新兵器など）を持っているかもしれないが、兵士は基本的に経験不足だし、司令官も同様だ。いくら近代的な兵器で戦っていても実際には中世の戦争と変わらない。広い地域のあちこちで、小さな民兵団や徒党が、上官からの統制も無いままに戦闘行為を行う。どんな「部隊」でも自分の望む行動をすることができ、武装集団の長たちは、自分たちの領土を広げ富を得る目的を達成しようと、それぞれ独自に行動する。より大きな組織の総合的な戦略に対する彼らの忠誠心は希薄であるか殆どない。同盟関係は、個人的なあるいは局部的な利益が得られるかによって、毎日のように変わる。

「だから、そんなことが私にとって一体なんなの？」とあなたは問うだろう。

実は、大変に重要なことなのだ。なぜなら、このことはあなたが残念ながら直面するだろう現代の紛争の難しい局面を示しており、それをあなたは理解しておく必要があるからだ。

例えば、軍司令部によって約束された事や、正式に発せられた詳細な通達がなぜ現場では順守されないのか、その理由が見えてくる。そんな理解は、あなたの活動を直接に左右するものであるから、しっかり考慮に入れなければならない。実際の問題として、事前の合意が当てにならなくなってしまうのだ。その原因は、軍が必要な連絡や命令を確かに伝えるための手続きを単に確立していなかったり、あるいはそのための通信手段を持っていなかったりするところにある。結局のところ、あなたにチェックポイントを通過させるか拒否するかを決定するのは、そこにいるひとりの兵士である。あなたがいかに努力し、慎重に計画していたとしても、その兵士はあなたの任務について軍司令部から全く何も知らされていないかもしれないのだ。

最近私は、この指揮・命令系統あるいは情報伝達体制の不備を身をもって体験した。救援物資を輸送する大規模なコンボイを綿密に計画したときのことで。代表部は事前にすべての交戦当事者から、最前線通過の許可を取得し、一時的停戦の約束ももらっていた。しかし、残念ながら我々の通過地点を見下ろす丘の上に駐屯していた迫撃砲部隊はその連絡を受け取っていなかったため、我々に砲撃した。翌日、その当事者は、連絡が末端まで伝達されていなかったことを全面的に認めた。

では、我々はこの腹立たしい現実にどのように対処していったらよいのだろうか？ 残念ながらこれといった決め手はない。当然のことながら、十分に余裕を持ってまず計画を綿密に策定し、事前に関係当局に通知し、必要な合意を得るべきだ。そうすることにより、情報の伝達が促され、最も重要な存在である現場の兵士が協力的になる可能性を高めることができる。次に我々の要請が実際に伝えられているかどうかを確認しなさい。電話をかけ、話し続け、しつこいほど食い下がりなさい。うんざりする作業だが、軍が抱えている問題に対処するためにはどうしても必要なのだ。急いで作られた計画はこのようなタイプの紛争地域では単に無謀である。司令官はそんな計画を考慮する時間もなく、現場の兵士はあなたの任務や活動などわかる由もない。そんな「熱血漢/ランボー」作戦が失敗し、事故を生むのだ。軍隊とあなたとの関係を最適化し、よりよく理解することによって、そんな失敗を避けなさい。そうすることがあなた自身と彼らの双方を助けることになり、究

極的にはあなたが援助しようとしている人々をも助けることになるのだ。

特筆すべき例外

兵士たちについての以上の描写と、彼らが我々をどのように見ているかについての説明は正しいものだと私は考える。しかしながら、残念なことに常に例外はある。酩酊状態の兵士が銃を撃つことがある。特に問題となるのは、酒と麻薬が同時に使用される場合だ。あるいは、兵士があなたの機関や他の組織に個人的な怨恨を持っていることもある。あなたが敵を助けていると誤解している兵士、彼らの村に対するあなたの援助や医療活動が緩慢で十分ではないと思っている兵士、あなたが解雇したガードマンの兄弟の兵士など、様々な恨みがあり得る。周囲のすべての人を満足させるのは決して容易なことではない。個々の兵士のなかには、一体あなたが何者で何をしているのかを、全く理解していない者もいることを忘れるべきではない。彼らは数多くの NGO とそのロゴを見かけるので、よく混同してしまうのだ。だから、他の機関の過失や怠慢があなたに悪影響を及ぼすことさえある。

さらに、全く手に負えない人々もいる。例えば車両が不足しているところでは、彼らにとってあなたのオール Terrain (全地形万能) 車はとても魅力的に見える。乗員に必ず危害が及ぶとは限らないが、ハイジャックなどは明らかに起こりうる。このような強盗行為や「制御不能分子」は、とても危険な例外として確かに存在する。通常の分別によって避けられたり、軽減したり出来る危険もある。例えば、ある武装集団が特定の村や地域に出没するのであれば、そこを通過することを避ければよい。酩酊状態の兵士と長々と議論してはいけな。もしすれば大惨事になることはほぼ間違いない！ なぜなら、彼を苛立たせたり怒らせたりするような言葉を、早かれ遅かれあなたは不用意に発することになるからだ。彼はあなたと話がしたいのかもしれない。そんなときには愛想よく言葉をかけたり、タバコをあげたりして、すぐに運転を続ける（なるべく身をかがめながら！）のが賢明である。

民間警備会社

現代の紛争において民間警備会社はその重要性を増してきている。「戦争の民営化」という表現を最近よく聞く。これらの民間会社は実際の軍事行動、重要軍事施設等の警備、諜報活動、軍人や警察官の訓練、ロジスティック業務等の様々な任務を請け負う。

人道援助機関は、彼らの安全性をより高めるために、あるいは単に彼らの事業を継続してゆくために、民間警備会社に武装警備や「身辺警護」(close protection : CP) を委ねる傾向にある。

このようなサービスを利用すると、その機関のイメージがぼやけてしまう。戦闘員と民間人、特に人道援助機関の要員を識別しようとしている兵士を混乱に落とし入れてしまうことを理解しなくてはならない。加えて、武装警備員は通常は退役した軍人や警察官であるため、別の問題の原因となり、非常に面目ない事態を引き起こす可能性がある。彼らは人道援助機関の活動に必要である文化的感受性に欠け、民間人とともに働くことに慣れていない場合がある。だからあなたの雇用する「身辺警護」チームは信頼できる人々でなければならない。武装警備を伴った越境活動は、望んでもいない銃撃戦を引き起こすことがある。それはただ単にあなたの護衛が脅威であると相手側に誤認されたためかも知れず、あるいはひどい場合には（あなたが知らなかっただけで）彼らは本当に敵対する側に所属していたためかも知れない（これは特にソマリアであった問題である）。兵士がしばしば民間人の服装で白い四輪駆動車を運転することが、NGOと軍隊の役割の違いをさらにあいまいにしてしまい、人道援助機関で働く人々の安全を脅かすことになるのだ。

人道援助機関は、武装護衛や身辺警護の利用については慎重でなければならない。時には、彼らを利用することによって、脅威を軽減するどころか増大させてしまうこともある。中立と公平という、我々の意図するメッセージを彼らが混乱させてしまう可能性は十分にある。どのような指示をあなたが彼らに与えたとしても、武装護衛や身辺警護チームは、いつ銃撃を開始すべきかについては彼ら自身の考えを間違いなく持っている。それをあなたは忘れてはならない。これはあなたにとって問題となり得る。武装護衛の忠誠心（つまり、彼らが最終的に誰の命令に従うのかということ）について確かめておかなければならない。

もちろん現実的に考えることが必要だ。民間警備会社が必要となる状況も確かにある。しかしながら、もし、彼らの利用が慎重に計画され、しっかり管理されなければ、ことは間違った方向に行ってしまう。最も有能で、最も信頼できる警備会社の明確な選定手順を我々は持っていなければならない。我々は、彼らが地域社会の人々に受け入れられる存在であることを確認しなければならない。共同で働く手順も、彼らを配置する前に準備しておくべきである。彼らのチームとの合同訓練を計画するのも悪くない。そうすれば、あなたも彼らも、互いについて、そして一緒に仕事をしてゆく方法について、より良く理解することができるだろう。

軍隊による護衛

ある状況下では、人道援助機関は民間警備会社よりも軍隊による護衛に頼らざるを得ない場合がある。軍隊の護衛により援助を実施することが、人道援助機関にとっての直接の危険につながるケースもある。しかしながら、長期的に見ると軍隊との協力関係は、人道主義の中核である、中立、公

平、独立の原則を弱めてしまうという弊害をもたらすだろう。1990年代初期の旧ユーゴスラビア紛争の開始時には、人道援助機関はコンボイのために軍隊の護衛を受け入れることを全くためらわなかった。しかし、状況が変化し、国連が紛争当事者であると一部の人々から見なされるようになり、コンボイが攻撃の対象となったため、人道援助機関は考えを変えた。

組織の広報活動

これまで現代の紛争の無秩序な現状に焦点を合わせ、人間関係の面から安全確保について述べてきた。我々の安全への脅威を軽減するためには、戦闘員や地域住民を理解し、両者と関係を深める努力をしなければならぬ。

そのひとつの方法として、我々が何者で彼らのために何をしているのかを人々に積極的に宣伝、告知することは大変に重要である。信じられないかも知れないが、あなたの活動を理解している人は殆どいない。だからあなたの組織と活動について、機会がある度に説明することはあなたの義務である。チェックポイントで、村々で、お茶を飲みながら、あるいは公式な会議で、繰り返し説明をしていこう。そうすればあなたの活動についての理解が広がり、あなたの仕事はよりやりやすくなるだろう。

武器と車両

当然のことではあるが我々は武器を持たない。それは同時に、武装した兵士を我々の車両に同乗させては絶対にいけないことでもある。そんなことを許してはならない、と書くのは簡単だが、現場の緊迫した混乱状態のなかでこの原則を守るのはそれほど簡単なことではない。兵士は、彼の武器が戦場では信頼できる親友であり、一時たりとも手放してはいけないということを最初に教育される。あなたが兵士に、武器を携帯したまま我々の車両や建物に立ちすることは出来ないと告げる時、このことを常に思い出してもらいたい。兵士にとって我々のこの規則を受け入れることは非常に難しいことなのだ。しかしながら、この規則を可能な限り守ることは我々にとっては肝要なのである。

この規則を破ったならば、我々は誰とでも組む武器運搬人としか見られなくなってしまう、一瞬にして中立、公平の立場を失ってしまう。加えて、もっと差し迫った状況では危険ですらある。もしあなたが武装した兵士たちを車に乗せているときに交戦相手と遭遇したならば、銃撃戦が始まるだろう。そんな事態は賢明に避けよう。あなたが毅然とした態度で武器の携帯を断わり、そしてその理由をしっかりと説明すれば彼らも理解してくれるだろう。

ある時、我々がちょうどチェックポイントに差しかけたときに、激しい銃撃戦が始まった。目の前でひとりの兵士が撃たれてしまった。我々は人道援助機関だ、助けなくては！そこまでは良かった。仲間の兵士が負傷した

兵士を我々の車両に直ちに引っぱり込み、彼を病院に運ぶために我々が引き返すということに、特に話し合う必要もなく誰もが合意した。本当の問題はここからだった。数人の仲間が負傷兵を護衛し、応急処置を施すために一緒に来ることを希望したのだ。同乗してもらうのは問題なかったが、困ったの



は彼らが武器を携帯することを主張したことだ。武装解除の規則を長々と説明するにはとても理想的とは言えない状況だった。兵士たちは感情的になり、怒りで爆発しそうになった。が、信じがたいことに（思い出しても私自身いまだに信じられない気がするが）、彼らは要求に従ったのだった。負傷兵と武装解除した兵士一人を乗せて車は病院へと向かった。このように最も困難な状況下でもこの原則を守ることは可能なのだ。それは、我々の活動に対する理解と敬意の念のなせる業である。事前に活動と役割について広く告知していたことが、このケースでは役立ったのだろう。彼らは我々と活動の原則について知っていたのだ。

しかしながら、このような状況でもし銃を突きつけられたならば、従う以外の選択肢は率直に言って殆どない。従わなければ、少なくともあなたの車両は戦闘に必要だとして徴用されてしまうだろう。また、たとえ負傷兵と武装解除をした兵士だけを搬送するとしても、あなたの目的地までの道のりに交戦相手が本当にいないことを確認することも大切だ。それが確認できなければ、あなたは負傷兵の命を危険に晒すばかりでなく、あなた自身をも危険で困惑する状況に置くことになってしまう。

警告か妨害か？

時には、警告と妨害の違いを見分けることが非常に難しいことがある。もしあなたが軍隊から、ある特定の地域に行かないように、あるいはある任務

を終了させないように警告された場合、あなたは問題に直面することになる。その警告は、ただ単にあなたが敵側に物資を供給しないようにするためかも知れないし、あるいは本当にあなたの身の安全を考慮して言っているのかも知れない。いずれにせよあなたの活動に対する影響は同じである。活動を再開する前によく考えなさい。警告や助言を故意に無視することは賢明ではない。あなたが、自分がおかれている状況と関係当事者について熟知している場合以外は。もし彼らがあなたの活動を阻止する気なら、いずれにせよあなたは止められるであろうし、その場で止められなかったとしても必ずその先で止められることになり、危険度は増してゆくだろう。もしかするとその警告は間近に迫った軍事行動についての彼らの知識に基づいていて、あなたがそれに巻き込まれることを避けるためのものであるのかも知れないのだ。

結局、私からの助言はその警告や忠告を受け入れ、引き返し、翌日に再度状況を判断することだ。例えば、移動しようとしているルート上で戦闘があったか？ 脅威は本当であったか？ もし答えが「イエス」であれば、それはそれでよいことだ。だが、あなたの活動を妨害するための、意味のない警告であったならば、その組織の出来る限り上位の者に抗議を行いなさい。そして次回はあなたも簡単には思いとどまるべきではない。

民間人への態度

人間関係や広報活動について上に述べたことは、あなたの周辺の民間人との関係においても同様に重要である。近年は戦闘員と非戦闘員の区別が少々あいまいになってきている。あなたの目の前の駱駝使いの少年は完全武装しているかも知れないのだ。しかしながら、一般的にいえば民間人はあなたに対する敬意を持っている。あなたは彼らにとって生命線であり、彼らを援助するために自らを危険に晒しているのだから。彼らはそのことを十分に認識しているから、養ってくれる人の手を噛もうとは思っていない。とは言うものの、彼らは悲惨な状況で生活しており、彼らの生き延びようとするための行動があなたを危険に直面させることになるかもしれない。あなたの車両、所有物、倉庫などは価値のあるものだから、民間人たちがただ生き延びるためにそれらを標的にすることもありうる。あなたが何を代表し、何をすることが出来るのかということを、彼らが十分に知っているなどと期待しない方がよい。彼らの多くはあなたのことを医師であると考えているだけかもしれない。ここでも大切なのは、あなたの役割と職務を説明し、広く知らしめることだ。それはきっと役立つことだろう。

可能な限り現地の文化や伝統・習慣を取り入れる努力をなさい。異性との接し方についてのタブーには特に注意をしないと、深刻な問題に巻き込まれたり非常に困惑したりすることになりかねない。

好むと好まざるとに関わらず、あなたは魅力的な異性から注目されるかもしれない。それはあなたの魅力や顔立ちのためだろうか？ それともあなたが彼らの生命線であり、困難からの脱出を意味しているからだろうか？あるいは、もしかするとどこかのグループがあなたの活動について探るための手段であるのだろうか？ これらの可能性について自覚し、このようなごく個人的な事柄についても慎重に考えなさい。そうでないとあなた自身はもとより同僚までも危険な状況に陥れてしまうかもしれない。

あなたにできる限り、現地の人々をよく知るようにしなさい。彼らはかつて誇り高く自立していたが、おそらく今は落胆し、絶望的になっていることを思い起こして欲しい。決して彼らにあなたの文化（考え）を押し付けたり、見下したり、傲慢な態度を取ったりしてはいけない。礼儀正しくふるまいなさい。決して急いだりせず時間をかけて彼らに説明し、彼らの声を聞くべきだ。あなたが彼らにとって重要であるのは、あなたが代表している組織のためであって必ずしもあなたの個人的な資質のためではない。あなた個人の重要性を押し付けてはいけない。その行為は人々を不快にさせ、彼らにさらなる屈辱を与えることになる。

普段着を着なさい。着飾ってはいけない。もちろんだらしのない格好をしろということではない。だが、ひどく貧しい人にとっては、ヴェルサーチのサングラスにエルメスのスカーフ、カシミアのセーターで身を固めた人と付き合うのは耐え難いところもあるのだ！ そんな服装をしていたら彼らに親しみを感じてもらうことは望めない（泥棒の格好の標的にはなるだろうが）。プラスチック製の時計、地味なセーターやシャツ、スラックスそして頑丈な靴、必要なものはそれだけだ。それ以外のものは、あなたが戻るところに（それがジュネーブでもロンドンでも他の都市でも）置いて行きなさい。そんな都市でこそ価値のあるものだから。



あなたと彼らとの距離を必要以上に広げないように努力しなさい。覚えておいて欲しいのは、あなたは発電機を持っているが彼らは蠟燭すら持っていないことだ。もちろんラジオを聴いたり、必要最低限の快適さを確保することはあなたの精神衛生上必要であり、そのために発電機が必要なのだ。そのことには何の問題もない。しかし、だからといって町中が暗闇に包まれているときに、発電機を一晩中動かし続ける必要があるだろうか？ もちろん時おりパーティを開くのはかまわない。でもステレオの音量は控えめにしよう。町中に聞かせる必要はないのだから。アルコール類、煙草、チョコレートなどの嗜好品についても目立たないように気をつけよう。必要以上に見せびらかすようなことは慎むべきである。だからといって仙人のように生活しろとも、あなたの支援を受ける人と同じように苦勞しろとも言っているわけではない。そんなことをしたら全く逆効果になる。あなたが活動を続けてゆくためには、生活にある程度の快適さと寛ぎが必要だ。が、それは適度に保ち、目立ちすぎたり見せびらかしたりしないように心がけたい。もしそんなことをしたら、あなたは悪い意味で注目されることになる。あなたに対する敬意の気持ちは薄れてゆき、節操のない一部の住民は遅かれ早かれ、あなたの魅力的な所持品をより公平に分配してしまうに違いない！

チェックポイント / 道路封鎖

チェックポイントと道路封鎖は同じことで、特定の地域の車両等の動きを監視し、取り締まるために作られた有人の守備地点である。時には、通行する民間人から金を脅し取るために地元のギャングが設置した、料金徴収所に類似したものもある。あなたが新しい地域に入るときには、確実にチェックポイントで止められることになるだろう。あなたがその地域で活動を推し進め、道路封鎖をしているグループから信頼されるようになれば、彼らはあなたの車両をチェックなしに通過させてくれるかもしれない。だからといって、それを当てにしてはいけな。いかなる時でも停止を指示されたならば、そうできるように心構えをしておきなさい。

チェックポイントの中には、土囊で囲まれた塹壕、テントや休息所、道路を横切っている可倒式の目立つ防護柵などを備えた立派なものがあり、長期間の使用を意図している。このようなチェックポイントは、防御性を高めるために道路上に地雷を設置していることもある。一方、ただ単に木や枝を道路に置いただけの簡易なものもあり、そこでは一人か二人の男が通行料と称して小銭を稼ぐ商売に精を出しているかもしれない。

では、我々はチェックポイントや道路封鎖にどのように対応したらよいのだろうか？

チェックポイントに接近したら、速度を下げ、無線機の音量を落とし、交信を停止しなさい。無線交信は彼らに疑念を抱かせることになりかねない、ほんの数分無線交信を止めたとしても困りはしない。テープデッキなどのスイッチも切ろう。

車両を道路脇に寄せる、停止する、などの合図や指示に従う。

礼儀正しく友好的かつ自信を持って対応しなさい。窓を開け、現地の言葉で挨拶しなさい。大げさにふるまったり、あたふたしたり、やたら喋りまわったり、煙草をあげたりしてはいけない。そんな態度を取ると怖がっていると思われ、兵士につけ込まれてしまう。



要請があれば身分証明書を提示しなさい。どこに行くのだと聞かれたら、親しみのある態度で説明しなさい。あなたの所属する機関の活動の概略を説明できるように準備しておきなさい。もしあなたがその地域に初めて入るのならば、あなたの活動について宣伝するとよい。ただし簡潔に！もし彼らが車両を調べたいと言いはっても緊張しないことだ。彼らには調べる権利があり、あなたはなにも隠していないのだから。

先を急ごうと慌ててはいけない。兵士とおしゃべりする余裕を持とう。この先の道路事情や目的地について知っていることを尋ねることもお勧めだ。

もしあなたが兵士の立場だったらと想像してみよう。多分彼はとても退屈なのだ。もしかするとあなたは、その日に彼が遭遇した数少ない通行人のひとりであるかもしれない。あなたは紛れもなく彼にとって非常に興味ある存在である。彼はあなたのような人物と初めて出会ったのかもしれない！ ルックスや魅力のことを言っているのではなく、あなたが外国の、違う文化圏

から来た人物であるということだ。

彼は片言の外国語で話したいのかもしれない。もしあなたが英国人だったら、例えば、マンチェスターユナイテッドの調子はどうとか聞いてくるかもしれない。このフットボールチームのことを知っている人は驚くほど多い（バルセロナやユベントスのファンには申し訳ないが）。だからしばしの間彼とおしゃべりをするつもりでいなさい。きっと良い結果を生むだろう。

ダッシュボードの上に菓子やチューインガム、煙草などの魅力的なものは何も置かないようにしなさい。もし目立つところにあれば、兵士がひとつくれないかと言ってくるのはよくあることだ。すぐにどこからともなく兵士たちが現れ、煙草はどんどん減ってゆき、あなたはその日一日中禁煙する長所を直視することになるだろう！ あなたの衣類や、あなたが輸送している他の物資も彼らを誘惑することがある。そんな時はきっぱりと要求を断らなければいけない。この物資は私個人のものである、あるいは被災者や犠牲者のものであることを説明しなさい。高価な時計を身につけることは避け、サングラスは外しなさい。レイバンはとても人気のある貴重品なのだから。

込み入った話については現地スタッフやドライバーに協力を仰ぎなさい。

夜間はチェックポイントのかなり手前でヘッドライトを下に向けて減光しなさい。兵士にとってヘッドライトの光で視界を奪われ、夜目が利かなくなることほど嫌なことはない。チェックポイントではさらにサイドライトに切り替えなさい。室内灯を点灯して誰が車に乗っているか見えるようにし、あなたが脅威の対象ではないことが兵士に簡単にわかるようにしなさい。車両の上部や後部に、あなたの所属している機関の旗やロゴを照らすライトが装備されているなら、そのスイッチを入れることを忘れないように。しかし、夜間の移動や運転を常に避けることは、指針というよりも明確なルールではある。

軍人ではなさそうな何者かによって設置された、いかにも新しい間に合わせの道路封鎖では、もし可能であればそのかなり前で車両を止め、一体何が起きているのか少しの間様子を見ることを勧める。他の車両はこの道路封鎖を通過しているか？ 通過した車両に乗っている人たちはどんな扱いを受けているのか？ 近づいてくる対向車（道路封鎖を既に通過して来た車両）を待って、前進しても安全なのかどうか、乗っている人から助言を得よう。常に現地スタッフやドライバーの意見も聞きなさい。以上のことをすれば、ここから先に進んでも安全か否かの、より良い判断が出来るだろう。もし安全ではないと判断したなら、少なくとも危害を未然に避けて引き返すことができる。我々はこの方法を、間に合わせの道路封鎖が多くあったソマリ

アで使った。通常2～3人の武装した男たちによるこれらの道路封鎖の目的は、単に、通行する人から略奪することだった。

計画の立案、事前説明、任務報告

次に、我々の仕事にとって重要な道具なのだが、しばしば間違っ使用されたりあるいは全く使われていないものがある。それは「計画の立案」であり、それがどのようにあなたにとって役に立つのかを考えてみよう。

フィールドトリップのための計画を立てる時間は必ずある。計画の立案は各人が責任を持って行うものだ。さらにそれは専門家としての姿勢の表れであり、常識でもある。もしあなたが、正しく計画を立案するための時間と少しの努力を惜しんだなら、あなたはどのようにしてあなたのチームを安全かつ適切に率いることができるだろうか？ オフィスの他のスタッフは、あなたの意図を理解できるだろうか？ あなたのアイデアをチーム全体のプランに組み入れることが出来るだろうか？ 事前の計画なしには、全て不可能だ。もしあなたが注意深く、入念に計画を作らなかったらば、あなたのオフィスはすぐに蜂の巣のようになってしまう。朝になると、誰もがつつかれた巣の中の蜂のように騒ぎまわるのだ。

きっとあなたはこんな光景を目の当たりにしたことがあるだろう。全員が非常に大切な用件を抱えているように見え、全員が早く出発するために大慌てしている。「邪魔しないでくれ！ 8時までに出かけなきゃならないんだ！ 今夜また会おう。それじゃ！」でも実際には、この日何が起こるか、それにどのように対処すべきか、誰もその手がかりさえつかめていない。現地の職員やドライバーはこの興奮状態を、一体今日はどこに連れて行かれるのだろうと怪しみながら、やれやれという思いで見物している。

私はこの「人道主義者の現象」を何度も目撃している。時には複数のグループが全く同時に同じ場所に到着したことさえある。なんと無駄な努力だろう！ こんなことにならないために、この「蜂の巣騒ぎ」症候群を避ける方法を考えてみよう。



任務について計画を立てる理由はいくつもある。

- ・あなたがその状況のすべての局面を熟考したかを自分の目でしっかりチェックするため
- ・任務を確かに成功させるため
- ・あなたのチームメンバーにあなたの意図を十分に知らせるための手段として
- ・チームの安全を確保するため
- ・他の要員の事業との連携や調整を改善する手段として
- ・あなたの計画が他のオフィスに影響を及ぼす場合、事前に連絡し、その地域の住民に周知させる時間を与えるため

計画の立案

計画立案にはいくつかの共通した重要なポイントがある。あなたのスタイルや必要に応じて改良したり発展させたりしてゆけばよい。以下に述べる事柄を常に考慮することをお勧めする。

目的 目的を定めることが最も重要な出発点である。目的を可能な限り詳細に定義しなさい。だが、二つの別個の目的や、一連の副次的な目的を選んだりしてはいけない。それは危険であり、計画そのものを弱体化させたり混乱させたりし、それゆえにあなたの任務の失敗につながる。我々の誰もが人生のどこかにおいてそのような失敗をしたことがたぶんあるだろう。「柔軟に対応するため」とか、「現在のニーズに対応するためだった」とか、我々はよく言い訳するが、本当のところは最初の段階できっちりと計画していなかっただけのことである。もし、しっかり計画していれば、的確に問題を評価して対応策を組み込んだり、あるいは確実に問題を回避することができたりしたはずだ。だから、目的を明確に定め、それを堅持しなさい。

伴う危険（脅威） 予想される危険を、あなたの計画の第二の要素とすることを強く勧める。危険について慎重に考慮すれば、任務を実行するのは明らかに危険すぎると早い段階で判断することになるかもしれない。

時間と距離 次に、あなたの任務を成し遂げるためにはどのくらいの時間が必要かを概算しよう。あなたのやりたい事を全て遂行できるだけの時間が実際にあるだろうか？ もし十分な時間がないのであれば、計画を縮小しなさい。そうすれば、不必要な通達をして他の人々の時間を無駄に使ったり、後になって面目ない思いをしたりすることを避けることができる（以下のような質問を自分自身にしなさい。いつ出発すればよいのか？ いつ戻って来るのか？ 日没前に帰って来れるのか？ それともどこか安全な場所に宿泊する手配をしておくべきか？）。必要であれば、冬季の状況（日照時間の短さや

移動の困難さ)を考慮に入れて時間を見積もることも、忘れないようにしましょう。

指示とロジスティック チームに何人が必要かを決め、彼らに事前に知らせておきなさい。

予備の燃料、食料、水を用意しなさい。もし長い一日になるようなら十分な備品を携帯するべきだ。

任務遂行に必要な物品（配布用冊子、書簡、書類、医療機材など）を準備しなさい。

どのような車両が必要かを確認しなさい。

連携 ここでは、あなたの任務に直接関わる事柄に専念しよう。

誰にいつ知らせるべきかを知っておきなさい。全ての関係者に周知徹底されるのにどのくらいの時間が必要かを算定しなさい。

同僚はあなたの任務について知っているだろうか？ 任務の実行中に、何か同僚にとって大切なことを達成することができるかもしれない。だからといって、そのために二重の目的を持つことになってしまっはいけないが。

オフィスの代表者は任務の詳細を全て知らされているだろうか？ 代表者から任務遂行の許可は出されたか？

他のオフィスは、あなたの計画が彼らに影響する側面についてはよく知っているだろうか？（例えば、任務が他のオフィスの管轄地域にまたがる場合）

通信 あなたの同僚で以前同じ地域で活動した者がいるか？ もしいるなら、無線通信装置の最適な使用場所はどこか聞いてみよう。通信を確実にするため、多少迂回することになってても少々高い位置にあるX地点を通過するほうが良いのでは？ 全ての無線装置が作動するかをチェックしたか？ 緊急時の通信手段はどうするのか？

事前説明（ブリーフィング）

あなたはすでに計画を立案し、その中で全ての要素を熟考したので、成功する自信もある。次の重要なステップはあなたのチームに十分に説明することだ。そのための時間を確保しなければならない。理想的には行動を起こす一日前が望ましい。そうすることによって、ドライバーも、フィールド・オ

フィサーも、他の同僚も準備する時間を持てるからだ。彼らはこの事前の予告を感謝するだろう。さらにそれは、彼らに任務成功への自信を与えるだけでなく、あなた自身への彼らの信頼感をも深めることになる。

事前説明は長く行う必要はない。10分もあれば十分だろう。この機会を利用して、車両や無線、燃料、救急キットなどの点検・確認の任務を各要員に委任することもできる。

任務報告（ディブリーフィング）

計画立案のもうひとつの重要な側面が残されている。それは任務報告である。任務が終了したときに、グループ（チーム）全員でミーティングを行うことは常に有益である。その目的は明確で、今後の活動に役立つアイデアを出し合い、うまくいった点については「よくやった！」と評価し、問題点については二度と同じ間違いをしないように指摘することである（任務報告はあなたの派遣報告書の作成にも役立つ）。

事前説明と同様に任務報告も10分もあれば十分だ。もし誰もが疲れているならば任務報告は次の日の朝一番にすることもできる。

7つのP 計画の立案があなたの仕事には必須の要素であること、そしてそれは魔法でも難しい科学でもなく、非常に簡単かつ論理的な道具であることを理解してもらえたと思う。その目的はあなたの重要な任務を手助けすることである。この有効な道具の使い方を学びなさい。数週間のうちにあなたはこの道具をごくあたり前のように使えるようになるだろう。

もし、あなたがやる気をなくしていたり、あの恐ろしい「蜂の巣騒ぎ」症候群に落ちこみそうであったりするなら、そこから抜け出すために一息ついて立ち止まり、以下の「7P」を復唱しよう。

事前の (Prior)

準備と (Preparation &)

計画が (Planning)

情けないほど (Pathetically ここはあなたの好きな単語に置き換えてもよい)

ひどい (Poor)

活動を (Performance)

未然に防止する (Prevent)



保安に関わる事件の報告と統計

我々人道援助機関は、保安に関わる事件について報告することに慣れていず、関連情報の収集や他者との情報の共有についてはさらに苦手である。関連情報を収集するための我々の努力は、多くの場合一貫性がなく、組織的な連携もない。しばしば我々は保安に関わる事件の明確な定義を持っていないし、どのように分類したらよいかもわかっていない。また、誰が人道援助機関で働く人間かそうではないかについても、正確な定義づけがない。しばしば保安に関わる事件と安全に関わる出来事とを混同してしまい（後者は車両事故、健康や衛生に関わる災難等を指す）、さらに混乱してしまうことも多い。その結果、生命を救えたかもしれない貴重な教訓が失われてしまうことになる。適切な報告とスムーズな情報交換なしには、その国における脅威の明確な全体像を確立することは難しい。不適切な事件報告のために、我々は暗闇のなかで活動することを強いられ、不必要な危険を冒すことになるのだ。

注意しなければならない問題

統計を集めて、新たな動向を明らかにしていくためには、まず、保安に関わる事件を可能な限り明確に定義する必要がある。例えば、ニアミスも、実際に負傷者や死者を出した事件と同様に、重要である。事件を起こした者の意図は同じであるからだ。しかしながら、ニアミスを実際に分析している機関はほとんどない。実のところ、事件を回避できた幸運な人々は、面目をなくすことを恐れたり、報告書を書くという余計な仕事が増えることを嫌ったりして、報告すらしないことが大変に多い。「報告は面倒だし、我々の身に何も起こらなかつたんだから、もう忘れよう」

偶発的に銃撃戦に巻き込まれたり、砲弾が NGO の事務所近くに落ちたりすること、武装集団の直接の標的になったり、待ち伏せ攻撃に会ったりすることは全く別のことなのだ。前者はおそらく単に不運な出来事なのだが、後者は完全に意図的な行為であるだろう。計画的な攻撃に晒されるということは明らかに非常に深刻なことであり、その機関をその国から速やかに撤退させることになる場合もある。これらの事件の状況を知ることにより、他の機関も恩恵を受けることができる。次のような質問をするべきだ。「それは入念に計画されたものだったのか？ 我々が標的だったのか、それともただ単に不適切な場所に不適切な時間に居合わせただけなのか？」これらの質問への答えが大きな違いをもたらす。適切な報告がなければ、遭遇するかもしれない脅威についてのこのような貴重な情報が相も変わらず失われてしまうことになる。

事件報告書を同僚と共有しなければならないのは明らかだ。同様に、同じ国で活動している他の機関との間でも共有されるべきなのだが、殆どされていないのが現実だ。その言い訳は、仕事の多忙さ、保安分析に関する専門知識の欠如、組織が面目を失う恐れ、守秘義務を守ろうとする意志、諜報活動をしていると見られることへの心配など実に様々である。人道援助機関の要員であるはずなのに、同僚の安全に対するこの関心の欠如は理解し難い。紛争地域で安全に関わる情報を共有することは、当たり前なことであるはずだが・・・もし動機が功利的（「私が君を助けたら、後で君は私を助けてくれるだろう」という理由）なものであったとしても、このような情報の共有は当然であったはずだ。それなのに、実際にはほとんど共有されていない。脅威や危険に関する貴重な情報がこのようにして失われ、同じ過ちが何度も繰り返されることになる。

事件を分析することは重要である。事件毎に専門家に分析させることで、その国での事件の回数を単に合計することよりも、脅威や危険に対する理解を深めることができるだろう。明らかな脅威の兆候を無視することは素人の

することであり、いかなる機関においても許容されるべきものではない。保安に関わる事件についての情報を共有することに人道援助機関のコミュニティは真剣に取り組むべきである。

事件報告

あなたの活動地域でも事件は発生し、あなたがそれに直接巻き込まれることもある。この章ではどのように対処したらよいかについての指針を示す。多くの機関が事件報告に関する独自の詳細なフォーマットを持っており、あなたの所属する機関も同様であればそれを活用すべきだ。もしそうでなければこの項目が参考になるだろう。

事件報告は二段階に分けられる。最初のもは事件直後の対応、次は続報である。これらの報告の目的はその情報を必要としている者、または援助できるかもしれない者に必要な情報をすばやく効率的に伝えることである。

ここでも大切なのはひとりひとりの責任感である。というのは、緊迫した状況下では重要な詳細情報を簡単に忘れてしまうからである。簡単なフォーマットがあれば、そんな厳しい状況下でも必須の情報を報告することができる。この様なフォーマットを使うと、最も重要な側面に自動的に焦点を合わせることができ、さらにこの時点では追加調査や関連質問をする必要もないので貴重な時間を節約することができる。それは人命を助けることにもつながる。では、2種類の報告のフォーマットを見てみよう。

(事件) 直後の報告

事件に遭遇したならば、無線交信のできる代表部と同僚に直ちに報告をするべきである。

必須事項だけを伝えなさい。

- ・誰が関係しているのか？
- ・いつ事件が起こったのか？
- ・どこで発生したのか？
- ・何が起こったのか（事件の種類、負傷者の有無など）？
- ・今後の行動。あなたはこれから何をするつもりなのか、あなたは救助を必要としているのか？

このように、非常に短く明確なフォーマットによって、あなたの持っている事件直後の情報を伝えることができる。他の要員も対応することができるようになり、あなたはただらと続く無線交信に時間を浪費することなく問題の解決に専念できる。

続報（追加報告）

事件について後日、さらに詳細な報告書の提出を求められることがある。これといった定型のフォーマットがなければ、以下を参考にすればよい。ここでも目的は主要な事柄に焦点を合わせ、正確な情報をそれを必要とする者に与え、そしてあなた自身が追加説明に時間を浪費するのを避けることだ。

フォーマットの一例

- ・日時（事件発生の）
- ・場所
- ・任務内容（救援、医療など）
- ・事件に巻き込まれた要員（現地職員を含む全員の氏名と役職）
- ・巻き込まれたその他の人員（軍隊、国連、他の武装勢力など）
- ・あなたのチームが受けた負傷
- ・車両の損傷
- ・その他の機材の損傷や損失
- ・事件の描写（事件の概略、略図や図解）
- ・事件後の対応や現在進行中の対応
- ・事件から学んだことや提言
- ・代表部・オフィス代表のコメント

最後の2項目が事件報告書に記載されることは殆どない。これは残念なことだ。なぜなら、その結果貴重な教訓を組織内で、或いは他の組織と共有する機会が失われてしまうからである。

既に指摘したように、本部が事件から引き出した教訓に現地の代表部やオフィス代表のコメントを組み合わせた報告は、他の者（組織）にとって本当に役立つものとなる。我々にとって重要なことは、重大な事件の調査結果を知り、同じ失敗を繰り返さないために活用することである。しかしながら、残念なことにこれらの調査とその結果はしばしば秘密のバールに覆われたままである。

第7章

あなたの安全確保のための受動的防護策

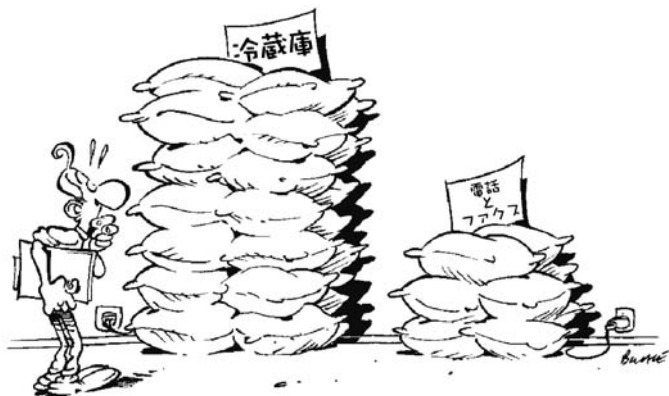
さて今度はあなたの安全をより確かなものにするための受動的防護策について考えてみよう。これは予防策と呼ぶこともできる。

建物とその居住者を守るためのシェルターと防護壁、使用する建物の選定基準、それから一般的に使用される防護用品（ヘルメット、防護ジャケットなど）について学ぼう。また、この章の最後では車両と運転についての実践的なヒントや個人装備品についての注意を述べたい。

あなたとあなたの建物を守るには

この項目では、大砲、迫撃砲、狙撃や様々な爆発物による攻撃からオフィスと宿舎を防護するための簡単な方法を提案しよう。

この章では実用的な提言を心がけたい。国によってはシェルターの構築に必要な材料の入手が大変に困難であるかもしれない。だから例えば砂袋や砂そのものの替わりになるものについても提案しよう。工夫と分別があれば「正しい」材料が手に入らなくとも防護性を高めることが出来る。



我々に作ることで出来るシェルターが大砲などの重火器の直撃弾に耐えられるという保証はない。近年の紛争では、特別に強固に作られたシェルターでさえ精密兵器の前には無力であったことが証明された。とは言うものの、ライフルや手榴弾などの小火器や直撃ではない爆発や爆風に対しては十分な防護的效果がある。

材料と工具

以下に述べる道具と材料は即座に必要なものではないかもしれない。しかしながら、状況が急激に悪化し供給がストップしてしまう場合を考慮して、受動的防護の必需品については前もって配備しておくことが賢明であろう。

砂袋 最も必要なものは砂袋だ。様々な大きさや素材のものがあるが、私自身はジュート（黄麻）を使った昔ながらのものが今日でも一番優れていると考える。我々の用途に最適であるように作られているからだ。通常は防腐加工されているので、バクテリア、かびなどに対する耐久性があり、極端な気候の下でも長持ちする。大きさは小さいほうがより良く、長さ 60cm 幅 30cm が理想だ。大きな砂袋を使うほうが仕事がかどると思われがちだが、大きな砂袋を正しく積み上げることは難しく、以下に指摘するように十分に強固な防護壁やシェルターを構築することは容易ではない。もしジュート袋が手に入らないときはビニール袋やポリエチレン袋などで代用できる。これらは使用可能だが、日光に晒されると劣化しやすく、また裂けやすいのでジュートほどは適していない。

木材 厚い板材や小さな木の幹などはシェルターを作るときに非常に役に立つ。まず、屋根を補強することができる。窓を覆うように固定すれば、（見かけはともかくとして）爆風の衝撃に対する効果的な防護壁となり、狙撃者が狙いを定めるのを邪魔することもできる。

シャベル あなたのチームが作業をするには 2～3 個の頑丈なシャベルが必要だ。

ロープ 旧ユーゴスラビアでロープなしに数多くのシェルターを造らなければならなかった経験から、私はこの一見ささいな物の重要性を痛感している。ロープは砂袋の「口」を閉じるために必要なのだ。ロープなしで砂袋を作ることがどれほど難しいかあなたも簡単に想像できるだろう。砂袋用に特に作られた袋には必要なロープが備え付けられているものもある。

砂袋の代用品 砂袋は常に入手できるものではないし、発注できるとしても入手するまでの間の一時的な解決策が必要となる。それにはあなたの決断力と創意工夫が要求される。

箱、籠、袋やドラム缶などの容器に土や瓦礫を詰め、砂袋の代わりに衝撃吸収物として使用することができる。

土のついた芝生面や草原から持って来た芝地なども砂袋と同様に使うこと

が可能だ。芝目と芝目、土面と土面を合わせて積み上げてゆき、最上段は芝目を上向きにする。切り出した木材の杭を一定間隔で芝目に垂直に打ち込むことにより芝目を固定し、壁を強化することができる。

これらの簡単な材料があれば、他に必要なものは壁ができるまで一生懸命にがんばる作業チームだけである。

砂袋の詰め方 奇妙に聞こえるかもしれないが、砂袋に砂を詰めるという新しい体験は結構楽しめる。少なくとも最初のうちは！あなたがすべきことは現地の作業員が（彼らがいなかった場合にはあなたの同僚が）効果的に作業できるシステムを構築することだ。

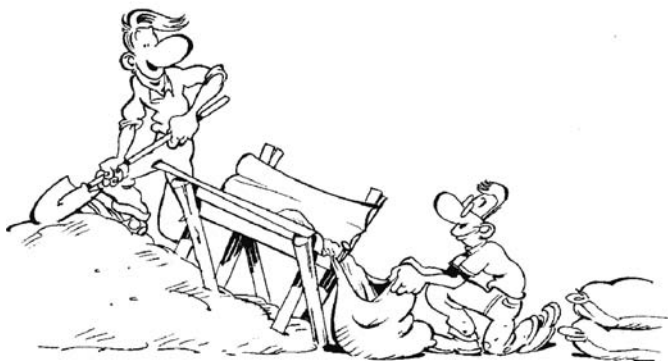
私の提案は

- ・ 1人が実際に砂を詰める
- ・ 2人が砂袋を持ち、詰め終わったら袋の口を縛る
- ・ 2人が砂袋を積み上げる
- ・ 必要ならば別のチームが砂袋を運ぶ（砂袋を詰める場所と、積み上げる場所との距離による）

5人のチームと運搬役が上の方法で作業をすると、1時間に60個の砂袋を積み上げることができ、それは結果として2㎡の砂袋の防護壁となる。

簡単な仕掛けが役に立つ。傾斜したトタン板の下部にくぎを打ち付け、そこに砂袋を引っ掛けて砂を袋に流し込むようにすればよい。

この方法だと2人で1時間に約60個の砂袋を楽に詰めることができる。



砂袋の積み上げ方の基本

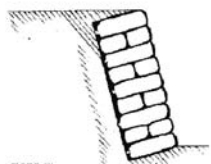
簡単な防護壁を作るにせよ、シェルター全体を造るにせよ、そこにはいくつかの守るべき基本的なルールがある。

これらのルールに従うことによって構築物は強固になり、あなたを確実に守ってくれるものになる。手抜きをしたルールを無視したりする誘惑に負けてしまうと、結局は時間を浪費し生命を危険に晒すことになる。

基本的ルールとは

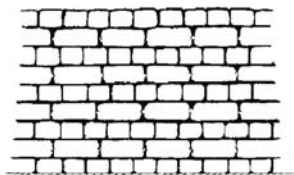
- 砂袋に砂を詰めすぎない。袋の3/4ほど詰め、口を縛る
- 煉瓦職人が煉瓦を積み上げるように、砂袋を水平に積み上げてゆく（少しずらせて積み上げ、上の砂袋と下の砂袋を部分的にだけ重ねることにより壁の強度が増す）最初の層は「小口（headers）」と呼ばれる、砂袋の短い辺を外側（壁面）にし、二層目は「長手（stretchers）」と呼ばれる、砂袋の長い辺を外側にする。このように「小口」と「長手」を交互に積み上げてゆく
- 層ごとに砂袋の目地（継ぎ目）を少しずらす。そうすることにより防護壁は「正しく組み積みされた」ことになる
- 砂袋から砂がこぼれ出ることを防ぐために、結び目や縫い目は防護壁の内側に来るように積み上げる
- 積み上げる際に縛った口を内側に押し込んでおく
- 最も重要なことは、砂袋を積む時に堅く締まった状態に必ずすることである。砂袋をシャベルや板で叩き、成型することによって隙間なく積むことができる
- 防護壁あるいはシェルターのどちらを作るにしても、砂袋を作る過程でセメントを混ぜると長持ちする。土10に対しセメント1の割合で混ぜるか、砂と砂利6に対しセメント1の割合で混ぜる。袋が水分を吸収するにつれて中身が固まる。セメントを溶いた水に詰めた砂袋を浸す方法もある

防護壁とシェルター構築のための砂袋の積み方



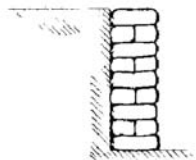
YES

砂袋が斜面に対し直角に積まれている



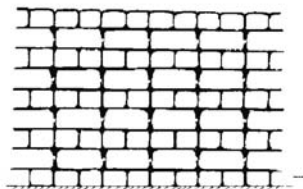
YES

目地が互い違いになっていて、結び目と縫い目が外側に出していない



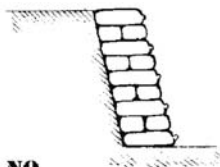
NO

壁面が垂直になっている



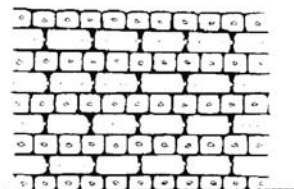
NO

目地が揃っている



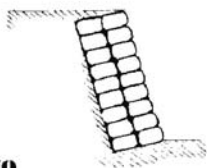
NO

砂袋が斜面に対して直角に積まれていない



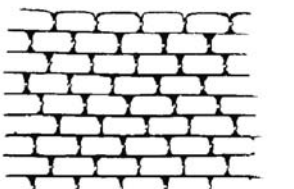
NO

結び目と縫い目が外側に出ている



NO

小口ばかり、あるいは長手ばかりで積まれている



NO

コーナー（角） コーナーの作り方（必要であれば防護壁にもコーナーを作るが、シェルターには必ずコーナー処理が必要）はとりわけ重要だ。コーナーが適切に作られていないと、シェルター全体が弱くなってしまう。処理の仕方（作り方）は略図に示すとおりいたって簡単である。

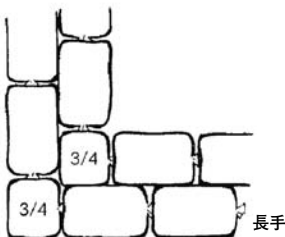
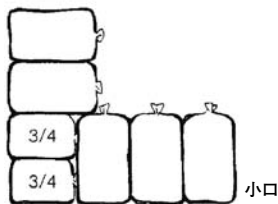
防護壁やシェルターのコーナーの作り方

1, 3, 5などの奇数層

2, 4, 6などの偶数層

小口

長手



砂袋のサイズ：

通常の砂袋＝0.6X0.3X0.1 m

コーナー用 3/4 サイズの砂袋＝0.4X0.3X0.1 m

防護壁、シェルター、その他の障壁物

あなた自身を守るために防護壁やシェルターを作ったり、その他の手段を講じたりすることは一見必要ではなく、時間を浪費し、さらにあなたの所属する組織の理想や精神に合っていないように思えるかもしれない。しかしながら、我々が生活し活動する世界の一部では残念なことにこのような防護手段が必要とされているのだ。すでに説明したように都市や町に対する大砲や迫撃砲による攻撃は無差別に行われることもある。たとえあなたが実際の標的ではなかったとしてもその脅威は常に存在している。もしそのような地域に住み、活動するならば自分自身とスタッフを最善の方法で守ることはあなたに課せられた義務である。どのようにしたら良いのか、いくつかの指針を示そう。

防護壁

大砲や迫撃砲さらに狙撃による脅威が存在する地域では防護壁が必要である。正しく作られた防護壁は砲撃からあなたを守ってくれ、狙撃兵の弾丸をも防いでくれる。

防護壁が必要とされる場所の例

- ・代表部建物の入り口の内側あるいは外側
- ・シェルターまでの避難路（いくら素晴らしいシェルターがあっても避難路が無防備であれば全く意味がない）
- ・窓（通常、この種の防護壁は、厚い木の板などで砂袋をしっかりと固定してさらに強化する必要がある）
- ・シェルターの入り口
- ・燃料置き場、発電機、無線室、重要で壊れやすい医薬品の貯蔵庫などの施設
- ・外で働く警備員の周辺
- ・倉庫と病棟（倉庫の内部や病棟の中に砂袋で防護された一区画を作ることにより、爆発による影響を特定の場所に限定し他の場所の被害を軽減することができる）

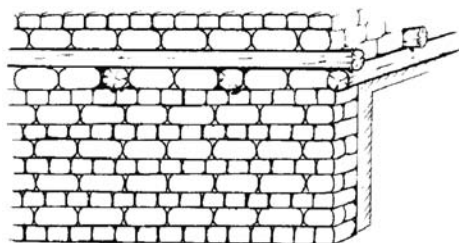
構築 防護壁はイラストで説明したように作ればよい。高さについては身長はやや上まで作ることを勧める。その高さがあればオフィス内で立っていると座って仕事をしていようと、予期せぬ爆発から身を守ることができる。窓を覆うときにも同じことが言える。シェルターへの避難路を確保する防護壁を作る時にはもっと低くして、構築時間を短縮することもできる。シェルターには身をかがめながらもたとえ腹ばいになっても、逃げ込むことができるのだから。

シェルター

もし、安全が脅かされるような地域にオフィスを開設する、あるいは要員の宿舎を探すのであれば、私からのアドバイスは地下室か車庫などの地下施設を備えている建物を見つけることだ。地下室や地下施設は最も優れたシェルターになる。仕事場からも寝室からも出入りは簡単だ。安全性を向上させるために地下施設の窓に防護壁を設けたり、そこに安全にたどり着くための低い壁を設置したりする必要はあるかも知れないが、もし、そのような施設がない建物ならばシェルターを造る他に方法はない。

地下室やその他の部屋の屋根や天井を補強する必要があるかもしれない。その場合には、下図のように頑丈な木の梁や丸太を利用すればよい。さらに、剥き出しになっている壁は砂袋で保護しなければならない。

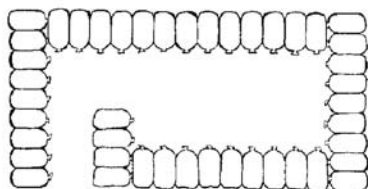
砂袋によるシェルターと防護壁の作り方



屋根の上に二層の砂袋を積む

木製の厚板を屋根に渡し、砂袋を支える

防護壁の最上層の隙間に丸太を渡し、屋根の支えとする



角角のある防護壁

砂袋によるシェルター シェルターを造るときにはどこに設置したらよいかを慎重に考えないと時間と努力が無駄になってしまう。自分でよく考え、もし部分的なシェルターが既にあるのならそれを強化すればよい。作る前によく考えなければならない他の重要なポイントをいくつか挙げておく。

シェルターは直ちに逃げ込めるところになければならない。もし夜中に100 mも走らなければならぬところにあつたとしたら全く無意味だ。

もし場所に余裕があれば建物・家屋の中にシェルターを作りなさい。余裕がなければ外につながるドアのすぐ近くに作ろう。

1箇所の出入り口がふさがれた場合に備えて常に2箇所の出入り口を作るようにしなさい。

大規模なものを作ろうという誘惑は断ち切ろう。シェルターに関して言えば「小さいことが素晴らしい」。大きなシェルターを作るのは時間の無駄だ。おまけに大きくなればなるほどもろくなる。何人がシェルターを必要とするのかを考え、その人数がぎりぎり入れるほどの大きさを基本とし、それに多少の余裕を持たせよう。或いは、小さなシェルターを人数分だけ作ってもよい。

シェルターの建設にローカルスタッフを活用するのなら、はじめに彼らに注意深く説明を下さい。そうしておかないと、あとで現場に戻った時に予期せぬ事態に遭遇するだろう！ あなたの意図する大きさを地面に描いたり、略図などを使ったりしてじっくりと説明しよう。

構築 前の2つの略図はシェルターの最も重要な細部を示している。もし可能ならばもちろん壁に接して構築しよう。その方が時間の節約になる。もしその壁の強度が不十分と考えるなら、砂袋の層で補強下さい。シェルター構築に関する重要なポイントは以下のとおりだ。

大きすぎないように、高すぎないように、心がける。

木材を上に乗せて屋根を補強する。金属製の板や棒も同じ効果をもたらす。

屋根には2層の砂袋を載せるとよい。

角のある防護壁を設置して出入り口を確実に保護する。

シェルター内に装備すべき物 適切なシェルターを建築または確保したら、次に述べるような物品を中に収納するかあるいは作りつけるとよい。

大きなオフィス用のシェルターには

- ・無線機を使い続けるためのシェルター内まで引いた同軸ケーブル
- ・シェルター内に保管した予備のアンテナ（主アンテナが破壊されることもあるので）
- ・非常電源（主発電機とケーブルで接続しておくか、小容量の予備発電機をシェルター内に設置する）
- ・発電機に接続するひと続きになった非常用電灯
- ・暖房器具
- ・寝具、食料、水、ろうそく、懐中電灯、化学処理トイレ
- ・つるはしとシャベル（脱出するために掘らねばならない事もある！）
- ・予備燃料
- ・救急キット
- ・消火器
- ・いす、ベンチ
- ・シェルターの鍵（みんな鍵の保管場所を知っているだろうか？）

シェルターが完成しても物置として使い始めてはいけない。そんなことをするといつの間にか物でいっぱいになってしまい、出入り口をふさいでしまうことになる。シェルターとは予告無く緊急に必要なものなのだ。

小規模のシェルターには

- ・懐中電灯かろうそく
- ・食料とビン入りの飲料水
- ・寝袋
- ・携帯ラジオ（支給されていたら忘れずに持ってゆくこと）
- ・いすまたはベンチ

その他の受動的防護策

多数の新しい防護策があるが、ここではいくつかの実用的なアイデアを挙げておく。

テープ（フィルム）「3M ペーパー」と呼ばれることもある透明のポリエチレン製粘着テープも大変役に立つ。このテープは爆風に対する防護性を高めることができる。ガラスの窓やドアをこの粘着性のあるポリエチレンのフィルムで完全に覆うのだ。透明なのでガラス越しの視界にはほとんど影響を与えない。爆発の際も窓ガラス全体が粉々に飛び散って人々が傷つき、貴重な資機材に被害が及ぶようなことがなく、小さな穴があくに過ぎない。あなたの宿舎やオフィスの窓ガラスの保護に最適である。この防護策のメリットは明白であるにも関わらず、時として特にご婦人方の猛烈な反対に会う。「だって、景色が台無しじゃない！ 見た目もひどいし」

反対論の審美的な側面は理解できる。しかし、どう考えても美しい顔より美しい景色を台無しにするほうが賢明だろう。粉々になった窓ガラスの破片で死ぬことも、重い障害を負うこともある。この簡単な方策ですでに数多くの命が救われている。だから是非利用してほしい。ひとつコツを紹介するが、フィルムをガラスに貼るときによく発生する気泡を抑えるには、はじめに薄い石鹼水でガラスをぬらしておくことよい。そうすると、フィルムをガラス面上で移動しながら正しい位置にピッタリと貼ることができ、発生した気泡やしわも雑巾で平らにすることができる。なお、この3M タイプのフィルムは曇りガラスには貼り付かない。

3M ペーパーはあなたの命を救う。したがって全ての建物に使用することを強く勧める。

この透明なテープを入手できない場合や発注して到着するのを待っている場合の次善の策は、セロテープ（スコッチテープ）かまたは粘着性のある紙

を使うことだ。窓ガラスに縦横にテープを張りなさい。3Mほど効果的ではなく、ガラスの飛散を部分的にしか防げない。テープで覆われていない部分のガラスは重たく危険な破片となって飛び散ることになる。

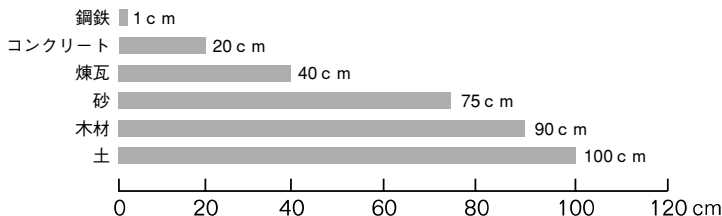


ネット・カーテン（網カーテン） 重量のあるネット・カーテンも爆風に対しては有効だ。爆破のショックや爆風の威力を吸収する効果がある。もしこのカーテンがあるなら、重度の危険に直面した時には必ずカーテンを閉じなさい。実際にどんなカーテンも（素材が重ければ重いほど効果的だが）爆風の威力を軽減する。

鎧戸 世界のどこでも、多くの家屋の窓に木製の鎧戸が備え付けられている。これらも爆風の威力を軽減するのに大きく役立つ。もし、あなたの家にこれが備え付けられているなら、危険な状況下では必ず閉めなさい。

木製の厚板 窓に釘付けて固定したり、あるいは単に窓の外に並べて置いたりするだけでも爆風の威力に対し簡単で効果的な防御となる（とはいえ、爆弾、地雷、砲弾、手榴弾などから飛んでくる破片を食い止めることは出来ない。狙撃兵の弾丸も同様だ）。

防御に必要な厚さ 小火器の弾丸や爆発に伴う破片を防ぐのに必要となる一般的な厚さをここに示す。



これらの厚さは散発的な銃撃に対してのみ有効であり、絶え間ない銃撃にはその2倍の厚さが必要となる。

防空壕 防空壕について長々と述べるつもりはない。理由は簡単で、防空壕の建設は専門家にしかできないからである。地下に設置され、鉄筋コンクリートで作られているものが理想だ。もし空爆の可能性があるなら、もしくはありそうならば建設技師を雇って防空壕を作りなさい。

シェルターや防護壁のような受動的防護策は、残念ながら我々の多くのミッションで今必要となっている。あなたが自分自身と、チームそしてオフィスと宿舎をよりよく守るための方法を説明するのにこの章が役立ったことと思う。

さて、様々な防御策を設置したところで最後の助言がある。それは、すべての要員にどこにシェルターがあるのかを周知させるために避難訓練をすることだ。新しく着任してきた要員にも忘れずに非常事態のときの避難場所を熟知させよう。

シェルターの建築がうまくいくように！ あなたがそのシェルターを使う必要がないことを願う。が、「あとで悔やむより今建てろ！」だ。

建物の選定

新しい地域に移動したときに、あなたの責任においてオフィス、宿舎、倉庫などに適切な建物を選択することになるかもしれない。そのときに小奇麗で見晴らしが良く、マーケットに近い町の中心の物件を選びたいという誘惑にかられるかもしれない。尤もな話だ。誰もあなたに世捨て人のように生きるとは言っていない。でも、なぜあなたがそこにいるのかをよく考えて欲しい。そこは紛争地域だということも。

今日の戦闘は何マイルも先のことであるかもしれない。でも明日はそれが

あなたの目と鼻の先に来るかもしれない。数多くのオフィスが不適当な場所に置かれている。それはもともと間違っている選択基準で選んでしまったからだ。至近距離での戦闘で破壊されたいくつかのオフィスを訪れたことがあるが、それらの建物は見晴らしを優先して選ばれたもので安全性と防御策に関しては殆ど考慮されていなかった。だからそこにいた要員は戦闘が突如として身近に迫った時に大変な苦勞をすることになってしまった。それを鮮明に示す例は海辺の景色が見えるように選ばれたオフィスだ。その背後にあった似たような建物は、見晴らしはなかったが核シェルターが設置されていたのに却下された。「景色がいまいち」という理由で！ その町で戦闘が激化したときにはその物件はすでに入居不能だった。結局要員たちは生き延びることができたのだが、景色のよくない方の建物であればより安全であったのではないだろうか？

それでは、建物選択のためのいくつかの指針を示そう。ここに書いた全ての条件に当てはまる物件はそうあるものではない。が、より多く該当する物件を探す努力をするべきだ。

考慮すべき点

- ・ その町や村に対する脅威の種類と程度
- ・ 建物の状態はどうか、修理が必要か、など
- ・ 敷地内にあなたが避難できる場所はあるか
- ・ 無線交信は良好か、ファックス、電話その他の通信手段は可能か
- ・ 現地スタッフや現地住民があなたを訪問することが難しくないか
- ・ 安全にすばやく緊急避難できるか
- ・ その場所が周囲からすでにどの程度保護されているか、丘の上ではなく谷間にあるのかなど（周囲が堀で囲まれているか？ その堀は頑丈か？）
- ・ 火災の危険性はどの程度あるか
- ・ 水と電源を確保できるか
- ・ 軍事施設或いは同様施設が近くにあるか（標的となる可能性が高いので避ける）
- ・ 軍事目標となり得る、攻撃を受けやすい施設が近くにあるか（発電所、水道施設、政府機関の建物、警察署、化学工場など）
- ・ 安全な駐車場を確保できるか
- ・ 自動車爆弾による自爆テロに会う危険性はあるか（建物は隣接する道路から攻撃を受けやすいか？ 防壁などにより、道路や駐車場と建物を分離することができるか？）
- ・ 受け付けを置くのに最適な場所があるか（本館の外側で、訪問者のチェックが、理想を言えば金属探知機などで十分できること。また女性

の訪問者は必ず女性スタッフによってボディチェックされる体制を整えること)

あなた自身の責任で建物を選ばなければならないこともあるだろう。しかしながら、オフィスの代表が管理要員と（理想をいえば建築の専門家とも）協議して決定することが多い。

個人用防護装備

個人用の防護装備とは、あなたの所属する組織から安全確保のために貸与される防護ジャケット、ヘルメット、装甲車両などの装備を意味する。

まず大切なのは以下の点である。

これらの装備があることで自分が安全であると錯覚してはならない。これらの装備は安全性を向上させるものであって保証するものではない。

全ての機関がこのような装備を使用しているわけではない。だからと言って、その機関が要員の健康や安全の維持について無関心だということではなく、ただ単に通常はそれらの装備が必要とされてはいないからだ。高性能で非日常的な装備に頼らなければならないということは、そこが非常に危険な状況であることを意味しているのであって、そこはあなたが活動すべき場所ではおそくないであろう。防護装備を貸与するよりも、あなたの組織は撤退命令を与えるか、あるいは少なくともあなたの活動を特定の地域や決められた日程に限定することを選ぶだろう。

以下に述べる防護装備のどれも、あなたが直面するだろうあらゆる脅威からあなたを守ることは出来ない。つまり装甲車両を保有していることが、いかなる危険をも突破できる「戦車」を持っていることにはならない。あなたの装備は、不測の事態に対する用心としてあなたに渡されたものであり、状況の急激な悪化に備えた非常事態計画の一部であると理解すべきだ。特定の任務やフィールドトリップにおける脅威を常に注意深く判断する責任はやはりあなた自身が担っている。脅威の種類や程度を判断したあと、どのような装備を携帯し使用するかを、またあなたが決定することになる。個人的には私は、このような装備は万一の用心のためとしてのみ意味があると強く思う。つまり、「必ず必要となる」状況ではなく、「もしかすると必要になるかもしれない」状況でのみ使われるべきものなのだ。兵士は使用しているが、それは彼らが戦闘の最前線で活動しなければならないからである。人道援助機関の要員は兵士ではない。もし我々がそのような危険度の高い地域で活動しているのであれば、それは計算済みの危険の範囲をすでに越え、容認できない

危険領域に踏み込んでしまったことを意味する。

まとめると、あなたは防護装備を持っているべきだ。そしてもしそれを必要とする状況になったならば使うべきだ。

防護性能のレベルは製品によって実に様々である。基本的にはよりどりみどりだ。もし組織が購入するのであれば、使用する要員に対しそれらの装備の防護性能がどのくらいであるのかを素人にもわかるように説明する必要がある。防護装備の購入担当者は、購入する製品の性能や質とその実際の用途について明確に知っておく責任も負っている。市場が次第に複雑化していることを大量の防弾ジャケットを購入した時に私は実感した。毎年、新しいデザインや素材が市場に出回る。価格も大切で、これらの装備は決して安くはない。あなた自身が防護装備について精通していれば問題ないが、そうでなければその筋の専門家に任せることが必要だ。ここではそれぞれの装備によって一般的にどのレベルの防護が可能なのかを示してみよう。

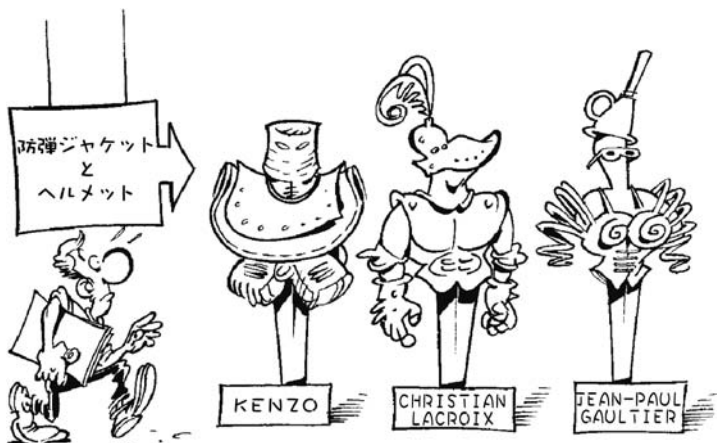
防護ジャケット (flak jacket)

特に旧ユーゴスラビアなど、いくつかの活動の現場で防護ジャケットが使用されてきた。このジャケットは胸、背中、首などに低レベルの保護を提供するもので、爆風、爆弾の金属片、ガラスや木の破片などを防ぐように作られているが銃弾を止めるようには設計されていない。

このジャケットは軽量で着心地が良く、ヘルメットと一緒に着用されるべきものである。

防弾ジャケット (ballistic jacket)

防弾ジャケットの防護性能も多様である。最良のものは口径 7.62mm までのすべての既知のライフルやピストルに対して有効だ。価格も高い。防弾ジャケットも身体の一部のみを保護するものだが、頸部、鼠径部を守る部品を加えることはできる。基本的な防弾ジャケットはそれだけで爆風に対して有効だが、前後及び側面に装備された防弾プレートによって防護力が強化されている。身分証や応急処置用の圧迫包帯を収納することの出来る大きな前ポケットがついている。高度な防弾力には重さが伴うものであり、それは約 12kg にもなる。最初のころは着ているのが苦しいが、重さにはすぐに慣れるだろう。「トラウマ (外傷)」プレートと呼ばれる防護板を装備したものも購入できる。これは着弾のショックからくる衝撃をさらに弱め、打撲傷を軽減する。ジャケットには男性用と女性用とがあるので間違えないように注文しよう。そうしないとまるで古臭いコルセットをつけているようだと女性たちは感じるかもしれない。



いつどのように防弾ジャケットを使用すべきか

- ・防弾ジャケットは狙撃の可能性のある場所や前線に近い場所での活動、境界線を越える活動などで、要員、現地職員、コンボイのドライバーの危険を軽減するために用いる。
- ・前襟と後襟（開閉可能になっている）を加えると首と喉をも防御できる。
- ・ジャケットは頭部を保護するヘルメットと常に一緒に使用しなさい。
- ・防弾プレートが正しく取り付けられていることを必ず確認しなさい。防弾プレートは簡単に脱着することが出来る。プレートのひとつは通常湾曲しており、ジャケットの前面に装着される。防弾ジャケットも他の防護装備も高価なものである。またこれらの装備は強盗にとっても兵士にとっても、売ったり自分自身のために使用したりできるので大いに魅力的なものである。だからあなたは最新の注意を払って取り扱う必要がある。

ヘルメット

ヘルメットは身体の最も傷つきやすい部位を爆風や破片から守るように設計されている。通常は弾丸の貫通を防ぐようには作られていない。

いつどのようにヘルメットを着用すべきか

- ・ヘルメットは防護ジャケットや防弾ジャケットが使用されているような危険度の高い地域で着用する。
- ・首紐は常にしっかりと締めなさい。さもなければ一番必要とされるときにヘルメットは衝撃で頭部から吹っ飛んでしまう。

- ・ヘルメットをかぶり、固定するには時間がかかる。したがって手遅れになる前に着用しなさい。
- ・ヘルメットを着用しているときには車両の窓を少し開けておきなさい。着用時は聴力が制限されるので、車両の窓を閉めていると危険を知らせる音を聞き逃す恐れがある。
- ・ヘルメットは車両に乗っているときの予期せぬ衝撃や事故から身を守るのに大変に効果的だ。急な針路変更や急停止のためにあなたや同乗者が車内で吹っ飛び、ヘルメットを着用していないと頭部損傷を受けることがある。

装甲車両

装甲車両は通常4 X 4（四輪駆動）車だ。どんな車両（例えばコンボイトラックの運転席）にも必要があれば装甲を施すことができる。ここでも様々な防護レベルがあり、レベルが上がるほど（通常は）車両重量も増える。高度な防護による重量の増加は特異なハンドリング（車の挙動）を引き起こすため、特殊な運転技術が要求されることもある。装甲車両の運転に慣れるには時間を要するため、練習を重ねるか熟練したドライバーを雇用しなさい。

装甲外板はライフルによる銃撃、砲撃による爆風、対人地雷から、そして限られた範囲内ではあるが他の地雷の爆発からも身を守ることが出来る。しかしながら、すでに言及したようにもしあなたがそんな車両を手に入れたとしても、どこへでも行ける個人用戦車であるかのように扱ってはならない。装甲車両はそれほど強力ではない脅威からはあなたを守ってくれるが、すべての脅威に対して有効だと錯覚してはいけない。つまり、分別のある行動をしなさいということだ。もし危険度が高いと判断したら引き返しなさい。装甲車両は通常、大口径の狙撃用弾丸や大砲や迫撃砲の直撃弾に耐えられるようには設計されていない。あなたの使用する装甲車両がどのレベルの装甲を施しているかを調達した人に確認しなさい。彼らはあなたが何を望んでいたのか、そしてより重要な点だが、あなたが実際に何を手に入れたのかを良く知っているはずだ。

装甲車両は危険度の高い地域における極めて重要な任務や、危険度が高いと思われる地域に初めて入る場合に使用されるべきだ。安全性を高めるために通常は故障した場合などに備えて、2台が一組で行動する。装甲車両の使用が必要となるような状況であるならば、安全性をさらに高めるためにヘルメットと防護・防弾ジャケットを併用することも必要になる。

同様に、防護装備が必要となるような状況下では車内に救急セットを常備し使いこなせるよう訓練を受けておくべきだ。2組の圧迫包帯を常に携帯し

なさい。圧迫包帯は小型で使いやすく、持ち運びに便利のように作られた特殊な包帯で、受傷したときに即座に傷口に当てることができ、出血を止め生命を危険から守ることができる。あなたの組織の医療関係部署や現地の看護師に問い合わせなさい（あなた自身で作ることも可能だ）。

車両を防護する他の方法

防弾被覆または地雷被覆は、前に述べたような装甲を施していない車両に対し最小限の防護をある程度与える経済的な方法である。これらの被覆は防弾ジャケットに使用されるものと同じ素材でできていて車両の床に敷かれる。とても重い（1㎡あたり約6kg）ものである。車両の床の防御性を高めることで、手榴弾、不発物、対人地雷などが射出する小さな破片を防ぐことができる。とは言っても、この新種の補助的防護装備があなたの安全を確保してくれると思いついてはいけぬ。防弾被覆はあなたの車両を対戦車地雷から守ってはくれない。

砂袋を車両の床に置くと地雷に対する防護力を増すことができる。この対策は対人地雷の爆風と破片に対しては効果的だが、対戦車地雷についてはその爆発力を軽減する効果しかない。言い換えれば、完全に守ってくれることなど期待してはいけぬ。また、砂袋は車両重量を増加させるので車の安定性を減少させるという欠点を伴う。

受動的防護装備はあなたの身の安全性を高めてくれるが、結局のところ最大の防護策はあなた自身の分別と判断力だ。脅威が深刻であるとき、あなたの身の安全を防護装備に委ねてはならない。防護装備は自分が安全であるという錯覚をあなたに与えることがある。そんな時は真の勇気を出して引き返すほうが、あなたと現地職員の命を危険に晒すよりはるかに賢明である。明日は明日の風が吹く。日を改めてもう一度状況判断を行い、危険性が許容範囲であると判断したならば仕事を再開すればよい。

車両と運転技術

あなたの安全のための受動的防護装置について述べているこの章の中に、「車両と運転技術」というトピックがあることを不思議に思うかもしれない。実は、悲しいことにあまりに多くの交通事故が活動中に起きているのだ。こういった事故は基本的な指針を賢明に適用することにより確実に減少させることができる。

これもまた適応力の問題である。道路と言っても名ばかりかも知れない！ひどい状態で、砲撃によって出来た大小の穴だらけのこともある。道路標識にも頼れない。そんなものはとっくになくなってしまっている。だから地図

を持ってゆこう。他の車両に出会うこともない。ときどき見かける戦闘車両以外には、あなたの車両しか走っていないというのが普通だ。もし車が故障したり燃料が底をついたりしてもあなたを助けてくれる通行者はほとんどいない。あなたはもはや、いつもの GTi (Gran Turismo Injection) で見なれた道を飛ばしているわけではないのだ。あなたが運転しているのは異なった運転技術を必要とする一風変わった大型の車両であり、全く見たこともない名ばかりの「道路」を走っているのだ。そんな状況に合った指針は何だろうか？

四輪駆動車

私が見た人道支援に携わる要員が使用してる車両の大部分は優れたもので、起伏の多い地形に対応できる信頼性の高い大型の四輪駆動車であった。だが、我々の多くが運転し慣れている車両とは異なっており、基本的に車高があり重量もある。

優れた車両ではあるが、それを乗りこなすためには多少の知識と運転の練習が必要となることを覚えておいてほしい。任務遂行のための基礎的な訓練の中で、(運がよければ) このような四輪駆動車の運転の練習をしたかもしれないがごく簡単なものに留まることが多い。活動の現場に到着したときに自意識過剰になっても自信過剰になってはいけない。もしあなたがこのような車両の運転に自信がなければ(新人のときは誰でもそうである)、活動に出かける前に判らないことは質問し、オフィスの周辺で練習しなさい。

現場では四輪駆動の機能が必要となることが驚くほど多い。どのようにして四輪駆動に切り替えるのかあなたは知っているだろうか? 「もちろん! ダッシュボードにある四駆ボタンを押せばいいだけさ」 そうじゃない! 確かにボタンは押す。だが、そのあとでギアを正しい位置にシフトしなければならない。それだけで十分な車種もあるが、そうではないものもある。ある車種では上のステップを終えた後、一旦車から降りてそれぞれの車輪のハブにあるノブを回して四駆モードにセットしなければならない。それを知らなかったため、私自身もあるとき危険な場面で困ってしまったことがある。その車両の四輪駆動装置の仕組みを事前に調べることを私はせず、また誰も教えてくれなかったのだ。そのとき私は四輪駆動車なんて軍用車と同じで簡単だと考えていた。が、とんでもない間違いだった。だからあなたの車両の四輪駆動の仕組みを熟知し、使い方を練習しそしてチームメンバー全員が同じように扱えるように徹底しなさい。

あなたの車両のタイヤが酷使されることを忘れないように。また、いつも同じ車を使うとは限らないし、それぞれのタイヤの寿命についても正確には

わからない。だから磨り減ってパンク寸前であるかもしれないのだ。もし高速運転中にパンクすれば命取りになってしまう。

あなたにはタイヤを交換した経験がある。近くの修理工場で即座に交換してくれたし、高速道路の緊急サービスも飛んできてくれた。だがそんな体験が役に立たないのは明白だろう。まずあなたの車両のタイヤを交換する方法を確かめなさい。それからあなたのチームメンバーの全員が何をどうすべきかを知っているようにするために、一緒に交換の練習をせなさい。すばやくタイヤを交換することが必要となる事態もあるだろう。そんなときに練習したことが役に立つ。タイヤ交換用の工具がいつものところにあると思いついではいけない。人道援助機関の車両上の工具はまるで自然の法則であるかのようによく消えてしまう！ フィールドトリップの度に工具を確認しなさい。各車両に搭載されているジャッキも確認し、使い方に慣れておこう。あるとき私は保有するすべての車両に全く合わないタイプのジャッキが搭載されていたのを目撃した。そのジャッキは短かすぎて最大に伸ばしても車軸に届かなかったのだ。これを使用するためには分厚い木製の角材をジャッキの下にあてがい、高さを補うことが必要だった。だから適当なサイズの角材を見つけて常に携帯するという対応をした。

スノーチェーンが必要な地域では着脱方法を覚えておこう。それはおそらくあなたが考えるほど簡単ではない。

ジャッキと同様に工具箱の工具が全て揃っているか調べなさい。鍵がかかっていないか、かかっている場合には鍵が手元にあるか、常に確認しよう。あるとき訪問したオフィスでは全ての車両に素晴らしい工具箱が装備されていた。「すばらしい」というのは箱のことで、中身については何とも言えない。というのは、工具箱は全て鍵がかかっていて誰一人として鍵のありかを知る者はいなかったのだ！ 警備体制は完璧だったがこれでは何の役にも立たない。

ランボー気取りだと誤解されたくはないが、やはり私は必要となるかもしれない緊急対応のための軍隊の訓練はしておくべきだと思う。事件が起きてからでは遅い。例えば、ライフル射撃や砲撃に対してすばやく身を伏せる訓練などをチーム全員で行いなさい。フィールドトリップの途中で平穏な地域を選んで状況を設定し、練習しなさい。折に触れて繰り返すのもいいことだ。このような訓練を押し付けるつもりはないが、私だったら間違いないで実施する。もちろん実施するかしないかは全くあなた次第だ。

車両の使用についての指針を述べてきたが、次にあなたやドライバーに役

立つだろうと思われる簡単な車両チェックリストを紹介しよう。

車両チェックリスト

- ・タイヤ（どんな状態か、空気圧は十分か？）
- ・オイル、冷却液、燃料
- ・工具（全て揃っているか、ジャッキは装備されているか？）
- ・予備のファンベルト、必要ならば予備の燃料を入れた容器、スペアタイヤ（適正な空気圧か？）
- ・必要ならば防護装備（ヘルメット、防護ジャケット）
- ・飲料水
- ・予備／非常用食料
- ・救急キット
- ・寝袋または毛布（寒冷地対策や、救急処置用として持ってゆく価値がある）
- ・懐中電灯
- ・地図
- ・車両用ロゴ、標章旗（あなたの所属する組織のもの）
- ・照明装置（ロゴ、標章旗を照らす装置も含む）
- ・現地当局が義務付けている、運転日誌、登録証、保険証などの書類

運転

車高のある車は本質的に高速走行時には不安定であり、コーナリングのときに路面に吸い付くように設計されているスポーツカーとは異なる。常に安全な速度で、あなたの腕前でできる範囲の運転をなさい。車両の性能の限界も忘れずに。私はこの本で触れている危険のどれよりも、同僚の（無茶な）運転のほうにはるかに深い怖れを感じたことがある。状況のよい道路上でも四輪駆動車の最高速度は時速 80km くらいに抑えることを勧める。それ以上のスピードは不必要にアドレナリンを分泌する。

あるとき、同僚が時速 120km までスピードを上げた！そこは我々を歓迎していない地域だった。でも私は彼に歩いて帰るから車を止めてくれと頼んだ。このとんでもないスピードで移動しつつけるよりも車を降りて歩いたほうがまだ安全だと考えたのだ。彼は驚いたように「だってあと 15 分でミーティングが始まるんだぜ！遅刻だ」と言うではないか。私が「こんな運転をしていたら、行き着く先はミーティングじゃなくてあの世だよ」と答えると、彼は速度を落とした。それでもミーティングには間に合った！危険を冒してまでそんなに急ぐ価値は無い。あなたの技術と車の性能の範囲内で運転しなさい。

可能な限り夜間に車を運転することを避けなさい。道路状況は不明だし、



車両を停止させられて危害を加えられる危険性が夜間はあまりに大き過ぎる。夜間に運転する以外に選択肢がないなら、所属機関の標章旗やロゴに照明を当てて目立つようにしなさい。

危険度の高い地域では2台一組の車両で移動することをいつも真剣に考えなさい。単独で移動する車両は無法者の格好の標的になってしまう。2台であれば安全度も高まる。もし1台が故障したり損傷を受けたりしても、残りの1台に全員が乗り移り、無事に戻ることが出来る。貴重な車両を余分に使用することになるため、この原則を常に実行することはそう簡単なことではない。だが、綿密に計画を立てて業務の優先順位をつけることで実行できる。

個人用品

個人用品についてあまり長々と述べるつもりは無いが、あなた個人の安全に役立つと思われることをいくつか提案しよう。

すでに服装については述べた。地味な服装を心がければ不必要な注目的になることも相手を不快に思わせることもなく、また、泥棒達の注意を引き付けることも無い。「地味な服装」とは、破れて擦り切れたジーンズや派手で挑発的なTシャツのことではない。私の言う「地味な服装」とは、綿のスラックスやこざっぱりしたシャツやドレスなどのことだ。適切な程度の「地味さ」を心がけなければならないが、極端にこだわる必要はない。関係当局や政府高官との会議に出席する場合もあるので、男性はスーツ、上着、ネクタイ、女性はより洗練された服が必要となるかもしれない。

また、軍用型のブーツ、オリーブドラブ色の作業着などのミリタリースタイルの品物の購入には慎重であるべきだ。それを欲しがる人にあなたは現場で出会うかもしれない。また、不必要な疑いを抱かせてしまうこともある。軍の放出品も買わないほうがよい。所属組織が購入した防護ジャケットよりも性能がいいからという理由で、非常に高価な防護ジャケットを自分のために買った人に私は出会ったことがある。このような行為もあなたを注目的にしてしまうし、誤解を招くことにもなりかねない。ついでに言えば、そんな特殊な服装は同僚たちにも不評であなたを浮き上がらせてしまうだろう！

時計はプラスチック製の安物にするべきだ。どこでも売っている「本物のような偽物」もよいだろう。多額の保険に加入していないなら、ロレックスやカルティエは家にしまっておいたほうがよい。チェックポイントなどの現地の人と接する場面で目立ちすぎてしまう。

スイス・アーミー・ナイフや最近はやりの「レザーマン・スーパーツール」(同じ発想で、複数の工具が一体になっている)は持って行くとともに役に立つ。私が持っていた3個は知らないうちに誰かのお土産となって消えてしまったが、買いなおすにも高価ではない。ただし軍用ナイフ様のものは避けなさい。

質のよい靴、丈夫な運動靴、また軽量のウォーキングブーツ(近頃は多くの種類が入手可能な)などは日々の活動にほぼ不可欠である。会議に出席するときにはもう少しフォーマルなものが必要だ。

防水加工の衣類は世界のどこに行こうとも不可欠だ。熱帯地域に行く場合でもモンスーンがあることを忘れてはいけない。「バーバー(Barbour)」タイプの油布ジャケットは見た目もよいし防水だ。

CDウォークマンや短波ラジオ、DVD、MP3など、休暇を楽しむ個人用品も必要だろう。どんなものを持ってゆくかはもちろんあなた次第だ。どれも安いものだし、たとえ消えてなくなってしまっても（実際よくなるのだが）大した問題ではない。

ラップトップPCと携帯電話は活動に欠かせない。電源用と電話やeメール接続用の各種の万能アダプターと一緒に持っていくと助かるだろう。電力の供給が不安定な国では、電圧・電流安定機（サージ・プロテクター）やその機能を組み込んだプラグなどにより、機材へのダメージを防ぐことができる。

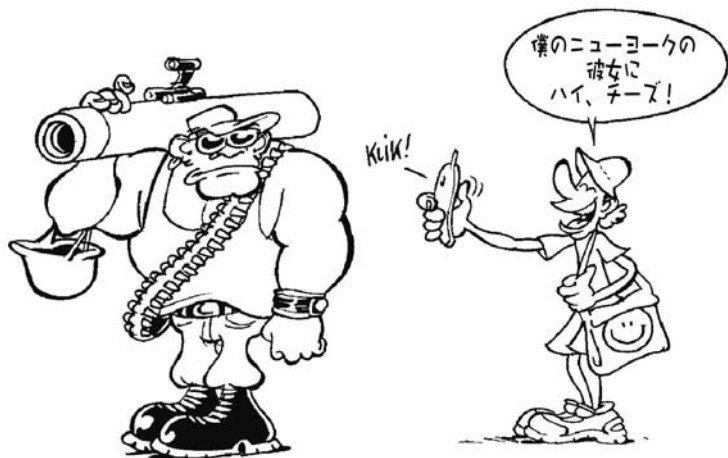
高品質の懐中電灯（できれば充電電池付き）は必需品であることが多い。

少量の現金を携帯しなさい。そうすれば、もし奪われても損害が少なく済む。また、現金を持っていない場合、「強盗」にそう言っても信じてもらえないだろうし、少なくとも身体検査かあるいはそれ以上のことをされる危険を冒すことになる。

ほとんどの組織が個人用品に対する保険に加入している。損害が発生したときに保険会社に速やかに報告することはもちろんあなたの義務である。その際、組織の代表や同僚から何らかの証言を得ることはとても役に立つ。被害に会ったらすぐに報告し、派遣期間の終了時まで放置することは避けなさい。もしあなたの組織が個人用品の保険に加入していないときは、個人で加入しておいたほうがよいだろう。ただし高額ではある。

カメラについて

カメラやビデオカメラを任務に持ってゆきたいとあなたは強く思うかもしれない。訪れた場所や出会った人たちの思い出を残したいと言う気持ちはもっともだ。撮った写真を家族や友人に送りたいという気持ちもごく自然なことだ。しかし気をつけよう！ そんなあなたの無邪気な行為があなたを非常な危険に導いてしまうかもしれない。スパイ行為をしていた、軍事機密を得ようとしていた、などと糾弾される可能性があるからだ。そんな危険を冒すだけの価値はない。



絶対にカメラを活動現場に持っては行かない、というのが私のアドバイスだ。家やオフィスなどの安全な基地に置いておき、そこで使ったり休暇のときに使ったりすればよい。活動現場は避けよう。たとえあなたが全く他意のない目的で使用したとしても、あなたやあなたの組織にトラブルを引き起こそうとたくらんでいる人に、カメラを使ったという事実を利用してしまいかもしれない。今日の携帯電話はカメラ機能付きが多く、短いビデオを録画できるのもある。上の危険はそれらにも当てはまる。たとえあなたにカメラ機能やビデオ機能を使う意思がなかったとしても、それがついているという事実があなたに不利になるように使われるかもしれない。残念だが、私の強いアドバイスはカメラ機能付きの携帯電話は家かオフィスなどの安全な基地に置いておくことだ。

第8章

安全確保と危機管理のための計画立案

管理者、あるいはオフィスや代表部の代表としての立場から考慮すべき安全確保と危機管理のための計画立案を考えてみよう。ここでは代表としてのあなたの責務全般についてではなく、安全確保と危機管理についてのみ述べる。

不測事態に対する計画とその中であなたの責任も含めて、代表者というものの役割を考えよう。さらに、しばしば完全に見落とされてしまう火災予防に関するあなたの責務についても述べる。

オフィスや代表部の代表としての役割

大勢のスタッフを抱える代表もいる。例えば30人くらいの要員と200～300人の現地職員がいるかもしれないし、あるいはもっと大勢のこともある。逆に、あなたはたった一人の派遣要員として多数の現地職員のいるオフィスに送られるかもしれない。以下に示す指針は、大きな組織にも小さな組織にも同等に当てはまる。

基礎的な留意事項

安全確保と危機管理に関しては、まず以下の事柄を考慮することが重要である。

活動地域における、あなたのスタッフに対する脅威 危険なグループ（軍、対抗勢力、ゲリラなど）を特定しなさい。どのような種類の兵器（すでに解説している）が使用されているかを調べ、スタッフたちにその危険を軽減する方法を知らしめなさい。一般的な犯罪の脅威を考慮することも必要だ。保安の現況に関する定期的な状況説明と情報の共有は大変に重要である。

任務 誰を援助するのか（犠牲者の種類、活動の種類、場所）？ 任務を達成するには紛争当事者の誰と適切な関係を確立することが必要なのか？

あなたのスタッフの安全確保 使用機材やオフィス、宿舎、倉庫、車庫などの建物の安全確保について考えよう。シェルターは必要だろうか？ もしあなたが目に付く場所に砂袋で防護したシェルターを作ったり、地下室を整備したりすると、現地の人たちが「眉をひそめ」ないだろうか？ そんな行為が現地の人々や軍隊をも不安にさせてしまうことがある。つまり、彼らの知らない情報をあなたが持っているのでは？！ という疑念だ。あなたはパニ

ックを引き起こしたり、疑いを抱かせたりしたくはないはずだ。それは大切な配慮だ。砂袋や3Mフィルムなどを発注した場合でも、まずは保管しておくべきだ。もし状況が悪化しても手元にあるのだからすぐに活用できる。

火災予防 私は確信を持って言うが、殆どの代表は火災予防の重要性を忘れていている。規模の大きなオフィスでは、火災予防などの責任を管理要員や副代表に委ねることもある。しかし最初の決断を下さなければならないのはやはりあなたであろう。火災予防措置の重要なポイントはこの章の最後で述べることにする。

予想外の事態に対応する不測事態対応計画 不測の事態に対応する計画を立てるのはもちろん上司であるあなたの責務である。この計画は、状況が悪化したときにどのように撤退するかだけでなく、スタッフの緊急医療搬送や危険度の高い時期に備えての蓄えの増強なども含む（後述の欄参照）。例えば、3M ペーパーや砂袋、それを詰めるための道具などが十分に備蓄されているようにすることも含まれる。

車両と安全運転 前述した指針に従い、夜間走行、速度、保守点検、部品や工具の確認などに関する規則を決めておきなさい。新しく加わった要員には必ず運転の訓練をさせよう。使用している車両について彼らの方からわからない点を尋ねてくるだろうとか、もともとその車両についてよく知っているだろうとか期待してはいけない。

勤務時間中と時間外のあなたのスタッフの品行 要員だけでなく、当然現地職員も適切でふさわしい言動をすべきであり、その様々な側面についてはすでに述べてきた。無分別な行動は安全確保と危機管理に劇的な悪影響を及ぼす。あなたは一般的な指針を具体的な規則に落とし込まなければならない。基準を設け、例を示し、規則には従わねばならないことを強く主張しなさい。この段落は短いものだが重要なので、しっかりと頭に入れておいてほしい。安全確保とリーダーシップという、あなたの非常に重要なふたつの責任に関することなのだから。

危機対応時の指示 もしあなたのチームが問題対応時や危機対応時の指示（手引き）をまだ決めていないならば、それを作る必要がある。かりに決めてあったとしても、それが本当にあなたの考えどおりのものであるかを確認しなさい。

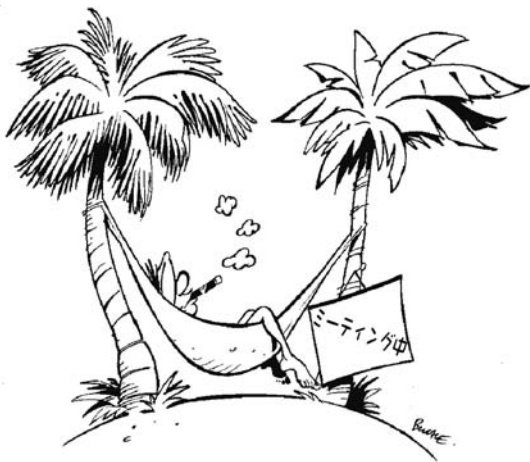
健康管理 あなたにはスタッフの健康維持についてまで管理責任があるのだろうか？ 残念ながらそのとおりである。あるいはあなた自身が管理しなく

ても、チーム内の医師や看護師に委ねれば良い。もし定期的に状況をチェックし、高度の基準を要求しなければ体調不良を訴えるチームメンバーが続出することになるだろう。

ストレスマネジメント

ストレスで疲れきった同僚は彼ら自身にとっても、周囲の人たちにとっても危険な存在になる。ストレスに関しては私よりも適任の専門家がすでに多くを述べているのでくどい説明は避けよう。ストレス管理は、今ではほとんどの人道援助機関が真剣に取り組んでいる分野である。しかしながら、ニューヨークやジュネーブの平穏な環境にいる専門家は、現場の責任者であるあなたにはあまり助けにならない。もちろんあなたは彼らの助言や指針を受け入れるべきだ。だが結局のところ、実際のストレスマネジメントと特にストレス予防策はあなたの管理能力やリーダーシップにかかってくる。では一体どのような実践的対策があるのだろうか？

あなたのリーダーシップと管理能力がストレスを緩和するためには不可欠だ。秘訣は、スタッフと彼らが抱えている問題に対するあなたの気遣いと理解である。常に彼らに耳を傾けなさい。スタッフが何か過ちを犯したときには、ためらわずに助言を与え、あるいは優しく叱りなさい。そうすることにより、彼らを大切にしているのだと言うことをあなたは示すことができる。効果的な安全規則と手順を守らせ、役に立つ状況説明を行い、情報の共有を徹底しなさい。



休日も重要だ。あなた自身は毎日夜遅くまで働く必要があると思うかもしれないが、もしそうしたらあなたは悪い手本になってしまう。スタッフも同じようにしなければいけないと感じ、遅くまで仕事をするようになる。やがてチーム全員が極度に疲労し、ストレスをためてしまうだろう。休暇予定表を作り、その重要性を力説しなさい。スタッフが定期的に休みを取れるように配慮し、あなたも取りなさい。あなたは常に必要不可欠な人材ではない。職務を誰かに委ね、休みを取ろう。

あなたはスタッフの快適な生活（福利厚生）についても責任を持っている。適切な発想をし、改善しようという熱意を持つことで、日々の生活における緊張や不快な要素を軽減することができる。スタッフは自宅に電話をしたいときにそうできているだろうか？ もしできないのなら、それはなぜか？ どうしたらできるようになるのか？ 家族や愛する人と連絡を取れるということはストレスを軽減するのにとても大きな効果がある。彼らは大きな遅延なくメールを出したり受け取ったりできているだろうか？ もしそうでないなら、あなたはどのようにしたら状況を改善できるだろうか？ タバコや飲み物、石鹸、雑誌、ビデオなどの、お楽しみグッズをあなたは入手できるだろうか？ 以上の全部を可能にするのは無理だろうが、考え、努力することでどんな状況であれ改善することができる。

ストレスの多くの面を優れたリーダーシップと管理能力によって和らげることができる。専門家たちはもちろんあなたの相談に乗ってくれるし、彼らの助言に耳を傾けることはあなたの義務でもある。しかしストレスを予測し、許容レベルを超えてしまう前に対策を打つのは、あなたにこそできることだ。初期段階のストレスの小さな火花を見逃さずきちんと消火しよう。それが大きな炎となってかけがないスタッフを「燃え尽き」させてしまう前に。詳しくは ICRC が出版している Barthhold Bierens de Haan 著の小冊子 “*Coping with stress*” を参照するとよい。

不測事態対応計画と撤退計画

ここで述べるのは「もし、何かあったら・・・？」に対応するための概略計画である。現場で活動している組織の多忙な毎日の中では、安全確保と危機管理対応の重要な側面であるこれらの計画をしばしば忘れがちである。「それはずっと先のことだよ」とか「そんなことはあり得ないさ」といった意見が主流となりがちだ。確かにそれは起きないかもしれない。だが、もし起きてしまったときに、そんな時に備えた計画があったならば、あなたのチームははるかにうまく状況に対応できるであろう。計画はそれほど詳細でなくてよい（詳細さはかえって逆効果となることもある）。状況は我々が想像したとおりには展開しないものである。概略計画とは、主要なあるいは一般的な

要素を考慮するものであるが、それでも不測の事態に対応するための効果的かつ有用な手段となる。

あなたの所属する組織の本部からこのような計画を渡されることもある。それは本来、非常に一般的なものであり、世界のどこにおける活動にも当てはまるような内容になっている。よって、あなた自身の状況に合ったものにするためには、その計画をより具体的なものにする必要がある。

全ての可能な不測事態について考えることはとてもできない。しかし、3つの重要な状況について考えることで、どのように計画を作り、どのような要素を考慮すべきなのかを説明することができるだろう。

したがって以下の状況のための計画を考えよう。

- ・ 敵対的な環境での長期残留
- ・ 部分撤退
- ・ 完全撤退

計画を策定するに当たり、それをいつ実行に移すかという「引き金」あるいは決断条件を決めておくことが重要である。そうしておくことで、事件が起きた時にあなた自身には何をすべきかが明らかになり、あなたの所属する組織にはあなたが実際にどのように行動するかをある程度予測できるからである。時にはわずか数時間のうちに状況が急速に悪化することがあるので、この「引き金」（不測事態対応計画を発動させる具体的な状況）は重要である。無線交信も不可能になるかもしれない。そんな状況下ではオフィスや代表部の代表には大変なプレッシャーがかかる。何が「引き金」となるかについて事前に計画し、あなたと本部が協議し、合意しておくことがあなたの意思決定を助けることになる。本部の判断を仰ぐことが不可能なときにも的確な判断を下すことができるようになるはずだ。

それでは、次に3つのシナリオ（あり得る状況展開）のための概略計画の要素を考えてみよう。これらの計画は実際に起きた状況（その日時や場所には言及しないが）に基づいていることを最初に言うておこう。ここで考慮されている要素はその状況に基づいている。したがって、これらの要素のすべてがあなたの計画策定にも重要であるとは限らない。

私の目的は、不測の事態に対応するための計画を策定することがいかに容易かということを知ってもらうことである。なにも謎めいたところはない。普通に考えれば作れるものであり、一時間ほどで十分だ。計画を書きとめたら、あなたの机の一番下の引き出しにでも入れておけばよい。何か新しいア

アイデアを思いついたら書き足せばよいし、状況が変化したらそれに応じて手早く修正すればよい。

長期残留計画

典型的なシナリオを考えよう。あなたが駐在している町が大規模な攻撃を受けている。攻撃は予告無く始まり、撤退は不可能な状況だ。したがって選択肢は一つしかない。状況が好転するまで町に留まり、困難な状況に耐えることだ。

このような急激な状況の悪化に対応するための計画には以下の要素が重要になる。

目標 この計画の目標は、悪化する状況の中で、二週間にわたりあなたのチームを守り続けることである。

地下室の活用 町への長期にわたる攻撃から身を守るために、チームが地下室に移動することが必要になることを想定しよう。だが使える空間には限りがある。なぜなら町にいる他の人々も同じように考えるからだ。車両の格納場所も問題になる。少なくとも1台は稼働性と通信を確保するために地下に駐車することを計画すべきだ。あるいは、ひとつの地下室をスタッフ用に、もうひとつを2台の車両用に確保してもよい。

予備のアンテナ 使用中のものが破壊されたときに備えて、それぞれ2組のHF用とVHF用のアンテナと同軸ケーブルを発注しておくことが今日では賢明だろう。地下室までの配線計画を作り、それに従い今のうちに配線しておくべきだ。

無線 どの無線機材を地下室に移動するかを今決め、それに衛星通信機材を含めておくこと。

食料、医薬品、飲料水、調理器具 地下室への移動に備えて必要な備品を購入し備蓄しておくこと。

寝具 寝袋を地下室に近い部屋に備えておくこと。

電池、ろうそく、発電機 十分な量の電池とろうそくを備蓄し、発電機用の予備燃料も用意しておくこと。無線機材に使用する湿電池を忘れないように。

暖房器具 3～4個の暖房器具とその燃料を備えておくこと。

防護策 地下室の入り口に砂袋で防護壁を作ること。車両を格納する地下室の入り口には、ドラム缶に部分的に土を詰めたものを置いておく必要に応じて簡単に転がして移動できる。

照明 発電機に接続するために電線でつなぎ合わせた電球を用意しておくこと。

パレット 大雨の時に床を上げるために倉庫から地下室にいくつかの木製パレット（下敷き）を運んでおくこと。

前述した物品（食料、医薬品などを含めて）は、多くの人々が保護を求めて来る場合を想定し、可能な限り数倍に増やしておくべきであろう。

撤退計画の立案

撤退計画については部分撤退と完全撤退の二つのレベルを考えておくとい

い。実際の撤退に関わったときに私は悟ったのだが、撤退についてはいくつかの理由により異論が多くある。撤退を全く望まない組織もある。彼らは犠牲者に尽くすためにそこにいるのだからそこに留まるべきだ、という理由だ。組織の理念と伝統は重要なものである。したがって私は、もし危険の兆候が少しでも現れたら荷造りをして撤退しなさい、などと助言するものではない。

しかしながら、いかに深く抱かれた信念や伝統でも、時には厳しい現実に合わせて加減することも必要である。だから最悪のシナリオに対する不測事態対応計画を用意しておくことは賢明だと言える。

現場におけるもうひとつの大きな問題は、あなたのチームの誰一人として撤退したがいらないかもしれないことだ。そうなるあなたには、部分撤退時に引き上げるメンバーを選び、彼らを説得するといったような困難な仕事が残っている。誰もが自分は残らなければならないと雄弁に反論し、同僚を置き去りにすることを誰ひとり望まないだろう。このような状況はあなたの指導力を真に試すことになる。

部分撤退はしばしば最も妥当な選択である。あなたの援助を必要としている被災者を見捨てることにはならず、あなたと組織に対する信頼を維持でき、さらに組織の伝統を守ることにもなる。同時に、要員の数を減らすことで危険度を軽減することができる。賢明な計画があれば、まだある程度は達成可能な任務を持つ要員だけを残すことが可能になる。担当している任務を継続

することが困難な他の要員たちは撤退すべきだ。彼らは安全な場所に移動することができ、あなたは現場での彼らの仕事や食料、シェルターの心配をしなくてすむ。彼らも状況が好転したらすぐに現場に復帰できる。

部分撤退

考えられるシナリオはこうだ。町の崩壊が差し迫っており、もはや部分撤退は避けられない。フィールドワークはすでに不可能だが町の人々に対する限られた支援は継続できるかもしれない。

このような状況では以下の計画要素を考慮することが大切である。

目標 ここでの目標は最小限の活動を維持する要員を現場に残し、他の要員を撤退させることである。

前提 もし空港が無事かつ安全であるならば空路による撤退はまだ可能であると仮定する。そうでなければ陸路での撤退になる。

人選 撤退する要員の人数と名前を今（計画策定中に）決定しておきなさい。あなた自身が上に述べたような議論に巻き込まれるのを避けるために、撤退人員のリストは秘密にしておいたほうが良いかもしれない。逆に、誰が行くのかを早い段階で知らせておく方が良いという意見もある。そうしておけば状況がさらに緊迫したときにあなたの貴重な時間を浪費することを避けられるからだ。撤退者リストに現地職員を含むべきか、また彼らは本当に撤退を希望するだろうか、などについても考えておきなさい。

撤退開始の決断 事前に本部や代表部と撤退の決断をいつどのようにするかを協議しておきなさい。

例えば、町への全面攻撃が避けられない事態になったら、などと、部分撤退開始の決定条件について合意を作っておく必要がある。実際にそのような事態になれば長々と議論をしている時間などないし、無線のアンテナも破壊されているかもしれない。決断の遅れは危険である。事前合意があれば、あなたは確信を持って計画を実行することができる。たとえあなたと連絡が取れなくなっても、本部が撤退計画を知っていれば現場でどのような行動を取っているかが大体わかるはずだ。また、策定された行動計画を実行に移すのを可能にするために、本部は事前に可能な限りの援助をするべきである。

連携 状況によっては、国連機関や軍隊と緊密な連携を築く必要がある。そうすることによって事態についての最新の情報を手に入れたり、保護を求め

たり、現地の人々あるいは撤退したチームの消息を確かめたりできる。あなたが軍隊の連絡担当者との待ち合わせの場所を決め、時間設定し、そのための移手段を確保しなければならないこともある。国連機関と軍隊との渉外係をチーム内から選出しておくのもいいだろう。

個人の所有物 チームメンバーがどれだけの荷物を撤退時に持ってゆけるかについて考えておこう。おそらくほんの少しだろう。持っていけないものは梱包して保存しておくべきだ。

完全撤退

ここでのシナリオはこのようになる。状況は深刻で、もはや活動することは不可能だ。あなたの生命は過度の危険に晒されている。軍隊からもあなた自身の安全のために撤退を求められた。

部分撤退の時の要素に加えて、今度は以下の要素も考慮するべきである。

目標 ここでの目標は残っている全員が撤退することである。

前提 空港は機能していないと仮定しよう。だから空路による脱出の可能性はまずない。となれば陸路での移動となる。紛争当事者はあなたのチームの通行を妨害しないと想定しよう。

交通手段 全員が移動するのに必要な車両を確保しているか？ 燃料は十分あるのか？

交渉と通行許可取得 それぞれの紛争当事者に入念に通知し、無事に通行できるように話をつけておくこと。

機密書類機 密書類は全て出発前に完全に破棄しておくこと。

食料 撤退移動中に十分な食料が全員分あるか？

現金 不測の事態に備えて現金を用意しておくこと。

火災予防

この項目は完全に忘れ去られてしまうことが多々あるので、管理責任のひとつとしてここで述べておく。火災による倉庫やオフィスの消失はあなたの仕事そのものを危うくする。あなたの置かれた状況で活用できる簡単なチェックリストを紹介しよう。

消火器は十分に配置されているか？ 必要な消火器の数はもちろんオフィスや倉庫の大きさによって変る。例えば、二階建ての小さな家であれば各階に2個ずつ、さらに調理場に1個置いておけばよいだろう。消火器は一箇所に固めて設置せず分散しておくことを徹底しよう。いつ中身を詰め替えたかを確認しなさい（各消火器に、詰め替えた日を記入したラベルを貼っておくこと）。一年に一度は点検するか中身を詰め替えるかしよう。誰もが消火器の扱い方を知っているだろうか？ 古くなった消火器を利用し、火災予防訓練などの機会にその使い方をしばしば実演しよう。

もし消火器が入手不可能であれば防火バケツを使用しなさい。砂を入れたものと水を入れたものを用意し、各階の利用しやすい場所に設置すること。



非常口は二ヶ所以上あるか？ 使用可能か？ 障害物があったりカギがかかっていたりしないか？ 非常時に容易にカギを見つけることができるか？ 上層階の人も避難できるか？ 避難用非常階段が外部に設置してあるか？ 非常時に使用する梯子（できれば折りたたみ式梯子）を確保するべきか？

火災避難計画はあるか？ 全てのスタッフが計画内容を知っているか？ 実際に火災避難訓練をしたことがあるか？

警報装置を備えているか、あるいはベルやハンマーで打ち鳴らす金属板などはあるか？

煙報知器を発注すべきか？ 煙報知器は安価で電池式である。

倉庫は耐火性だろうか？ 危険物質や引火性物質は他と分けて保管しているか？ 危険性のある物には別の専用保管施設を確保すべきか？

火災の怖さを喚起するためのポスターを貼ることは効果的だろうか？

以上のような簡単な予防策により、火災が大きな被害をもたらすのを防ぐことができる。消火用機材を十分に持っているかを確認し、それらの使用法を熟知しておきなさい。そして少なくとも半年に一回は火災予防訓練を実施しなさい。

第9章

特殊な状況

この章で述べる状況はそれほどありがちな事ではない。しかしながら過去において人道援助機関の要員が実際に経験したことである。

ここでは二種類の不測の事態について考えてみよう。孤立状態に置かれること（実際に人質となっているわけではないが、敵意を持った人々の中で孤立している状況）と、そして実際に人質になってしまうことである。この二つの状況で生き延びるためのガイドラインを考えてみよう。

孤立状態とは

以下に述べるシナリオは私が1995年に実際に体験したことに基づくものである。我々が滞在していた町に対する攻撃が始まった。航空機から迫撃砲まで、様々な種類の兵器の脅威に我々は直面していた。もはや効果的な活動を続けることは不可能だった。我々のオフィスは町の郊外にあったが、要員の宿舎は街の中心部に位置していた。必要最低限の要員を残して撤退する計画を立てたが、戦局の動きが著しく速かったため結局撤退は不可能となってしまった。この困難な状況に我々がどのようにして立ち向かったのか、いくつかの例を述べよう。

全員が町から郊外のオフィスへ移動した。個人の持ち物とできるだけ多くのベッドも運び込んだ。食料と水はオフィスに備蓄してあったが、さらに現地で買えるだけ調達した。

オフィスには複数のシェルターがあったので、いざという時にすばやく混乱無く移動できるようにそれぞれの要員に個々のシェルターを割り振った。実際にこれらのシェルターで我々は長い時間を過ごすことになった。

町にオフィスを構えている他の機関の要員も加わったので彼らのニーズにも応えなければならなかった。人数はほとんど2倍にまで増えた。町に留まることに恐怖を覚えた現地職員にも場所を提供した。

町の占領をめぐる戦闘が本格化し、防衛していた軍の部隊が後退を始めた。退却中の兵士たちは我々のオフィスに目をつけた。身体への危害はなかったが、個人の衣服と2台の無線機以外の全てのものが彼らによって奪われてしまった。略奪行為は3日間続いた。結局我々は10日間にわたり孤立状態に置かれることになった。

略奪を防ぐために積極的に行動することは問題外であった。そんなことをしても危険が増しただけだろう。略奪行為を止めるように説得は試みたが、彼らは軍事上必要であると主張して略奪を続けた。結局我々は重要な車両と機材の全てを失ってしまった。



孤立状態を耐え抜くには

英雄気取りになってはいけない。あなたにとって重要なものを残してくれるように略奪者を説得しようと努力してみるのももちろん良いことだ（その努力のおかげで2台の無線機は我々の手元に残った）。ただし、このような緊迫した危険な状態では危害を加えられる恐れがあるので、決して強く出過ぎてはいけない。冷静であることが大切である。怒っても何の益にもならず、あなた自身を非常に危険な目に合わせるだけである。

オフィス内に可能な範囲で「安全な場所」を作りなさい。例えば、略奪の最中に全員が集まることができる場所だ。略奪者たちの邪魔をせず、欲しい物を持ち出させなさい。「安全な場所」にできるかぎりバリケードを築きなさい。うまくいくかどうかはわからないがこの場所には手を出さないように相手を説得してみる価値はある。

オフィスに力づくで侵入してくる者に対応する役目の人をひとりかふたりだけ選びなさい。これは非常に困難で危険な任務だ。オフィスの代表がこの役目を引き受けるのは当然だが、助手が必要だ。困難に立ち向かうことができ、過剰反応せず、そして権威を持っているように見える人を選びなさい。

誰もが対応を始めると絶望的で危険な状態になる。「その他大勢」は邪魔をしないように、そしてできるかぎり目立たないようにしなさい。

チームメンバーには何が起きているのかを知らせなさい。怯えている彼らに定期的に情報を与え、説明することにより彼らの不安や恐怖を大いに和らげることができる。もしあなたが代表者として侵入者との交渉で手が一杯ならば、他の者を指名してチームメンバーに対する状況説明というこの重要な任務を肩代わりしてもらいなさい。

酒類はどんなものでも処分してしまいなさい。このような状況下で誰かが酩酊してしまうことは危険すぎる。酩酊状態の人は彼自身だけでなく他のメンバーをも危険に陥れるかもしれない。

現地職員がいない場合が多いので食事を作る担当や日常の雑務担当を割り当てておくとういだろう。

現実の辛さを少しでも軽減するために、要員の気を紛らわす方法を考えなさい。例えば避難計画を考えるチームを作ってもいいだろう。ギターを弾くとか歌を歌うこともよい気晴らしになる。

事前の対策として、招かれざる客が現れる前のある程度の現金を敷地のどこかに隠しておきなさい。もし見つかるとより大きな問題の原因となってしまうため、決して見つからない場所にしなくてはならない。状況が安定してきたら食料を買うためにその現金が必要になる。

無線あるいは衛星電話を使って本部に事実のみを冷静に伝えなさい。状況を過小評価しても誇張してもいけない。本部の担当要員が紛争当事者と交渉し孤立状態を解消するためには、最も確かで信頼できる情報を得る必要があるのだから。

人質として生き延びるためには

人質事件で人質自身や交渉責任者が取るべき行動についてはすでに何冊もの本が書かれている。幸い私自身は人質となった経験はない。したがってここでは専門家の文書や実際に人質になった要員の回想に頼ることにしたい。この項では拉致に関しての彼らからの助言を要約した。

人質となった者が即座に味わうことになる最も困難な問題は、次に何が起るのかを予測できないことから生まれる恐怖感であろう。したがって人質となった直後に生じるだろう問題と状況についてまず知っておこう。さらに

その後に重要となる、あなたを安全に解放するためのプロセスとあなた自身がその中で取るべき態度についても言及しよう。

拉致（誘拐）

拉致の瞬間が最も危険な時である。拉致犯の神経は高ぶっており、犠牲者は一体何が起きているのかを理解していないので最悪の事態になってしまう可能性が常にある。あなたは可能な限り冷静沈着であるべきだ。拉致犯の隠れ家に移送されるときには特に冷静さが必要だ。相手をさらに緊張させることにならないならば、拉致犯に話しかけることを勧める。

拉致されてしまった場合の重要なルールは、逃げる事は考えないこと、である。英雄気取りの行為は神経質になっている経験不足の拉致犯の前では死を招くかも知れない。

拉致された後

囚われの日々は困難で不快なものであることは言うまでもない。それまでの快適であった日常と比較すると一層そう感じるだろう。

拉致されたことへのショックは肉体的にも精神的にも大きな問題となって現れる。思いもよらず捕われてしまった場合、環境の劇的な変化が深刻な心的外傷をもたらす。このような状況下では、被害者の全世界が混沌と混乱に陥ってしまう。拉致者の立場は当然優勢かつ支配的であり、人質は大きな精神的打撃を味わうことになる。

捕われてしまったならば置かれている状況を認識し、拉致者のどんな命令にも従わなければならないことを受け入れるべきである。そして、できるかぎり早い機会に、少しずつ自尊心と自身の尊厳を取り戻すことが重要である。

健康管理

拉致者が何者であろうと、また、いかに住環境が最悪であろうと、肉体的、精神的に健康であろうとする努力を常に行わなければならない。そのためには以下に述べることが重要である。

出された食事がいかにまずくて不快なものでも拒否しないで全て食べることにより、肉体的な健康を維持することがより可能になる。そして、たとえ密室に監禁されていたとしても、運動を日課として行うことが大切である。

精神的な健康状態はあなた自身の個人的な価値観を確認し、守ることにより保つことができる。あなた自身に合った方法で活発に頭を使い続けなさい。

それには意識的に努力することが必要だ。拘束されている者の中には、長い時間をかけて頭の中で作曲したり、詩を書いたり、未払給与のことを考えたり、あるいは理想的な家を設計したりした人たちがいる。将来自由の身になったときに行う活動に心を集中することは精神的な健康に良い。もし筆記用具や書籍などが手に入るなら、それらもかなり役に立つ。このように、いろいろと頭を使う努力をするだけでも精神的な健康の維持に大きな効果がある。

自分を厳しく律することは、現在置かれている環境とそれによって強いられる無活動状態の影響を克服するために最も重要なことである。規則正しい生活を送り、整理整頓を心がけ、清潔さを保つべきである。

拉致者との関係

拉致者たちが全ての面において有利な立場にいるわけではない。彼らにとって人質は宣伝戦の貴重な武器であり、また治安部隊の攻撃を防ぐ方策でもあるかもしれないことを忘れないことだ。さらに人質は彼らの要求を実現するための手段でもある。死んでしまった人質は彼らにとって全く意味のないものなのだ。

複数の要員が人質となってしまった場合にはグループを代弁する者を一人決めることが重要である。そうすることにより人質間の統一見解を前面に出し、人質同士を争わせて分断する機会を拉致者から奪うことができる。

人質と拉致者が同じ問題を共有していると感じる状態が出現することもある。その結果は両者の間の共感の深まりと視点の一体化で、これは「ストックホルム症候群」と呼ばれている。犯罪者によって拘束された人質が治安部隊によって包囲された銀行の金庫に6日間閉じ込められた実際の事件に由来するもので、このとき人質たちは警察を彼らの敵とみなし犯罪者が彼らを守ってくれるものと思い込んでしまったのだ！

交渉

人質を解放するための交渉はあなたの所属する組織の本部の役割である。この交渉が行なわれているということを認識しておくことは非常に重要であり、人質はそのプロセスを邪魔してはいけない。人質にとって最も大切なことは拉致者の巧みな言葉によって自分たちが外の世界から見捨てられてしまっていると信じてしまわないことである。いくつかの特殊な例を除き、人質は拉致者に対し自分自身の解放交渉をするべきではない。また、あなたの所属機関がどのような手を打ってくるかについて拉致者と話し合うべきではない。そのような話し合いは進行中の解放交渉を危うくするだけであろう。

ストレスのもうひとつの要因は自分の家族について人質が抱える心配である。だからこそあなたの所属する機関は人質の家族のことを真剣に考え、家族の気持ちを理解し、あらゆる可能な手段で彼らの支えとならなければならない。

解放

危険の高まるもうひとつの時期は解放が近づいたときである。緊張は人質の見張りの間でも高まるかもしれない。解放の瞬間がきたら細心の注意を払って行動しなければならない。

具体的には

- ・ 拉致者の指示どおりに行動すること。
- ・ 直ちに指示に従うこと。
- ・ 突然動いたり、予想外の行動を取ったりしないこと。
- ・ 油断しないこと。もし事態が悪化してしまったら、急いで逃げ出さねばならないかもしれない。
- ・ 解放の遅れや、期待外れの結果に対する心の準備をしておくこと。

人質として生き延びるためのチェックリスト

積極的に行うべきこと

- ・ 冷静さを保つ。拘束されることを回避できない場合、その状況を受け入れ相手の指示に従う。
- ・ 拘束されたという事実を認識し、状況の変化を心の中で受け入れる。
- ・ 拘束以前に何らかの治療を受けていた場合、拉致者に治療内容を説明する。
- ・ 与えられる食事がたとえ口に合わなくとも受け取り食べる。
- ・ 拘束がおそらくは数ヶ月もの長期にわたることを覚悟する。
- ・ 拉致者から与えられる情報は、内心では懐疑的に受け取る。
- ・ 建設的、肯定的なことを日々積極的に考え続ける。
- ・ 軽い運動など、毎日の日課を計画し実行する。
- ・ たとえ時計を拉致者に取り上げられたとしても、可能な限り正確に時間の経過を記録する。
- ・ 書籍や新聞を読むこと、あるいはラジオを聞くことなどが許可されたときは積極的に利用する。またこちらから依頼する。
- ・ 状況が許す限り、清潔さを保つことを心がけ、十分な洗面・洗濯用具やトイレ施設を求める。
- ・ 可能であれば、拉致者たちと友好的関係を築き、あなたの組織の活動などを説明し、彼らの敬意を得る努力をする。

- ・彼らの大儀に心から共感してしまう誘惑があること、そしてそれが危険であることを十分に意識する。

避けるべき行動

- ・不必要に拉致者を苛立たせること。あなたは拉致者支配下にあるのだから。
- ・政治や宗教的信条などの、論争になりそうな話題についての会話に加わってしまうこと。
- ・極端に悲観的になったり、楽観的になったりすること。
- ・暴力をふるったり、暴言を言ったりすること。
- ・脱出を試みること。
- ・あなたが所属する組織やあなたの家族から見捨てられてしまったと拉致者によって思い込まれること。

第10章

応急処置（ファーストエイド）

紛争中あるいは紛争直後に活動している人道援助機関の要員にとって、重篤な損傷は大きな脅威である。事故に巻き込まれてしまった負傷者をどのように取り扱うかを知っていることは（つまり基礎的な応急処置の原則を知っていることは）、たとえあなたが必要最低限の器材しか持っていないくても生命を救うことにつながる。

応急処置は実践的な技術であることを認識することが重要である。効果的に行うためには実技訓練と、少なくともいくつかの器材は必要だ。この章を読み終えたら自分が十分に準備できているかどうかをよく考えてほしい。重傷者に対する処置の方法を今考えておかないならばそれが必要になったときにも対処できないことになる。

脅威の種類

あなたが紛争地域あるいは非紛争地域のどちらで活動しているかによって、受ける可能性のある傷は異なる。後者では交通事故や落下などによる「鈍的」（衝撃による）外傷が非常に多い。この種の傷についてはまず損傷を防止することが最も重要である。交通事故による死亡原因で最も多いのは頭部損傷であり、高度な治療が可能な医療機関へ救急搬送ができないならばあなたにできることはほとんどない。とは言うものの、人命を救い、さらなる損傷を防止するためにあなたにできる大切なことはある。

紛争地域での損傷には「貫通性」外傷（刺創、銃創、爆発による破片創）、熱傷、および爆風による損傷（地雷、弾薬、手製の爆発物）が非常に多い。地雷と不発弾は紛争終了後も長期間にわたり脅威として残ってしまう。対人地雷は特に足を吹き飛ばすために設計されている。それとは対照的に好奇心の強い子どもが拾ってしまうクラスター爆弾（集束爆弾）の子弾は、上肢と顔面の損傷を引き起こす。あなた自身の安全確保のために、地雷や擬装爆発物（ブービートラップ）の危険性を理解し、それを避けるすべを知っていることが大変に重要である。

戦傷についての研究の結果では、死亡原因の50％は出血によるものであり、回避可能である死因のなかで最も多いものは四肢の損傷部位からの出血である。あなたが以下に述べる簡単な原則に従えば、回避可能な失血死は防ぐことができる。意識障害がある傷病者に対しては気道確保という簡単な措置を行うことで死亡を回避し、高度な治療が受けられるまでの間傷病者の生

命を維持することが可能となる。

あなたが紛争地域で活動していても、自然災害の現場で救援していても、あるいは難民を支援していても、負傷者にとって最大の危機は時間の遅れだ。受傷直後の「黄金の1時間」(ザ・ゴールデン・アワー)は、重傷を負った傷病者の命を救うためのまたとない機会である。したがって、もしあなたが損傷の手当(あなたのスタッフの傷を含めて)を遅らせたくないのなら避難計画は欠かすことができない。

損傷パターン

車両の衝突による損傷パターンは受傷機転を考えてみれば予測することができる。例えば正面衝突、側面衝突、転覆によって一貫した損傷パターンがあり、シートベルトが着用されていたかどうかによってさらに分かれる。シートベルトは頭部及び顔面の損傷(ダッシュボード、フロントガラスとの衝突)、胸部の損傷(ハンドルとの衝突)を大いに軽減することができる。

爆発による損傷の大半は「爆弾」の破片か、爆発によって飛散した瓦礫(ガラス、小石、木片など)によるものである。爆発の近くにいた場合には爆発波による損傷(圧力波が空気を含んだ臓器を損傷させ、肺への大量出血、腸管の穿孔、鼓膜の破裂などを引き起こす)、爆風による損傷(爆発波の直後にヒューという音と共に押し寄せる爆風で、四肢が轢断されることもある)、熱傷、そして倒壊した建物による挫滅外傷などが現れる。

銃創の深刻さはその弾道(頭部の貫通は脚部のそれよりももちろん深刻である)と伝達されたエネルギーの大きさ(ライフルの弾丸はピストルの弾丸よりも大きなエネルギーを放出する)によって異なる。「高伝達エネルギー」による銃創は体内の弾道周囲にも重篤な損傷を生じさせることがある。

防護服(防弾ジャケット)が紛争状態の中で人命を助け、胴体の損傷の割合を大いに軽減することは疑う余地がない。もしあなたが大きな危険に晒されていて防弾ジャケットを貸与されているなら、必ず身につけなさい。

体系的な対応

負傷者を伴う事件・事故には同じ体系的対応をすることができる。現場の統制、そしてACT(Assess = 状況判断、Communicate = 連絡、Triage = トリアージ)である。

- ・まず指揮を取りなさい。そして手持ちの人材を可能な限り効果的に活用しなさい。
- ・さらなる危険が存在するのを見極め必要に応じて生存者(怪我を負

っている者と無傷の者の双方)を安全な場所に移動させなさい。

- あらゆる手段(無線、携帯電話、ドライバー、使い走り)で助けを求めなさい。あなたが伝えなければならない情報は、あなたの正確な位置(Exact location)、事故の種類(Type of incident)、危険要素(Hazards)、現場までの道路状況(Access 道路は封鎖されているか否か?)、犠牲者の数(Number of casualties)、そしてあなたが必要としている緊急対応(and the Emergency response)である。(総称してETHANEという。)
- 次に、犠牲者を治療の優先順位に従いグループ分けしなさい(これがトリアージ)。避難時での優先順位については後で再分類する必要がある。「トリアージ」として知られている簡単なシステムは、訓練された応急処置者であれば誰でも使うことができる。
 - 呼吸が困難な者、出血が多量の者(内出血、外出血を問わず)は最優先に治療を行う。それとは対照的に「歩行可能な負傷者」は最下位の優先順位とする²⁴
 - 資器材が限られている場合、生存の可能性の極めて低い者に対する治療をどこまで行うかについて難しい判断をしなければならないことがある

治療

重症患者の治療もABC法(気道の確保、呼吸の確認、循環の確認)を使うことにより、体系的に行うことができる。

気道の確保、呼吸の確認、循環の確認 (airway, breathing and circulation)

意識障害がある傷病者の場合、最初にするべきことは気道(肺にいたる空気の通路)の確保である。もし気道が異物(食物、義歯、血塊)で塞がれているなら指で異物を除去しなさい。次に傷病者のあご先を挙上し、あごが地面から垂直になるようにしなさい。この姿勢は舌が気道をふさいでしまうことを防ぐ。鈍的外傷がある場合や、あるいは他の理由により脊椎損傷の疑いがある場合にはさらなる損傷を防ぐため、必ず頭部がまっすぐに(鼻が胸骨と一直線上に)なるようにしなさい。意識障害がある傷病者が自発呼吸をしている場合は体を注意深く回して横臥させ、この位置で上側の足の膝を屈曲させて下側の足の前方に置き、安定させなさい(これは「回復体位」と呼ばれる)。そして静かに顎を持ち上げて気道を確保しなさい。この体位ならばもし嘔吐しても窒息することを避けることができる。

24 Triage in Advanced Life Support Group (2002) *Major incident medical management and support*, London, BMJ Publishing.

二番目にすべきことは呼吸が困難であるかどうかを確かめることだ（「呼吸困難な」状態、つまり成人の場合、呼吸数が一分間に20回以上か10回未満である状態）。呼吸の問題については（特別な訓練を受けていない限り）あなたにできることはなにもないが、少なくとも緊急搬送の優先順位が最も高いのは誰なのかを特定することはできる。

最後に、循環の状態は脈拍数を測ることで知ることができる。もし脈拍が速ければ（成人では1分間に100回以上）、重大な外出血あるいは内出血があると考えべきだ。あなたが最初に行わなければならないことは目に見える出血を止めることだ。ほとんどの出血は（例えば包帯などで）圧迫し、損傷した手足を持ち上げることにより止血することができる。四肢からの、圧迫したり持ち上げたりしても止まらない生死に関わる重篤な出血には最後の手段として、間に合わせの止血帯を用いてもよい（例えば、ベルトや他の素材で手足の受傷部位の中枢側をきつく締め付けて血行を止める）。もし、あなたが負傷者に近づいた時に大量の出血を認めたなら、あなたが気道と呼吸状態を調べる間に誰かに創部を包帯で圧迫してもらいなさい。

骨折と熱傷

骨折による出血と痛みは副木により軽減できる。副木は衣類（スカーフ、ベルト、折りたたんだ毛布）と硬い素材（例えば木片など）からその場で作ることができる。損傷した脚が一側なら、もう一方の脚に固定することも可能である。

熱傷の痛みは（清潔な）冷水を受傷部位に10～15分注ぐことで軽減される。しかしながらこの方法は広範囲の熱傷に対しては負傷者の体温を低下させるので避けるべきである。薄いプラスチックのラップ（サンドイッチを包むようなもの）は簡単で効果的な包帯となるが、熱傷部位を強く巻いてはならない。またこの素材で顔面を覆ってはいけない。化学物質による熱傷にも使用してはいけない。

最後に、負傷者が寒がっているのか（その場合には濡れた衣服を取り除き、体を乾かし、毛布でくるむ）、あるいは暑がっているのか（その場合には衣服を脱がすか緩め、水を吹きかけ、団扇などで扇ぐ）を判断しなさい。

心肺蘇生法

患者の呼吸が止まり、心臓の鼓動が停止したならば心肺蘇生法（cardiopulmonary resuscitation:CPR）（または「一次救命処置」）の技能が役に立つ！しかしながらCPRは必要な一連の処置のひとつに過ぎず、除細動器（心臓に電気ショックを与える機器）の使用やさらに高度な処置が必要となる。も

しあなたが遠隔地において高度な医療支援が望めない場合には、患者の生存の可能性は極めて厳しいのが現実である。このような状況下では、蘇生法（人工呼吸及び心臓マッサージ）は最大20分経過しても効果が現れないならば中止するべきだ。

装備品

効果的な応急処置を講じるための基本的な器材は以下のとおりである。

器材	コメント
はさみ	衣服の裁断に使用
大型の応急手当用包帯	出血を伴う外傷用に最低2組
三角巾（70～100cm 四方、三角形に折りたたむ）	副木用に最低2組
プラスチック製手袋	感染防止
ポケットマスク又はフェイスシールド	心肺蘇生を行うときの推奨
止血帯	推奨（代用品でも可、既製品はなお可）

上記の器材を安全かつ効果的に使用するには訓練が必要であることに注意。

第11章

派遣中の健康管理

紛争地域にいる間、可能な限り健康でいることは極めて重要なことだ。だってあなたが志願したのは他の人を助けるためであって、あなた自身が人の重荷となって援助を受けるためではない！この章では数時間であなたを死に至らしめる稀で恐ろしい病気について解説するだけではない。身体が痛み出したり、発熱したり、あなたがしなければならない重要な任務の邪魔をしたりしてしまう可能性を最小限に抑えるための簡単な予防措置についても提案する。

これらの予防措置は当たり前のごとくのように思えるかもしれない。だが、残念ながら多くの人道援助機関の要員が実践していない。何故なら多くの場合、通達から派遣までの期間が短かかったり、他に優先しなければならないことがあったり、あるいは蚊も細菌も事故も平気だというマッコウ気取りでいたりするからだ。

ここに派遣前に何をすべきかについての簡単なリストを挙げる。

予防接種

あなたが現場での任務を与えられる前に必要となるかもしれない全ての予防接種を受けておこう。48時間以内に目的地Xに行け、というような電話を受けた後ではそんな余裕はないだろう。あなたが緊急派遣者リストに載っていたり、派遣される可能性が高かったりするなら、そんな電話がかかってくる前に必要な予防接種を必ず済ませておきなさい。

A型肝炎、B型肝炎、腸チフス、ジフテリア、破傷風、ポリオの予防接種は必須だ。

多くの派遣先では狂犬病の予防接種も必要になる。

事前に考慮する必要がある他の疾病は

- ・黄熱病—サハラ以南のアフリカと中央・南アメリカで見られる（活動現場に派遣される全てのICRC要員は接種が義務づけられている）
- ・髄膜炎—「髄膜炎地帯」は、中央・東・西アフリカと、その他の地域を含む
- ・日本脳炎—危険地域は南・東南アジア
- ・コレラ（効果的な経口コレラワクチンがあり、戦争地域や自然災害の

現場、長期的複合災害の現場の多くでは賢明な予防策であろう)

しかしこのリストは決して全てを網羅しているわけではない。あなたが派遣される可能性のある場所についての専門家のアドバイスを可能な限り早めに得なさい(参考になるウェブサイトを章の終わりに記す)。

救急キット、備品、機器

多くの組織が適切な救急キットを用意してくれるがあなた自身が購入するように助言する組織もある。もし必要な備品や器機を支給されないのなら次のものを持ってゆくと良い。

- ・ **マラリア予防** 最も重要なものは殺虫剤塗布済の蚊帳(ペルメトリン[合成ピレトリン殺虫剤]が一般的に使用されている)、DEETを主成分とする虫除け剤、マラリア予防薬、マラリア自己治療キット(Malaria standby treatment kit)



- ・ **下痢の治療** 数袋の経口補水塩(oral re-hydration salt: ORS)、ロペラミド錠(イモディウム)、そして250mgまたは500mgのシプロフロキサシン錠を持ってゆこう。さらに汚染された水を飲まないための浄水タブレットを携行しよう。

- ・ **血液による感染症の予防** 発展途上国にゆく要員には、注射器、滅菌した針とその他の基本的な備品のキットは欠かせない。もしあなたがB型肝炎とHIVが蔓延し、血液の供給が当てにならない地域（例えば、サハラとサハラ以南のアフリカ）を、車両あるいは小型の飛行機で広範囲に移動する場合は点滴液の含まれたキットを持ってゆくことを考慮しよう。
- ・ **一般的な医薬品** もしあなたが信頼できる医療機関から遠く離れなければならず、現地における医薬品の供給も不安定で当てにならないならば、一般的な医薬品のキットを念のために持っていくことが賢明だ。このキットには医療専門家が推奨する広域スペクトルの抗生物質と、どんなときに使用すべきで、どんなときに使用してはいけないかという、詳細な説明が必要である。

派遣前に必要なその他の準備

- ・ 最新かつ包括契約の海外旅行傷害保険に加入すること
- ・ もし重大な健康問題（糖尿病、高血圧、再発性あるいは深刻な鬱病または精神不安など）を抱えているか、あるいは過去1年間に健康診断を受けていないならば渡航医学の専門医による健康診断を早急に受けること（ICRC要員は派遣前の健康診断が義務づけられている）
- ・ もし深刻なアレルギー体質（アナフィラキシー）であるならば2個のエピネフリン（アドレナリン）自己注射キットを持参し、常に1個は使えるようにしておくこと
- ・ 喘息を患っているなら2個の吸入器を持ってゆくこと。これも常に1個は使えるようにしておくこと
- ・ 定期的に薬を服用しているなら十分な量の薬と、医師によって署名・捺印されたリスト（投薬量と服用回数も明記したもの）を持参すること
- ・ HIV/AIDSの蔓延地域で患者に直接に触れる医療活動を行うなら明確な使用法が添付された曝露後予防薬（post-exposure prophylaxis：PEP）が直ちに手に入るようにしておくこと

感染症、寄生虫、咬傷の治療

感染症、寄生虫症及び咬傷は悪化することがあるので適切な治療が大切である。

マラリア

古いことわざにあるように「わずかな予防は万（よろず）の治療にまさる」。これは間違いなくマラリアにも当てはまる。

もしあなたがマラリア流行地域にいるなら以下の対策が必須である。

- ・マラリア予防薬（化学的予防法）を持参すること
- ・DEETを主成分とする虫除けを使うこと
- ・殺虫剤が塗布された蚊帳の中で眠ること
- ・夕暮れの1時間前から皮膚を可能な限り覆うこと
- ・マラリア自己治療キットを持ってゆくこと

あなたが全ての予防措置を講じたとしてもマラリアに感染することがある。信頼できる医療施設まで8時間以上かかる所に行く場合は、マラリア自己治療キットを持ってゆきなさい。もし発熱、発汗、悪寒、ひどい頭痛その他のマラリアと思われる症状が出たら、信頼できる医師あるいは検査機関による検査を可能な限り早く受けなさい。もし検査が不可能であったり、信頼できる検査結果ではないと思ったり、あるいは適切な治療を受けることができないときは症状が出始めてから8－12時間以内に自己治療を開始しなさい。いずれの場合でも速やかに、信頼できる医師や医療関係者に診てもらわなければならない。マラリアによる死者の数は戦争による死者の数を上回るのだから。

デング熱

これもまた蚊が媒介する疾患で、驚くべき速さで進行する。このインフルエンザに似た疾患は（ヤブ蚊属の）ヒトスジシマ蚊によって広められるもので、日中、特に日没前の2時間に咬まれる傾向がある。デング熱は南アメリカ、カリブ海諸国、太平洋の島々、南・東南アジア、そして一部の東アフリカの都市部及び地方でよく見られる。典型的な症状は高熱、激しい頭痛、筋肉や背中の痛みなどで全身の倦怠感を伴う。医師による血液検査（マラリア検査で用いられる血液の塗抹標本をも含む）を受けた後、安静にし、多量の水分を取りじっと耐えなさい。治療法はないが（訳者補足：対症療法が中心）もし（まれではあるが）、合併症が起きたときには医療専門家による治療が生命を救うカギとなる。

ウイルス性出血熱

ラッサ熱、エボラ出血熱、とマールブルグ病がこれらの稀な疾病の中でも良く知られているものだ。西アフリカの農村地帯ではラッサ熱が恒常的に発生している。ほとんどのウイルス性出血熱は感染者との密接な接触によって広がるが、蚊やダニに媒介されるものもある。もしあなたが流行地域に派遣されるなら専門家のアドバイスを受ける必要がある。効果的な治療方法はない。ラッサ熱、エボラ出血熱とマールブルグ病を予防する方法は感染症例との接触を避けることだけである。

肺炎と呼吸器感染症

これらの疾患はストレスのあるときや疲労しているとき、過密状態で生活しているときに特に発生しやすい。症状は通常は明確で、咳、息切れ、発熱、ときには深呼吸をしたときに感じる痛みである。これらの症状があるなら、あなたはできるだけ早く信頼できる医者からの診断を受けるべきだ。効果的な抗生物質の投与による適時の治療で通常は早期回復が可能になる。適切な治療法としてはアモキシシリン 500mg またはアモキシシリン・クラブラネート（オーグメンチン）625mg を 8 時間毎に 1 週間服用する。もしあなたがペニシリンに対するアレルギーを持っているなら、エリスロマイシン 500mg を 1 日 4 回、1 週間服用する。あなたの派遣先の国に鳥インフルエンザを含むインフルエンザ、あるいは SARS（Severe Acute Respiratory Syndrome 重症急性呼吸器症候群）感染の危険があるなら、公式なガイドラインに注意深く従いなさい。

皮膚と創傷感染

気温の高い地域では僅かな切り傷や擦り傷、咬み傷、その他の傷が短時間で感染してしまうことがある。シカトリン（ネオマイシン/バシトラシン）などの殺菌クリームや粉薬を使いなさい。蜂窩織炎は感染部位から広がったり、足やつま先から中枢側に進行する、皮膚が熱をもって発赤したもので極めて急速に進行する。医師の指導のもと、例えばアモキシシリン 500mg を 8 時間毎、あるいはペニシリンアレルギーの場合はエリスロマイシン 500mg を 1 日 4 回など、多量の抗生剤投与を即座に始めなさい。どの抗生物質も少なくとも 1 週間は服用する必要がある。いずれの場合にも行動を起こす前に信頼できる医師のアドバイスを受けなさい。自己治療を行うのは医師の診断を受けることが不可能な場合だけである。

犬や他の動物による咬傷

石鹸と水で咬傷を徹底的に洗浄しなさい。医師あるいは信頼できる医療従事者に診てもらいなさい。これらの咬傷はしばしば感染するので感染が明らかでなくても、原則として抗生物質による治療を開始するべきだ。傷は通常は縫合せずに自然に治癒させるべきだ。破傷風に対して免疫のある状態にしておきなさい（つまり過去に 3 回のワクチン接種を行い、その後 10 年毎に追加接種を受けること）。もし受けていなければすぐに破傷風の追加接種をする必要がある。

さらに、狂犬病の予防接種も済ませていることが望ましい（初回 3 回のワクチン接種の後、3 年毎に追加接種をする）。もし狂犬病の予防接種による免疫有効期限が切れていたり、期限が不確かであったりするならば、抗狂犬病ヒト免疫グロブリン（HRIG Human rabies immunoglobulin）をあなたは早急に手に入れる必要がある。HRIG の入手が首都でさえ困難な国もある。

それが人道援助機関で働く要員に狂犬病の予防接種をきちんとしておくことを推奨する理由のひとつである。すでに予防接種をしているなら、以前と同じあるいは同等のワクチンを出国前に2回接種するだけでよい。1回目は可能な限り速やかに、2回目は3日後から1週間後に接種しなさい。

急性下痢症

急性の下痢は生命にかかわるようなものではないが、みなさん良くご存知のように、体を自由に動かせなくなってしまうこともある。水分を十分取りなさい。1回トイレに行くたびにコップ1杯の水を飲むか経口補水塩を使用する、あるいはあなた自身で作ったもの（小さじ8杯の砂糖と1杯の塩を1リットルの清潔な水に混ぜる）を飲みなさい。もし下痢が続くようであれば下痢治療キットを使用するか、ロペラミド（イモディウムまたはアレット）をまず2錠服用し、その後1時間毎に1錠を服用しなさい。ただし赤痢（出血性下痢）の疑いのある場合は服用してはならない。ロペラミドは下痢を止めるが治療薬ではない。500mgのシプロフロキサシン（シプロ）を1回服用するとよいだろう。この抗生物質はほとんどの旅行者下痢症を治療することができる。もしあなたの症状が長くひどい場合や、赤痢の疑い（血便と高熱）がある場合には、シプロ500mgを3日間毎日服用しなさい。日増しに弱ってきたり、嘔吐が続いたり血便が出たりするときは医師の診断を受けなさい。サラダを食べず、調理したての暖かい食べ物だけを食べて、しっかり瓶詰めされた水か沸騰あるいはヨ一素錠剤や塩素錠剤で殺菌された水だけを飲むようにすれば多くの下痢は避けることができる。

熱病

熱帯地域での高熱（例えば39℃以上）は常に重大なことだと認識しなければならない。特にあなたがマラリア発生地域にいる場合や、過去数週間のうちに発生地域に滞在していた場合には特にそうである。もし高熱が続いたり、ひどくなったりすれば必ず医師の診断を仰ぎなさい。発熱の原因となる重要な疾患には以下のものがある。髄膜炎（激しい頭痛、頸部硬直、加えて、触っても消えない発疹をしばしば伴う）、ビルハルツ病のような住血吸虫症（マラウィ湖のようにビルハルツ住血吸虫が生息するような地域で水泳をしてから20日以上後に生じる熱で、しばしば喘鳴と痒みを伴う）、腎臓の感染症や腎盂腎炎（腰腹部の痛み、しばしば吐き気や悪寒戦慄を伴い、通常は頻尿となって排尿時にひりひりするような痛みを感じる）、腸チフス（持続的な高熱と体調の悪化が起き、マラリア治療では好転せず、通常は下痢を伴ない、咳やかすかな発疹が出る場合もある）、敗血症（悪寒と発汗が交互に現れ、感染した咬傷や腫れ物のような皮膚感染症がしばしば認められたり、あるいは足が感染のために熱くなっていたりする）。

極度の気候

高山病、低体温症、熱射病は危険なものとなり得る。

高所

高度 2,500m-3,000m 以上で発病する高山病に注意しよう。このような高さ以上に登ったり移動したりするときには、最初の 1～2 日を身体を慣らすために使いなさい。3,000m 以上を登るときには、毎晩、前日より 300m だけ高い場所で宿泊するように心がけるべきだ。十分な水分を摂りなさい。高山病の症状の防止や治療のために、アセタゾラミド製剤（Diamox ダイアモックス利尿剤）を服用することを考慮するとよい。もし休憩中にも息が切れる、咳が止まらない、激しい頭痛が続く、眠気がするなどの症状が現れたら可能な限り速やかに低い場所に降りなさい。

低温

低体温症は、寒い気候、高地、強風、身体や衣服の濡れなどの組み合わせにより急速に発病する。防ぐためにはゆったりとした服を重ね着し、外側に防水加工のものを着て、頭と首、手を覆いなさい。バディシステムを作って、誰もが互いの面倒を見られるようにしなさい。危険な兆候は極度の寒気、震え、眠気と錯乱状態だ。もしこのような兆候があなたや仲間に見れたなら、直ちに身体を温めなさい。暖かい甘味飲料を飲んだり、寝袋に入り暖かさを共有したり、40℃以下の湯の風呂に浸かったりするとよい。凍傷の兆候をチェックしなさい（しばしば手や足に現れる痛みや無感覚で、皮膚が岩のように硬く感じられ、青白くなっていたりあるいは紫色がかっていたりする）。アルコールを飲んではいけない。

高温

気温の高いところで活動していると、あなたの身体の体温調整機能（発汗作用を含む）が損なわれ、熱射病や日射病を発症するリスクが出てくる。体温が 39℃以上になり熱っぽく感じ、のどが渇き、脈拍が上昇し、気分が悪くなり、頭が混乱する。直ちに涼しい場所に移動し、可能であれば冷たい飲み物を飲み、スポンジで身体を湿し、扇ぐかあるいは冷水を身体にかけて熱気を蒸発させなさい。緊急事態の可能性があるので医師の診断を受けなさい。

事故を回避する方法

事故は起こる。しかし多くの場合回避できる。

交通事故

交通事故は正確に言えば「回避できる事故」だ。紛争以外の他のどんな原因よりも、あなたがボディバッグ（遺体収容袋）に収容されて帰国する原因となる可能性が高い。前に述べた四輪駆動車についてのアドバイスと共に、以下の事柄に注意しなさい。

- ・飲酒後及び向精神薬（「気晴らし」薬）摂取後は絶対に運転してはならない
- ・あなた自身が長時間運転するときには、事前に十分な睡眠を取っておきなさい
- ・もし可能であれば同乗者を確保し、運転を交代しなさい
- ・夜間の運転は避けなさい
- ・たとえ大統領や首席補佐官が目的地であなただを待っていようとも、賢明な速度を保ちなさい
- ・前部座席でも後部座席でも、そしてどんなに短い距離でも、シートベルトを必ず締めなさい
- ・使用する車両が適切に整備され、定期的に点検修理されているように心がけなさい
- ・あなたのドライバーを注意深く選びそして徹底的に訓練しなさい
- ・救急キット、皮手袋、懐中電灯と予備の電池を車両に備え付けておきなさい
- ・バイクを運転するときはヘルメットを着用しなさい

もしあなたが発展途上国で事故に会い負傷した場合には、生命にかかわる状況以外は輸血を拒びなさい。

以上のルールは自明のことだが、何か他に重要なことがあると無視してしまうことがあまりに多い。

任務中に道路の（ひどい）舗装やぬかるみ、穴などを無事に走り抜けたからといってその後の休暇中に気を抜いてはいけない。

遊泳

飲酒後に泳いだりダイビングしたりしてはいけない。海辺では危険な潮流、引き波（底流）、毒をもった生物の生息する場所、鱐、鮫に注意しよう。あなたが水泳に自信がなければ、背の立つところより深いところに行ってはいけない。沖合いでウォータースポーツやゴムボート使用時には救命胴衣を着用しなさい。滑りやすいプールサイドでは絶対に走ってはいけないし、濁った水や深さのわからないプールに飛び込んでもいけない。

宿舎とオフィス

初めて宿舎を使うときやあるいは新しい環境で活動を開始するときには、危険要素が存在していないかを常識とあなた自身の考えで判断しなさい。例えば剥き出しになっている電線、滑りやすい場所、転倒しやすい場所、ラベルのはがれたビンや内容物のわからないビン、水の容器にびったりだが殺虫剤が入っていたかもしれないものや蚊の発生源になっているものなどだ。火災や火傷の危険についても注意しよう。覆いのないストーブや暖炉、調理鍋など、十分な換気装置のない場所での炭火の使用（窒息・酸欠の危険性）などである。

あなたの休暇中、特に酒を飲んだ後にホテルのバルコニーにもたれかかってはいけない！ もしかするとあなたの体重を支えるには弱すぎるかもしれない。深酒は多重危険因子であり、あなたやあなたの友人を死に至らしめる交通事故から、必要な予防措置を忘れて HIV に感染してしまうことまで様々な危険を呼ぶ。

最後に、あなたの任務が終了する時点で（あるいは任務終了後に）、あなたが予想していた以上にストレスを感じているなら個人的なディブリーフィングかカウンセリングを受けるべきだ。それは決して軟弱な行動ではなく、賢明な決断である。そうすることがあなたをより早く現場に復帰させることにもなる。もちろんちゃんとした休暇を過ごした後のことだが。賢明な救援活動従事者は、疲れきったまま、あるいは前回の任務のストレスをためたまま、新しい任務を開始したりはしない。

私はこの章を終えるにあたり、あなたに「幸運を」ではなく「気をつけて」と言おう。

参考になるウェブサイト

www.fco.gov.uk/travel

British Foreign & Commonwealth Office の旅行についてのウェブサイト

www.fitfortravel.nhs.uk

旅行と健康についての英国（UK）の良くできた保健サービスウェブサイト

www.cdc.gov/travel

旅行と健康についての米国（US）の公式ウェブサイト

www.interhealth.org.uk

インターヘルスウェブサイトには役に立つ情報があり、旅行に必要な健康

関連製品をカタログからオンラインショッピングできる

www.tropimed.com

Tropimed は旅行に必要な医薬品の最新情報を提供している（ICRC の顧客番号とパスワードが必要）

www.safetravel.ch

スイスのフランス語ウェブサイトで、旅行者の健康維持に関する情報が得られる

第12章

通信

私はかつて2年間ほど無線の専門家として活動したことがある。とはいえ、もしこの章で専門的過ぎることを述べれば、あなたは読もうとしないだろうことは十分に理解している。したがって、これから述べることは専門的ではないこと、また簡潔であることを約束しよう！

あなたは情熱にあふれて現場に到着し、活動を開始しようとしている。到着前には、馴染みのない四輪駆動車と同様に、無線機の基本的な使用法についても学んだかもしれない。それは無線機のスイッチの入れ方と切り方くらいであることが多い。もちろんそれも大切なことなのだが・・・もし訓練中に時間があつたならば、貸与される無線機の最も効果的な使用法についても教えてもらった可能性がある。しかし、短期間に次から次へ与えられる課題や情報で頭の中が一杯になり、無線交信における重要なポイントを見落とし、てしまいがちである。

まず一般論から始めよう。

- ・人道援助機関は、高性能で信頼できる機材が可能にする効果的な通信手段を安全対策の一環であると考えべきである。そのこと自体が安全を約束するものではないが、もしあなたが安全確保にかかわる事件や脅威となるものについて、基地局や現場にいる他の要員と効果的に交信できるならば明らかにあなたの安全性を高めることができる。
- ・通信機材を使用する前に話す内容を考えておくことが賢明だ。もし書きとめることがあなたの役に立つなら、交信内容のキーポイントを事前にメモしておこう。時間の節約になり、より明確に話すことができるようになる。最悪なのは誰かが無線交信で取り留めのないことを長々としゃべり続け、結局は大した内容じゃなかった、なんてことだ。常に覚えておいて欲しいことは、生命に関わる緊急のメッセージを誰かが送る必要があるかもしれない、ということだ。そんなときにあなたが通信チャンネルを独占していたらそれは不可能というものだ！
- ・小型の携帯無線機、SATCOM (Satellite communications system衛星通信)、携帯電話などは魅力的で高価な品物だ。盗難に注意しよう。できるならあなたの機材を厳重に保管するかあるいは隠しておこう。
- ・あなたが貸与されるだろう通信手段を使って話すことは、決して盗聴から保護されてはいないことに注意しよう。誰かが無線交信を傍受していると考えておくほうが賢明だ。ここでも話す前に良く考えなさい。もし内容が取り扱いに注意しなければならない情報であれば、交信は

控えるか少なくとも傍受のもたらす危険を意識しながら話さない。

次に、現場で使うことになる主な通信機材について述べよう。そのうちの2つは通常のVHF (very high frequency) とHF (high frequency) の無線機である。それにSATCOM (衛星通信) あるいは衛星電話が加わる。また、危機管理の観点から携帯電話とインターネットについても述べてみよう。

個々のメーカーやタイプについての説明は避け、それぞれの機材の一般的な使用法について述べる。では一つ一つ見てゆこう。

VHF 無線

VHF 無線機は現場で日々使用される基本的な機材である。あなたの安全を確保するために重要であり、その使用法は極めて簡単である。が、その反面、間違っ使用してしまうことも多く、十分に活用できなくなる可能性も高い。

VHF 無線活用のコツ

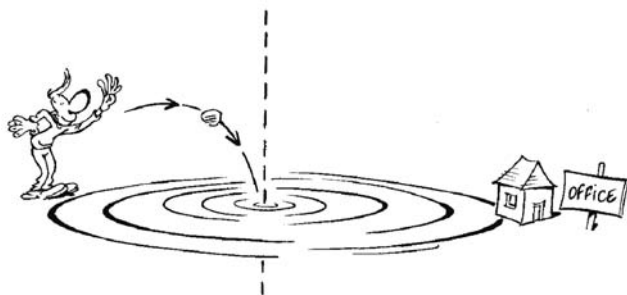
VHF の無線波は直進する。双眼鏡を使ってあなたが乗車している車両から遠くにあるオフィスを見ていると仮定しよう。無線波は手元の無線機から、ちょうど双眼鏡の視線と同じような軌跡を描いて伝わっていく。もしオフィスが見えるなら、あなたはオフィスと無線交信することができる。途中で森や山があればオフィスを見ることが出来ない。同様に、真っ直ぐに飛ぶ無線波では交信できないことになる。

樹木や森、家屋、高圧線の鉄塔などの障害物はVHF無線波の直進を妨げ、無線波を完全に吸収してしまうか屈折させてしまう。交信状態を改善するためには、少し高い位置に移動し、途中で障害がない場所から再度交信してみるとよい。

当然のことながら距離も重要な要素である。VHF波はアンテナから発信されると、ちょうど池に石を投げ入れた時にできる波紋のように周囲に広がっていく。距離が長くなればなるほど無線波は弱くなる。機種によっては無線波をより遠くに飛ばすことができる。あなたの地域で活動を行いながら、どれくらいの距離なら無線交信が可能かを実際にあちこちで試して、確認しておくとい。

無線アンテナ

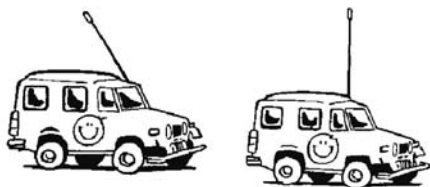
VHF無線のアンテナは常に垂直になっていなければならない。なぜかって？石を投げ込まれた池の例を思い出して欲しい。下の絵を見れば専門家でなくともわかるだろう。



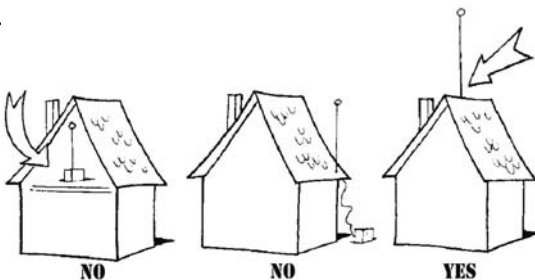
ご覧のように無線波はアンテナに対して水平方向の平面上に広がっていく。もしアンテナが後ろに傾いていたなら、あなたは良好な無線信号を火星に送っているかもしれないがそれはあなたのオフィスに届くことはない。



あなたが次回現場に行ったときに回りの車両を見渡して、一体何台の車が後方に傾斜した空気力学的なアンテナをつけているか見てみると良い。確かに見た目はクールだが、だからといってクールな交信ができるわけではない。全てのアンテナは垂直でなければならない。



当然のことながら、同じことがあなたのオフィスに設置するVHFアンテナについても言える。アンテナは必ず垂直に立て、すでに述べたように、屋根の一番高いところで周囲に障害物のない場所に設

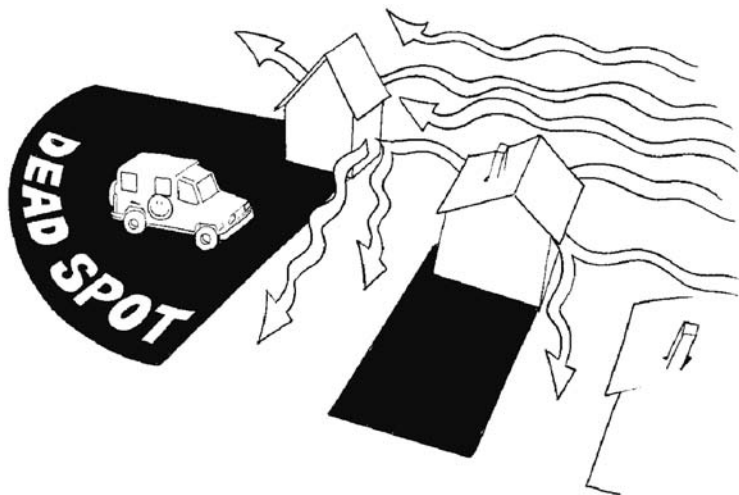


置しなさい。また屋根裏部屋などではなく外部に取り付けなさい。私は一度、波型鉄板製の屋根の下に設置してあるアンテナを見たことがあるが、もちろんVHF無線波は即座に妨げられてしまう。金属製の屋根で無線波はしっかり反射され、内部で飛び跳ねるだけで、建物の外には出られなかったのだ！「こんな無線機は使い物にならない！」と誰もが文句を言っていたが、翌日にはそんなことを言うひとは一人もいなくなった。アンテナが外部に移動され、初めて長距離での無線交信が可能になったからだ。

デッド・スポット（受信困難地域）

「かなり専門的になってきたな」というあなたのぼやき声が私には聞こえてくる。とんでもない！デッド・スポットはVHFでは良く知られた現象である。無線波は軌道上にある障害物によって本来の方向と違った方向に屈折してしまうため、いままで感度良好だった無線交信が突然に途絶えてしまったり、音声はひずんだり、途切れ途切れになったりすることがある。何度も交信を試みても一向に改善されない。その理由はあなたか、あなたが交信している相手が位置を変え、双方の間に障害物が現れてしまったからである。無線波が周辺の障害物により屈折させられたり弱められたりしてあなたに届かなくなったのだ。つまり、あなたは今、かの悪名高きデッド・スポットに入っているのだ。

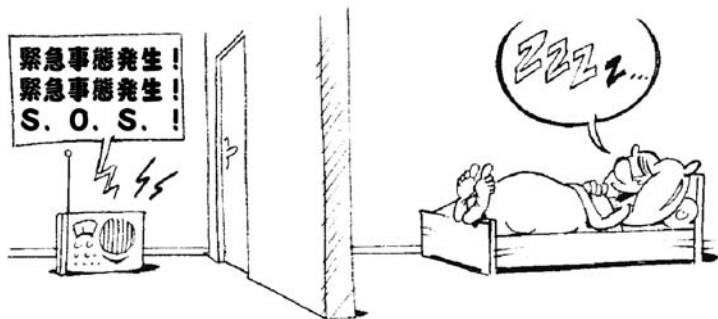
解決策は単に少し移動して再度交信することだ。たった数フィート位置を変えるだけで時には劇的な変化があることに、あなたは驚くことだろう。



架線や鉄塔 電線を通る電気は、架線や鉄塔を無線波を放射するアンテナにしてしまうので音声をひずませるなど、送受信に悪影響を及ぼす。電線から離れて再度交信してみるとよい。



宿舎での無線機 もし夜間の緊急時に対応するために無線機を宿舎に持ち帰らなければならないときには、廊下などに置かずに、ベッドのすぐ横に置いておくことを忘れないように。遠くに置いたら聞こえなくなるので。



HF 無線

ここでHF無線機について言うべきことはほとんどない。なぜかって？正しく使えば良い結果が得られるVHF無線機と違い、HF無線は運（神）任せといった感があるからだ。HF無線は長距離の交信のために作られたもので、上空に向かって発信された無線波は帯電している電離層（イオン層）で跳ね返り、はるかかなたの地表に届く。

無線波を発した場所と跳ね返って地表に戻ってきた場所との間に横たわる地帯では全く交信ができない。これがHF無線交信における「跳躍距離（スキップディスタンス）」と呼ばれるもので、そこは無線交信が事実上不可能なデッド・スペースとなる。

交信状態の良し悪しはいくつかの要因によって左右されるが、そのほとんどはあなた自身で調整することが不可能である。

太陽黒点などの自然現象は無線交信に重大な影響を及ぼす。が、黒点について我々にできることはない。あなたに割り当てられた周波数での交信は一日のうちにも良好になったりほとんど不可能になったりする。日中の方が夜間より状態が良いかもしれないが、それについてもあなたにコントロールできることはほとんどない。これらの問題への対応として、時間帯によって違う周波数を使うように言われることもある。もしあなたのHF無線機にアンテナを同調する機能がついているなら常に使いなさい。どうすればいいのかわ知っている人に訊ねるとよい。この機能を使えば無線機とアンテナがマッチし、より良い交信が可能となる。アンテナが全く同調されていなければ、送信機は事実上機能せず、受信も不可能となり、交信できなくなる。



HFでの無線交信は上の問題点があるためフラストレーションがたまることがある。だがあまり気にしないことだ。すでに述べたように、基本的にはあなたにどうこうできる問題ではないのだから。「何度も繰り返し試みること！」これが私に言える最善の助言である。もしどうしても交信できなかつたら、あなたのメッセージを中継してくれる他の無線局や移動無線局を利用しよう。

衛星通信機器

衛星通信機器 (SATCOM) は使い方が簡単である。送信された信号は通信衛星によって反射され、地上の受信機に届くかあるいは中継局に届いて再送信される。あなたの SATCOM が良好に送受信できる地上の範囲は「フットプリント (通信衛星の電波到達範囲)」と呼ばれている。あなたが前に派遣されたときに使用したある特定の SATCOM が素晴らしく機能していたからといって、世界のほかの地域でもそうなるとは限らないことに注意しよう。「フットプリント」が全く違うかもしれないからだ。だから、あなたに機材を貸与する通信の専門家の言うとおりにしなさい。彼らはどの機種がどこで機能し、あなたが何を必要としているかを知っている。

SATCOM の最も重要な特徴は長距離の通信が保障されることだが、近距離交信においては VHF 無線機が依然として最も経済的で実用的な選択肢だ。さらに、紛争地域における衛星電話通信の増加に伴い、複数の同時通信が衛星チャンネルの容量を超えてしまう可能性があることを、あなたは知っておくべきだ。したがって、衛星通信はそれだけで完結した安全なネットワークではなく、むしろ HF や VHF ネットワークを補完するものとして捉えるべきである。

現代の SATCOM には GPS (Global Positioning System 全地球測位システム) 情報の自動送信機能が組み込まれていることがある。言い換えれば、

あなたの交信をモニター（監視）している者は誰でもあなたの正確な地理的位置を確定することができている。この機能はあなたにとって危機管理上のリスクとなり得ることに注意しよう。あなたの交信相手が彼らの詳細な位置を暴露したと言って、あなたを非難してくる可能性もある。微妙な問題の存在する地域では SATCOM はむしろあなたの基地に置いてきたほうが良いかもしれない。

SATCOM は 2 地点間の交信のみ可能で、同時に複数の受信機に送信することはできないことを忘れないように。

携帯電話

携帯電話は今では人道援助機関の要員の最もお気に入りの通信手段である。それには大きな理由がある。使い方が簡単で、VHF や HF の持つ問題なしに交信することができ、GSM (Global system for mobile communication = 汎ヨーロッパデジタル移動通信システム) のおかげであなたの携帯電話は世界の広範囲の地域で使うことができるからだ。あなたの携帯からの e-メールへのアクセスはもうひとつの魅力だ。

携帯電話は全て良いことばかりではなく、不都合な面もいくつかある。ある地域では使用料、とりわけ国際通話料が高い。また、特に都市部では通信可能範囲が広く送受信が良好だが、地方に行くと悪化したり不可能になったりする。さらに、もしあなたの携帯電話がその地域のシステムと合わない場合には、新たに SIM (Subscriber Identity Module) カードか電話そのものを購入しなければならない。

加えて、あなたが考慮すべき、安全にかかわるいくつかの弱点がある。

- ・災害の現場やあるいは戦争で荒廃した地域では携帯電話ネットワークが破壊されているか、損傷されているかもしれない。このような場合には携帯電話での通話は不可能か、あるいは可能であったとしても頼りにならない。
- ・緊急事態では携帯電話回線は多数の人が通話を試みるためパンクしがちで、利用できなくなることがある。
- ・現地当局は携帯電話システムを規制することができ、停止することも可能である
- ・現地当局はいかなる通話も傍受することができる（あなたが使用するその他の通信手段と同様に、携帯電話でも情報の機密性はないと考えるべきだ）。
- ・携帯電話機そのものが泥棒にとっては魅力的な品物だ。
- ・携帯電話の魅力的な最新のセールスポイント（カメラとビデオ録画機

能) はあなたをトラブルに巻き込むかもしれない。カメラの使用についてのセクションで述べたが、それらの機能が組み込まれているだけであなたの意図が誤解されてしまう可能性がある。それらの機能の存在があなたに不利なように利用されることもあり得る。つまり、スパイ活動のための小道具となる可能性があるということだ。そんな新しい機能が付いていない単純な携帯電話を使うことによって、誤解や非難を避けなさい。

- あなたがVHF無線ネットで交信しているときには、交信可能な範囲にいる全ての同僚があなたの話を聞くことができる。これは「オール・インフォームド・ラジオ・ネット（全員に伝達できる無線網）」と呼ばれている。しかしながら、携帯電話で通話するときには通常は一对一の会話になる。ということはこれもまた、危機管理に影響を与えることは推察できるだろう（例えば、事件が起こり、あなたが他の要員に情報を流そうとするとき、あるいはその地域を避けるように伝えようとするとき）。

インターネットとコンピューター

昨今では我々は、インターネットや他のコンピュータネットワークを利用して、友達や組織と連絡をしている。このシステムの便利な点は誰もが知っている。ここでは危機管理の観点から、その使用に際しての以下の危険性を強調したい。

- 前述したすべてのシステム同様に、情報の機密性はない。
- 活動などに関する事柄をあなたの宿舎から直接に所属組織にインターネットで連絡するときは気をつけよう。うっかりして間違った部署に連絡したり、指揮系統を飛び越したりするかもしれないからだ。これもあなたの安全に影響する可能性がある。だから決められた指揮系統を守って連絡する方がよい。
そうすれば関係者全員が何が起きているかを知ることができる。
- あなたのコンピューターは心ない泥棒の注目の的になる。単にハードウェアを盗むだけかもしれない。あるいはもっと巧妙な手口を使うかもしれない。あなたがいない隙に、小さなUSB（Universal Serial Bus）メモリ（大容量のものが最近はある）を差込み、莫大な量の情報を簡単にほとんど瞬時にダウンロードすることができる。パソコンを使わないときは部屋に鍵をかけるか、パソコンを鍵のかかる場所に入れておきなさい。もしUSBメモリを使ってハードディスクのバックアップをしているならば、USBメモリに対しても同様の保安管理を行おう。

表音文字

表音文字は交信状態が悪いときに重要な情報を伝える場面や、難しい地名や人名の綴りを言わなければならない場面で一般的に使われる。もちろん、あなた独自の無線用アルファベットを使ってもかまわない。交信者同士が理解している限りは害はないだろうし、なかなか面白いかもしれない。ともあれ、もしあなたが標準タイプを使いたいのなら、これがそうだ。

A: Alpha

B: Bravo

C: Charlie

D: Delta

E: Echo

F: Foxtrot

G: Golf

H: Hotel

I: India

J: Juliet

K: Kilo

L: Lima

M: Mike

N: November

O: Oscar

P: Papa

Q: Quebec

R: Romeo

S: Sierra

T: Tango

U: Uniform

V: Victor

W: Whiskey

X: X-Ray

Y: Yankee

Z: Zulu

NOTES

NOTES

NOTES

NOTES

Staying Alive ステイング・アライブ

発行年月日	2008年6月30日
編集・発行	名古屋第二赤十字病院国際医療救援部
印刷	長屋印刷株式会社

使命（任務）

赤十字国際委員会（ICRC）は公平、中立、独立を基本原則とする機関で、人道的な目的に限られたその使命は、戦争及び国内騒乱の犠牲者の生命と尊厳を保護し、彼らに必要な援助を提供することである。赤十字国際委員会は紛争状況下で実施される国際的援助活動を指揮・調整する。さらに、赤十字国際委員会は人道法及び普遍的な人道の原則を普及・強化することにより、人々の苦しみを防ぐ努力を怠らない。1863年に創設された赤十字国際委員会は、国際赤十字・赤新月運動の起源である。

本書 **STAYING ALIVE** は、紛争地域での活動に従事している人道援助機関の要員に、安全確保と危機管理についての専門的な助言を提供するものである。

著者のデビッド・ロイド・ロバーツ氏は、軍人としての、そして人道援助機関の要員としての、その双方の立場で紛争を体験してきた。この著書は、彼の貴重で多様な経験に基づいている。

あなたの安全を脅かす様々な危険を説明することにより、この本は現場における安全確保と危機管理の方法をわかりやすく提示している。

もちろん危険は存在する。しかし、基礎的な知識があれば、危険を回避すること、あるいは少なくとも軽減することが可能となる。古い諺にあるように「知識は恐怖を拭い去る」。

最終的には、あなた自身があなたの安全を確保しなければならない。危険には、熟考した上で受け入れてよいものと、決して飛び込んではならないものがある。あなた自身と部下のためにその違いを見極めるのに、本書が示す知識が役立つだろう。



ICRC